



TITLE:

古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の研究：その言語とテキストの構造

AUTHOR(S):

佐藤, 昭裕

CITATION:

佐藤, 昭裕. 古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の研究：その言語とテキストの構造. 京都大学文学部研究紀要 1992, 31: 231-312

ISSUE DATE:

1992-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/73053>

RIGHT:

古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の研究

—— その言語とテキストの構造 ——

佐 藤 昭 裕

目 次

- 0. 序
- 1. 『過ぎし年月の物語』の成立とその構成
 - 1.1. 『過ぎし年月の物語』の成立
 - 1.2. 『過ぎし年月の物語』の内容と構成
- 2. テキストのタイプとテキストを形成する言語的手段
 - 2.1. 『過ぎし年月の物語』におけるテキストのタイプ
 - 2.2. 動詞のテンス・アスペクト形式、語順、照応形の使用
- 3. 『過ぎし年月の物語』におけるテキストのタイプとその言語的特徴
 - 3.1. 「事実叙述」タイプのテキスト
 - 3.2. 「コメント」タイプのテキスト
 - 3.3. 「直接引用」タイプのテキスト
 - 3.4. テキストのタイプとその特徴：まとめ
- 4. 数量的考察
 - 4.0. はじめに
 - 4.1. 動詞のテンス・アスペクト形式とテキストのタイプ
 - 4.2. 語順とテキストのタイプ
 - 4.3. 主語の照応関係、語順とテキストのタイプ
- 5. 『過ぎし年月の物語』の成立とその言語的特徴
- 6. 結び

0. 序

§ 1 スラブ世界における最も古い文献言語としてスラブ語の史的研究に重要な価値を持つのが、9世紀末に福音書、詩篇、その他教会文書の翻訳のための言語としてマケドニアで成立し、10世紀末以降の写本によって今日に伝えられる古代教会スラブ語（Old Church Slavonic）である。しかしそのテク

ストは、翻訳言語としての性格により、語順や動詞のテンス・アスペクト形式などの点で可能な限りギリシア語原典の形式を尊重したものであり、統語法、文法形式の意味といった分野において、この言語をもとにスラブ語本来の特徴を窺い知ることはきわめて困難である。これに対し、キエフにおいて12世紀はじめに成立した『過ぎし年月の物語』¹⁾ (Povest' vremennyh let) は、古代教会スラブ語初期の文献に比べると2世紀以上も後のものであるが、当時のロシア人の手によって成ったものであり、初期スラブ語の統語論的、意味論的研究、さらに談話構造の解明に対しては、古代教会スラブ語以上に重要な資料を提供するものである。以下でその言語を調査し、特に談話的、テクスト的な観点からその特徴を論じたい。

古ロシア語²⁾の統語論的研究について、まず一般的なものとして Lomtev (1956) があげられる。Ivanov (1983) その他の歴史文法にも若干の記述がある。さらに、古ロシア語から東スラブ諸語への分化の過程を対象としたものとして Borkovskij (1968) をはじめとする旧ソ連邦科学アカデミー・ロシア語研究所刊の『東スラブ諸語比較歴史統語論』シリーズや Borkovskij ed. (1983) などが、また特に『過ぎし年月の物語』の言語を扱ったものとして Karskij (1928), Karskij (1929) などがあげられる。これらの研究により、初期の東スラブ語における文の構造や種々の文法形式の機能、前置詞と名詞、動詞と名詞の結合といった文を構成する諸要素間の関係がかなり包括的に記述されてきた。しかし、そこでは対象となる種々の要素が個別に取り扱われており、それらの言語的、統語的な手段が相互にどのように関連しテクストを形成していくのかという視点に立つ研究は、従来必ずしも十分ではなかった。

そこで、以下では『過ぎし年月の物語』の言語を対象に、そのテクストの構造について考え、テクストのタイプ、全体のテクストを構成するそれぞれの部分と、動詞のテンス・アスペクト形式、語順、照応形の使用といった言語的手段が、どのように関係しているのかについて記述を試みたい。

1. 『過ぎし年月の物語』の成立とその構成

1.1. 『過ぎし年月の物語』の成立

§ 2 西暦 988 (989) 年、キエフのヴラヂミル公が自らキリスト教の洗礼を受けるとともに、キエフ公国に公にキリスト教を受容した。これが「ルシ³⁾の洗礼」と呼ばれる出来事である。その後 11 世紀になり、その子ヤロスラフ⁴⁾の時代に、修道院の僧たちを中心に識字層が増え、オストロミール福音書 (Ostromirovo evangelie 1056 — 1057 goda) をはじめとする教会暦にそって配列された福音書の抜粋 (アブラコス) や、典礼書、聖者伝などが古代教会スラブ語から盛んに筆写され、あるいはギリシア語から直接翻訳された。一方で 11 世紀中葉以降ロシア人の手になる種々のジャンルのオリジナルな著作も行われはじめた。『ボリスとグレブ伝』、『フェオドシー伝』などのロシア起源の聖者伝やロシア人の僧による説教などの宗教的文書、ここで扱う『過ぎし年月の物語』をはじめとする年代記、そして gramota と呼ばれる世俗の事務、商業文書である。

その中で年代記は、内容面からは、戦争や政治的事件などの世俗の出来事の歴史的な記録と並んで、宗教的な教えや事件の記述、さらには外国との交渉の記録や条約、法律文書などを含み、また言語面からは地の文に現れる書き言葉と直接話法によって引用された話し言葉の両方の資料を提示するという点で、古ロシア語の記述研究を行うためにきわめて貴重な存在である。一方で、この年代記ははじめから終わりまで一人の人物によって書かれたものではなく、キエフのペチェルスキー (洞窟) 修道院で僧たちにより幾世代にもわたり書き継がれてきた歴史的な記録や聖者伝、その他の記述を資料に数次にわたって編纂、集成されたものであり、全体として古ロシア語の構造上の特徴をよく示しているとはいえ、決して均質なものではない。従ってこれを資料に古ロシア語について論じる場合には、それぞれの部分の違い、集成の過程にも十分な注意を払う必要がある。

§ 3 この集成作業がどのように行われたかについては、さまざまな見解

があるが、ここではシャフマトフに従い、次のような5次にわたる集成の段階⁵⁾を考えることにする。

1039年：最古の集成 (Drevnejšij letopisnyj svod)

1073年：Nikonの集成 (Svod Nikona)

1093—95年：はじめの集成 (Načal'nyj svod)

1113年：Nestr編『過ぎし年月の物語』 (Osnovnaja redakcija)

1116年：Sil'vestr編『過ぎし年月の物語』 (Sil'vestrovskaja redakcija)

2次以降の集成、編纂作業では、先行する版に記録された年代以降の部分を追加するだけでなく、先行する集成にすでに現れている年の記事に重ねて書き加えることも行われた。また、公の代替わりに際し、先行する集成の一部が大幅に改められた場合もある。この年代記の基本的な形は1113年のネストルの集成作業によってできあがったと考えられる。しかし、今日に伝えられるのは1116年のシリヴェストル編『過ぎし年月の物語』のみである。そしてこの間ルシの支配権がスヴァトポルク公からヴラヂミル・モノマフ公に移ったことにともない、最後の20年間についての記述が大幅に書き換えられたと考えられる。このように、『過ぎし年月の物語』のテキストは重層的であり、それぞれの集成段階におけるその形式をそのまま観察することはできない。

最終段階のシリヴェストル編『過ぎし年月の物語』も1116年集成時の原典がそのまま今日に伝えられているわけではない。14世紀以降の2つの系統の写本によって伝えられるに過ぎない⁶⁾。ここでは、1116年の集成に最も近い形を伝えとされるラヴレンチー年代記を資料として用いることとし、テキストとしては1926年に刊行されたカールスキー (E. F. Karskij) 校訂のロシア年代記全集第1巻第1部第2版⁷⁾を使用した。

1.2. 『過ぎし年月の物語』の内容と構成

§ 4 『過ぎし年月の物語』では旧約聖書のノアの洪水からはじめて、スラブ人が起こり、キエフの町を建設し、キリスト教を受容し、ルシの国家を

建設していく様子が描かれる。最初の部分には年代の記述がないが、西暦 852 (853)⁸⁾ 年以降年代が明記され編年体の記録が始まる。各年の記述は印刷されたテキストで 1, 2 行程度のものから 10 数コラムにもおよぶ長いものまでさまざまである。ルシの最初の支配者リュリク、その後継者でキエフに公国の本拠を定めたオレグにはじまり、ルシの興隆のもとを築いたヴラヂミルを経てイジャスラフの子スヴァトポルクに至るまで 10 代にわたる公たちの事績、その戦争と平和の物語が描かれる。キエフ建設の初期の段階における周辺諸民族との戦い、キリスト教受容の経緯、ルシの支配権をめぐる抗争、ロシアにおける最初の聖者とされたボリスとグレブの兄弟の物語が語られ、この年代記が綴られたペチェルスキー修道院の事績が記される。

『過ぎし年月の物語』の成立に関連して最も重要な情報を提供すると考えられるいま 1 つの年代記が、キエフの起源から書き起こし 1446 (1447) 年までの記事を含む『ノヴゴロド第一年代記新輯』(Novgorodskaja pervaja letopis' mladšego izvoda) である。これは 15 世紀前半から中葉にかけての幾つかの筆跡によるコミシオン写本 (Komissionnyj spisok) 他の写本で伝わる。その中で 945 (946) 年から 1016 (1017) 年の前半までの記事、1052 (1053) 年から 1074 (1075) 年までの記事が『過ぎし年月の物語』の記事とほぼ完全に一致することから、シャフマトフは『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第一年代記新輯』に共通する原資料の存在を推定している。⁹⁾

以下に『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第一年代記新輯』の 1110 年の記事までの対応関係を簡単に示しておく。POVEST は『過ぎし年月の物語』、NOVMLAD は『ノヴゴロド第一年代記新輯』である。『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第一年代記新輯』は 945 (946) 年以前の記事では、「ノアの洪水、諸民族の起源」の有無を除けば、取り扱われている主題については一応の一致を示す。しかしその記述はかなり異なっており、同一の事件が配置されている年号にも食い違いがある。また前者にはギリシア起源の資料に基づいて書かれたと思われる記事が多く見られるが、後者にはこれが欠けている。両者の一致は 945 (946) 年に始まり、1016 (1017) 年まで一部を除き

ほぼ完全な一致が見られる。1016（1017）年からヤロスラフの治世の末期1051（1052）年までは『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第一年代記新輯』の記述は離れ、前者ではかなり詳細な記述が見られるが後者の記述は断片的である。その後1052（1053）年から1074（1075）年まで再びほぼ完全な一致が見られる。その後両者の記述はまた離れ、『過ぎし年月の物語』では「ペチェルスキー修道院長フェオドシーの死とペチェルスキー修道院の僧たちの事績」，「スヴァトポルク公の治世」についての詳細な記述が行われ、1096（1097）年の記事に続いて「ヴラヂミル・モノマフの教訓，手紙，祈り」が挿入¹⁰⁾されている。

POVEST		NOVMLAD	
年代以前	[序文]	≠	[序文]
	[ノアの洪水，諸民族の起源] ^a .	—	年代の配列，内容ともかなり異なる。
	[キエフの起源]	≠	[キエフの起源]
	[オレグの治世]	≠	[オレグの治世]
	[イゴリの治世]	≠	[イゴリの治世]

945

A. ↘			
[945]	[オリガの復讐]	=	[オリガの復讐]
[946]	[スヴァトスラフの治世]	=	[スヴァトスラフの治世]
[973]	[ヤロポルクの治世]	=	[ヤロポルクの治世]
[980]	[ヴラヂミルの治世]	=	[ヴラヂミルの治世]
[986]	[ルシの洗礼]	=	[ルシの洗礼]
	—		[概略ルシの歴史] ^b .
[1015]	[ボリス，グレブの殺害]	=	[ボリス，グレブの殺害]
[1015]	[ボリスとグレブ頌] ^c .	—	
[1016]	[ヤロスラフとスヴァトポルクの戦い，ドネプルの両岸に対峙]	=	[ヤロスラフとスヴァトポルクの戦い，ドネプルの両岸に対峙]

1016

	POVEST（詳細）	≠	NOVMLAD（簡略）
B. ↘			
[1016]	[ヤロスラフの治世始まる]	≠	[ヤロスラフの治世始まる]
	—		[法律制定：RUSSKAJA PRAVDA]
[1020]	[ヴラヂミル生まれる]	≠	[ヴラヂミル生まれる]

【1030 年代末：最古の集成】

[1043]	[ヴラヂミルのグレキ攻略]	
[1049]	——	[ノヴゴロドの教会についての記事]
C. ↘		
[1051]	[ペチェルスキー修道院の事績]	——

1052

	POVEST（詳細）	=	NOVMLAD（詳細）
[1053]	[ヴラヂミル・モノマフ誕生]	=	[ヴラヂミル・モノマフの誕生]
[1055]	[イジャスラフの治世]	=	[イジャスラフの治世]

【1070 年代はじめ：ニコンの集成】

D. ↘		
[1074]	[フェオドシーの死]	= [フェオドシーの死]

1074

	POVEST（詳細）	≠	NOVMLAD（簡略）
[1074]	[フェオドシーの死の詳細とペチェルスキー修道院の僧たちの列伝]	——	
[1078]	[フセヴォロドの治世]	≠	[フセヴォロドの治世]
[1091]	[フェオドシーを移す]	≠	[フェオドシーを移す]
	[筆者「私」が体験したその詳細]	——	
[1093]	[スヴァトボルクの治世]	≠	[スヴァトボルクの治世]

【1093 — 95：はじめの集成】

[1096]	[スヴァトボルク、ヴラヂミルとオレグの対立]	——
	[ヴラヂミル・モノマフの教訓]	——
[1097]	[ルシの公たちの内紛に際し私「ヴァシリー」が調停]	——
[1110]	[シリヴェストルによるあとがき]	——

【1113：ネストル編『過ぎし年月の物語』】

【1116：シリヴェストル編『過ぎし年月の物語』】

§ 5 本稿の議論は『過ぎし年月の物語』全体の言語を対象とするものであるが、数量的考察に当たっては、カールスキー版テキスト全 286 コラムか¹¹⁾

ら次の4箇所約44コラム分を選び（上図A., B., C., D.の矢印で示した箇所）、定動詞ならびに分詞を述語とする1600余の節（clause）をもとに議論を行った。

- A. 945年～955年:「イゴリの死」,「妻オリガの復讐」,「オリガのコンスタンチノープル行きと受洗」などのエピソード（約10コラム）
- B. 1016年～1047年:「ヤロスラフとスヴァトポルクの争い」,「ヤロスラフの勝利と権力確立」,「ヤロスラフがキエフの町の基礎を置く」,「ヤロスラフの治世の終わり」などのエピソード（約14コラム）
- C. 1051年:「ペチェルスキー修道院の始まりの物語」（約5コラム）
- D. 1074年:「ペチェルスキー修道院長フェオドシーの死とその詳細」,「僧たちの列伝」（約15コラム）

A.は『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第一年代記新輯』の完全な一致が始まった直後の部分、すなわち両者に共通するより古い原資料の特徴を伝えられる部分である。B.は『過ぎし年月の物語』と『ノヴゴロド第一年代記古輯』の内容が分かれ、前者に独自の記述が始まってから、1039年のいわゆる最古の集成が行われる前後の記事を含む。この中で最古の集成後、すなわち1040年以降の記事は約2コラム分である。内容的にはA., B.ともに世俗の出来事の記録である。C.の部分も『過ぎし年月の物語』における独自の記述であるが宗教的な主題の物語の例として選んだ。D.もはじめの部分をのぞいて大部分は『過ぎし年月の物語』に独自の記述であり、かつ宗教的な主題の物語である。この部分は1070年代はじめのいわゆる「ニコンの集成」から1113年の集成者ネストルまで、いずれかの集成者が自ら体験した出来事をそのまま記述した可能性があることから資料とした。これら、集成以前の原記録の成立年代も異なり、集成の段階も異なり、また内容的にも変化に富む各部分のデータを総合することにより、¹²⁾『過ぎし年月の物語』の全体としての特徴を明らかにしたい。

2. テクストのタイプとテキストを形成する言語的手段

2.1. 『過ぎし年月の物語』におけるテキストのタイプ

§ 6 機能的な観点からテキストを分類すると、大きく「説明」(descriptive)のテキストと「語り」(narrative)のテキストに分けることが出来る。Beaugrande and Dressler (1981)によれば、前者は「知識の領域を豊かにするために」、¹³⁾ 後者は「行為や出来事のある特定の順序で配列するために」¹⁴⁾ 使用される。この機能的な分類は当然形式的な特徴と対応している。Weinrich (1977)は動詞の時制形式を次の二つに分け、「説明の時制群」すなわち現在、未来の諸形式が明確に優位を占めるテキストを「説明のテキスト」、「語りの時制群」すなわち過去の諸形式が明確に優位を占めるテキストを「語りのテキスト」とする。それぞれの時制群にこういった時制形式が入るかは言語ごとに異なる。

	「説明の時制群」	「語りの時制群」
ドイツ語	現在, 現在完了, 未来, 未来Ⅱ	過去, 過去完了, 条件法, 条件法Ⅱ
フランス語	現在, 複合過去, 未来Ⅰ, 未来Ⅱ	単純過去, 半過去, 大過去, 条件法Ⅰ, 条件法Ⅱ, 前過去
ギリシア語	現在, 現在完了, 未来 未来Ⅱ (未来完了)	未完了過去, アオリスト, 過去完了

これにならえば、古ロシア語のテンス・アスペクト形式も次の2つのグループに分けることができる。

	「説明の時制群」	「語りの時制群」
古ロシア語	不完了体現在 完了体現在 完了体現在完了 不完了体現在完了など	完了体アオリスト 不完了体アオリスト 不完了体未完了過去 完了体過去完了 不完了体過去完了など

ワインリヒの「説明の時制群」, 「語りの時制群」という用語は必ずしも一般に受け入れられているわけではないが, それぞれのグループをまとめて呼ぶためには便利のため, 以下でも必要に応じて用いることにする。完了体・不完了体過去分詞, 不完了体現在分詞などの分詞形は固有の時の意味を持たず, 共起する定動詞によってその意味を決定されるので, それ自身はいずれの時制群にも属さず, どちらのテキストにも現れることができる。

しかしながら, 実際のテキストの分析に当たっては, このような形式的な基準が必ずしもつねに容易に適用されるわけではない。『過ぎし年月の物語』は全体としては「語りの時制群」の使用が優位を占め, 明らかに語りのテキストに分類される。しかしその語りの中でしばしば「説明の時制群」に属する形式が現れるのも事実である。例えば, 次は 1019 (1020) 年の記事の後半, スヴァトポルク公とヤロスラフ公の 2 人が, 長い抗争の末リト川で最後の決戦を行い, スヴァトポルクが敗北し, 失意の内に生涯を終えた直後の記述である。ここで使用されている「説明の時制群」に属する形式 *jestь*^{V1} *svjazanъ* 「～するのである (完了体迂言的受動現在完了)」, *jestь*^{V2} 「ある (不完了体現在)」, *ischoditъ*^{V3} 「出ている (不完了体現在)」は, 語りのテキストの中にいわば埋め込まれた, 小さな説明のテキストを構成していると考えべきなのだろうか。それとも, 語りの中における補助的な情報としての背景を示している¹⁶⁾と解釈すべきなのだろうか。

- (1) ... i po sm(e)rťi věčno mučimъ *jestь*^{V1}(ifv.pr.: pfv.AnPas.pf.) *svjazanъ*(pfv.pt.pas.prt.). *jestь*^{V2}(ifv.pr.) že mogyla^{S2} jeho v pustyni i do sego dne. *ischoditъ*^{V3}(ifv.pr.) že ot neja smradъ^{S3} zolъ. se že B(og)ъ^{S4} pokaza^{V4}(pfv.aor.) na nakazanъje knjazemъ Rusъsky(m). [145–17]

(……そして(彼は)死後も永遠に苦しめられるのである^{V1}。彼の墓は^{S2}今に至るまで荒野の中にあり^{V2}, そこからはひどい悪臭が^{S3}出ている^{V3}。これは神が^{S4}ルシの公たちに対する教えとして示した^{V4}のである。)

§ 7 このような現在形が使用される前後の文脈を見ると, その生起が特

定の環境に限られていることに気づく。ある人物を主人公とする歴史的な事件の一連の事実関係の記述が終わった後、その人物やそれらの出来事に対するいわば評価とでもいうべき部分で、この現在形が使用されるのである。この評価の部分は先行する歴史的事実の記述と、それに続く次の事件の記述の間にあって、内容的にもまとまった、1つの独立したテキストを構成していると見ることができる。この評価は、キリスト教徒の立場から行われ、代々書き継がれて来た当初の記録の中にはじめから含まれていたというより、むしろ後の集成の過程で書き加えられたと考えるのが自然である。形式的な面から言えば、ここでは現在の諸形式「説明の時制群」と過去の諸形式「語りの時制群」が混在して使用される。前者は語り終えた一連の事実に対するその時点での評価を下すために使用され、後者は語り終えた事件を今一度全体として捉えその生起を確認するとともに、編纂者による評価を補強するために聖書の記述を引用する際に使用される。

具体的に示すため例(1)の前後の部分を引きいてみる。先行する部分では、約13コラムにわたり、父ヴラヂミルの死後ルシの権力を握り悪行を重ねたスヴァトポルク公の5年間の治世について、具体的に記述されている。その最後の部分、スヴァトポルクの敗北と死の記事を次に示す。ここでは一貫して「語りの時制群」に属する過去形、すなわち完了体アオリスト、不完了体アオリスト、不完了体未完了過去、およびそれ自身は固有の時の意味を持たないが共起する定動詞によってその意味が決定される分詞形を用いて事件が具体的な出来事として語られる。¹⁷⁾

- (2) ... K večeru že *odolě*^{V1}(pfv.aor.) Jaroslavъ^{S1}. a S(vja)topolkъ^{S2} *běža*^{V2}(ifv.aor.). i *běžaštju*^{V3}(ifv.pr.prt.) jemu^{S3} *napade*^{V4}(pfv.aor.) na нь *běsъ*^{S4}. i *raslaběša*^{V5}(pfv.aor.) kosti^{S5} jeho. ne *možaše*^{V6}(ifv.impf.) sědět [na koni]. i *nesjachutъ*^{V7}(ifv.impf.) i na nosilěchъ. *prinesoša*^{V8}(pfv.aor.) i къ Bestoju *běgajušte*^{V9}(ifv.pr.prt.) s nimъ. onъ^{S10} že *gl(agola)še*^{V10}(ifv.impf.) “poběgněte so mnoju. ženutъ po nasъ.” otroci že jeho *vsylachu*^{V11}(ifv.impf.) protivu. “jeda kto ženutъ po nasъ.” i ne *bě*^{V12}(ifv.impf.) nikogože^{S12} vslědъ gonjaštago. i *běžachu*^{V13}(ifv.impf.) s nimъ. onъ^{S14} že v nemošti *leža*^{V14}(ifv.aor.). [i] *vъschopivъsja*^{V15}(pfv.pt.prt.) *gl(agola)še*^{V16}(ifv.impf.). “ose

ženutъ [o ženut] poběgněte.” ne *možaše*^{V17}(ifv.impf.) terpěti na jedinomъ městě. i *proběža*^{V18} (pfv.aor.) Ljadъskuju zemlju. *gonimъ*^{V19} (ifv.pr.pas.prt.) B(ož)ymъ gněvomъ. *priběža*^{V20}(pfv.aor.) v pustynju. mežju Ljachy i Čechy. *isproverže*^{V21}(pfv.aor.) zlē životъ svoi [v tomъ městě]. [144–27]

(……夕方近くになってヤロスラフが^{S1}勝った^{V1}。スヴァトポルクは^{S2}逃げた^{V2}。そして彼が^{S3}逃げる^{V3}途中、悪魔が^{S4}彼に襲いかかった^{V4}。彼の四肢は^{S5}萎え^{V5}、[馬に] 乗っていることができなかった^{V6}。そこで(人々は)彼を担架に乗せて運んだ^{V7}。(人々は)彼と共に逃げながら^{V9}彼をベレスチェに運んで来た^{V8}。彼は^{S10}言い続けた^{V10}、「私を連れて逃げろ。私たちの後を(敵が)追って来る」と。(人々は)彼の下級従士たちを(敵に)向け送って^{V11}(言った)、「誰か我々を追いかけてくる者はいないか」と。しかし、誰も後を追って来る者は^{S12}いなかった^{V12}。そして(人々は)彼を連れて逃げ続けた^{V13}。彼は^{S14}病に伏し^{V14}、身を起し^{V15}では言い続けた^{V16}、「ああ、そら、(敵が)追いかけて来る。[追いかけて来る。] 逃げろ」と。彼は一か所に(とどまることに)耐えられなかった^{V17}。そして、神の怒りに追われて^{V19}リャヒの国を通り過ぎ^{V18}、リャヒとチェヒの間の荒野にまで逃げて来て^{V20}、[その場所で] 悲惨の内に自分の生涯を終えた^{V21}。)

このように具体的事実がすべて語られた後、ここでの主人公スヴァトポルクの生前の所業とその死に対しキリスト教的な立場から評価が下される。すなわち：

- (3) jehože_i po pravdě. jako nepravednu sudu^{S1} *našedšju*^{V1}(pfv.pt.prt.) na nъ_i. po ošestvii sego světa. *prijaša*^{V2} (pfv.aor.) muky^{S2} okanъnago_i *pokazovaše*^{V3} (ifv.impf.) javě poslanaja pagubnaja rana_j^{S3}. vъ sm(e)rtъ nemilostivno ϕ_j ^{S4} *vъgna*^{V4}(pfv.aor.) ϕ_{iACC} . i po sm(e)rti věčno mučimъ ϕ_i ^{S5} *jestъ*^{V5}(ifv.pr.: pfv.AnP.pf.) svjazanъ(pfv.pas.pt.prt.). *jestъ*^{V6}(ifv.pr.) že mogyla_k^{S6} jeho_i v pustyni i do sego dne. *ischoditъ*^{V7}(ifv.pr.) že ot neja_k smradъ^{S7} zolъ. se_Q že B(og)ъ_i^{S8} *pokaza*^{V8}(pfv.aor.) na nakazanъje knjazemъ_m Rusъsky(m). da ašte sii_m^{S9} ještě sice že *stvorjatъ*^{V9}(pfv.pr.) [se_Q ϕ_m ^{S10} *slyšavše*^{V10} (ifv.pt.prt.) tu ž(e) kaznъ ϕ_m ^{S11} *priimutъ*^{V11}(pfv.pr.). no i bolъši seje. ponež(e) ϕ_m ^{S12} *vědaja*^{V12}(ifv.pr.prt.) se_Q ϕ_m ^{S13} *sъtvorjatъ*^{V13}(pfv.pr.)] takože zlo. ubiistvo 『7 bo mъstii *prija*^{V14}(pfv.aor.) Kainъ_n^{S14} ϕ_n ^{S15} *ubivъ*^{V15}(pfv.pt.prt.) Avelja. a Lamechъ_o^{S16} 70. Poneže *bě*^{V17}(ifv.impf.: ifv.AnImpf.) Kainъ_n^{S17} ne vědyi(ifv.pr.prt.) mъštenъja prijati(pfv. Inf.) ot B(og)a_i. a Lamechъ_o^{S18} *vědyi*^{V18}(ifv.pr.prt.) kaznъ byvši na praroditelju jeho. ϕ_o ^{S19} *stvor*^{V19}(pfv.aor.) ubiistvo. *reč(e)*^{V20}(pfv.aor.) bo Lamechъ_o^{S20} kъ svoima ženoma. “muža ubichъ vъ vredъ mně. i ounošju vъ jazvu mně. těmъže” ϕ_o ^{S21} *reč(e)*^{V21}(pfv.aor.) “70 Mъstii na mně. poneže” ϕ_o ^{S22} *reč(e)*^{V22}(pfv.aor.) “[se] vědaja stvorichъ se”

Lamech_o^{S23}. ubi^{V23}(pfv.aor.) dva brata Jenochova. i ϕ_o ^{S24} poja^{V24}(pfv.aor.) sobě ženě
jeju. se_i že S(vja)topolk_i^{S25} novyi Avimelech_p. iže_p^{S26} sja bě^{V26}(ifv.impf. : pfv.plpf.)
rodil_i(pfv.l-prt.) ot preljubodějan_{ja}. iže_p^{S27} izbi^{V27}(pfv.aor.) bratju svoju. s(y)ny
Gedeony.』 tako i sb_i^{S28} bys(t)^{V28}(ifv.aor.). [145-14]

(正義に照らして正しくないものとして彼_iの上に裁きが^{S1}降り^{V1}, この世から去った後に
種々の苦しみ^{S2}がこの呪われたもの_iを捕えた^{V2}のである。(神によって)送られた破滅的な
打撃_iが^{S3}明らかに現れ^{V3}, 容赦なく ϕ_{iACC} (彼を)死に ϕ_i ^{S4} 追い込んだ^{V4}。そして ϕ_i ^{S5} (彼
は)死後も永遠に苦しめられるのである^{V5}。彼_iの墓_kは^{S6}今に至るまで荒野の中にあり^{V6}, そ
こ_kからはひどい悪臭が^{S7}出ている^{V7}。これ_Qは神_iが^{S8}ルシの公たち_mに対する教えとして示
した^{V8}ものである。もしこの人々_mが^{S9}, [このこと_Qを ϕ_m ^{S10} 聞いた^{V10}上で], なお同じよう
に行う^{V9}ならば, [同じ罰を ϕ_m ^{S11} 受けるであろう^{V11}, それもこれよりなお大きな (罰を)。
何故ならこのこと_Qを ϕ_m ^{S12} 知りながら^{V12}] 同じように邪悪な殺人を [ϕ_m ^{S13} 行う^{V13}からであ
る]。『カイン_nは^{S14}, アベルを ϕ_n ^{S15} 殺して^{V15}, 7つの復讐を受けた^{V14}が, レメク_oは^{S16} 70 の
(復讐を受けた)。というのはカイン_nは^{S17}神_iから復讐を受けることになるのを知らなかつ
た^{V17}が, レメク_oは^{S18}彼の先祖に加えられた罰を知りながら^{V18}, ϕ_o ^{S19} 殺人を行った^{V19}からで
ある。レメク_oは^{S20}自分の2人の妻に言った^{S20}, 「私は私の痛手のために人を殺した。そし
て私の傷のために若者を (殺した)。そのことのゆえに —— ϕ_o ^{S21} (彼は) 言った^{V21} ——
70の復讐が私に (あった) —— ϕ_o ^{S22} (彼は) 言った^{V22} —— [そのことを] 知りながらこれ
を行ったからである」。レメク_oは^{S23}エノクの2人の兄弟を殺し^{V23}, 彼らの妻を自分の ϕ_o ^{S24}
ものとした^{V24}。この_iスヴァトポルク_iこそは^{S25}, (関係代名詞_p^{S26}) 姦淫から生まれ^{S26}, (関
係代名詞_p^{S27}) ギデオンの子である自分の兄弟を殺した^{V27}, 新しいアビメレク_pである。』こ
のもの_i (=スヴァトポルク) も^{S28}同じであった^{V28}。)

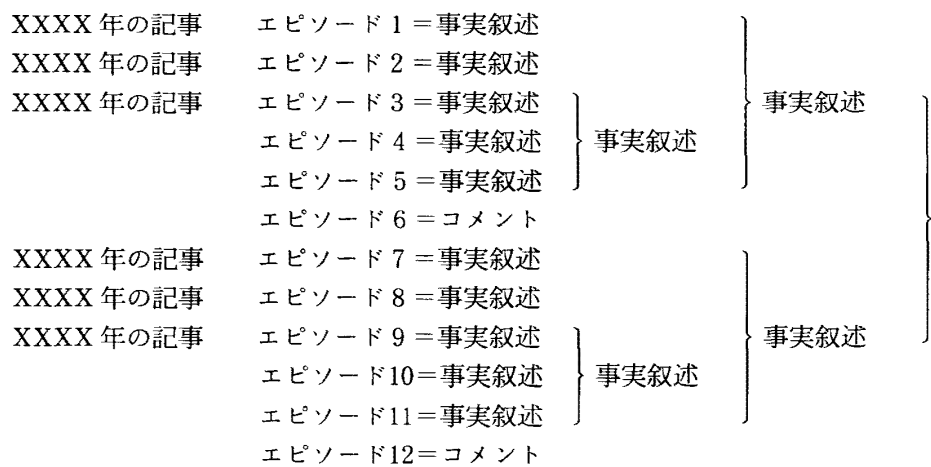
まず過去の諸形式と分詞を用いて事件の全体が確認される (V1~V4)。こ
れはすでに語られた個々の具体的な事実をもう一度述べ直すのではなく, 事
件を全体として捉えその生起を確認するのである。続いて「説明の時制群」
に属する諸形式を用いて, 「編纂の時点における現在」の事実が述べられる
(V5~V7)。そして再び過去形を用いて事件が要約される (V8)。さらに完了
体現在と分詞を用いて, 今後起こり得ることがより一般的な形で述べられる
(V9~V13)。続いてこの編纂者の見解を補強し権威づけるために, 聖書のさ
まざまな事例があたかも実際に起きた出来事であるかのように, 過去の諸形
式を用いて述べられる (V14~V27:『』の部分)。最後にスヴァトポルクの行為
がもう一度, 今度はこの聖書の記述と結び付けて要約される (V28)。

確かに、ここで使用されている時制形式には一貫性がない。²⁰⁾ 過去、現在、そして未来（完了体現在）とバラバラであり、現実の事件、聖書の記述、現在の状況、未来の可能性というようにさまざまな出来事、状況が述べられている。しかし、全体としてその内容は、直前まで語られてきた「スヴァトポルクの治世とその死」をキリスト教徒としての立場からどのように評価すべきかという内容に収斂している。²¹⁾ 形式的にも、照応的な指示代名詞の使用、同じ名詞句の反復あるいは省略（ゼロ代名詞の使用）、*sice* 「同じように (so)」などの代用表現の使用により、テキストの結束性 (cohesion) が示されている。また、現実の事件や状況が記述される部分と聖書の事績が参照される部分も *B(og)ъ*^{S8} 「神が」、*ot B(og)a*_i 「神から」、および *ѡ*_i^{S5} 「ゼロ代名詞＝スヴァトポルク」、*se_i že S(vja)topolkъ*_i^{S25} 「このスヴァトポルク」という同一指示の名詞句の使用により、また *sudu* 「裁き」、*sm(e)rtъ* 「死」、*kaznъ* 「罰」（以上現実の出来事の記述の部分に現れる）と *ubiistvo* 「殺人」、*mъstii* 「復讐」、*ubivъ* 「殺す」、*kaznъ* 「罰」、*ubi* 「殺した」、*izbi* 「殺した」（以上聖書参照の部分に現れる）などの同一の名詞句の反復、あるいは意味的に何らかの共通性を持ち、互いに同一文脈中に現れる傾向にある語彙の使用により結びつけられている。²²⁾ さらに聖書の参照をはさんだ前後の部分も *tako i sѡ_i^{S28} bys(t)*^{V28} 「このもの (=スヴァトポルク) も同じであった」というように照応形の使用により結び付けられている。以上、例(3)に示した部分は時制形式の使用が一貫しないという点を除けば、内容的にも、またそこに用いられている種々の言語的手段の働きから見ても、1つの結束的なテキストを構成していると考えられる。このような評価が終わった後、この戦いの勝者ヤロスラフ公を主人公とする新たな物語が始まるのである。

- (4) *Jaroslavъ*^{S1} *že sѣde*^{V1}(pfv.aor.) *Kyjevѣ*. *ѡ*^{S2} *uterъ*^{V2}(pfv.pt.prt.) *pota s družinoju svojeju*. *ѡ*^{S3} *pokazavъ*^{V3}(pfv.pt.prt.) *pobědu i trudъ velikъ*. [146-8]

(ヤロスラフは^{S1}キエフに座し^{V1}, 勝利と偉大な功績を^{S3}顕わして^{V3}, 自分の従士団と共に汗を^{S2}拭った^{V2}。

以上の観察に基づき、例（２）や（４）に示されるような通常の語りの部分と、（３）で示したような評価の部分に分けて考えることにしたい。すなわち、（３）のようなタイプのテキスト中に現れる動詞現在形の部分だけを取り出して語りの中に挿入された説明のテキストとして扱ったり、あるいは語りのテキスト中で現在形によって背景が示されていると解釈したりせず、この部分が全体として先行部分からも後続部分からも独立した１つのテキスト単位を作っていると考えたい。このテキストは、ある人物に関する歴史的な出来事の記述が一通り終わった後、次の一連の出来事の記述が始まるまでの間に現れるという分布を持つと同時に、形式的には現在の諸形式と過去の諸形式が混在して使用され、内容的には編纂者の立場、編纂者の時代の観点からそれまで述べてきた歴史的事実を要約し、評価するという特徴を持っている。このようなテキストの部分を語りか説明かという２分法に強制的に割り当てることは単に困難である以上に、年代記の言語における有意義な特徴を見落とす可能性もある。以下では、通常の歴史的な出来事の記述、事実の記述を行う部分のテキストとこのような評価を行う部分のテキストを分けて考えることとし、前者を「事実叙述」タイプのテキスト、後者を「コメント」タイプのテキストと呼ぶことにする。それぞれの部分の関係は模式的に次のように示される。



各年の記事は1つの事件の記述（エピソード）であったり、あるいは幾つかの事件の記述であったりする。それぞれのエピソードが「事実叙述」タイプのテキストを作る。さらにこれらのテキストがまとまってより大きな「事実叙述」タイプのテキストを作る。このような「事実叙述」タイプのテキストによりある一人の人物を主人公とする一連の記述が終わった後、「コメント」タイプのテキストによりその評価が行われる。そして「事実叙述」タイプの(大)テキストと「コメント」タイプのテキストが交替しつつ全体の物語が語られていくのである。

§ 8 上で区別した「事実叙述」と「コメント」という2つのタイプのテキストは、いずれも語りの地の部分に属するものである。これと並んで古ロシア語の記述的研究に重要な資料を提供するのが直接話法を用いて引用される対話の部分である。上例（2）の中にも次のような例が見られる。

(5 = 2) ... prinesoša i kъ Bestoju bĕgajušte s nimъ. onъ že gl(agola)še(ifv.impf.) “pobĕgnĕte^{V1}(pfv.Impr.) so mnoju. ženutъ^{V2}(ifv.pr.) po nasъ.” otroci že jeho vsylachu protivu. “jeda kto^{S3} ženetъ^{V3}(ifv.pr.) po nasъ.” i ne bĕ nikogože vslĕdъ gonjaštago. ... onъ že v nemošti leža. [i] vъschopivъsja gl(agola)še(ifv.impf.). “ose ženutъ^{V4}(ifv.pr.) [o ženutъ^{V5}(ifv.pr.)] pobĕgnĕte^{V6}(pfv.Impr.)” ... [145-3]

(…… (人々は) 彼と共に逃げながら彼をベレスチエに運んで来た。彼は言い続けた, 「私を連れて逃げろ^{V1}。私たちの後を(敵が) 追って来る^{V2}」と。(人々は) 彼の下級従士たちを(敵に) 向け送って(言った), 「誰か^{S3}我々を追いかけてこないか^{V3}」と。しかし, 誰も後を追って来る者はいなかった。……彼は病に伏し, 身を起しては言い続けた, 「ああ, そら, (敵が) 追いかけて来る^{V4}。[追いかけて来る^{V5}。] 逃げろ^{V6}」と。……)

このような直接引用文は通常, 「事実叙述」タイプのテキスト中で伝達動詞(下波線で示す)によって導かれる。場合により伝達動詞が省略されることもある。動詞は現在あるいは現在完了の形をとることが多く, 引用された一組の対話が1つの説明のテキストを構成すると考えられる。時として完了体アオリストなどの過去形が現れることもある。例えば,

(6) ... i povĕdaša Olъžĕ jako Derevljane pridoša. i vozva je Olъga k sobĕ. [i reč(e)(pfv.

aor.) imъ “dobri gostъje^{S1} pridoša^{V1} (pfv.aor.)” i rěša (pfv.aor.) Derevljane “pridochomъ^{V2} (pfv.aor.) knjagine.” [55-27]

(…… (人々は) オリガにドレヴリャネが来たことを告げた。そこでオリガは彼らを自分のもとに呼び、そして言った、「よい客人たちが^{S1}来た^{V1}」。するとドレヴリャネは言った、「(私たちは) 来ました^{V2}、公妃よ」と。)

この場合の完了体アオリストは、継起的に生じた事件を時間軸上に配列することにより1つの物語を語るのではなく、発話の直前に生じた単独の出来事の生起を確認するものである。形式的には「語りの時制群」に属する形式を用いているが、機能的には少なくとも典型的な語りとは言えない。このアオリストと、本来「説明の時制群」に属する現在完了の使用上の境界も、あまりはっきりしない。例えば次例(7)の izodělisja^{V1} sutъ 「(彼らは) 武具装束をつけている」、および例(8)の poimalъ^{V2} jesi 「(あなたは) 取り立てている」は現在完了の形をとっているが、同じことをアオリストを用いて述べることも十分可能であると思われる。²³⁾

- (7) Vъ lět 6453. v se že lěto rekoša (pfv.aor.) družina Igorevi. “otroci Svěnylъži^{S1}. izodělisja^{V1} (pfv.l-prt.: pfv.pf.) sutъ (ifv.pr.) oružьjemъ i porty. a my nazi. poidi^{V2} (pfv.Impr.) knjaže s nami v danъ. da i ty^{S3} dobudeši^{V3} (pfv.pr.) i my.” … [54-16]

(6453 (945-946) 年 この年、従士たちがイゴリに言った、「スヴェネリドの下級従士たちは^{S1}武具装束をつけていますが^{V1}、私たちは裸です。公よ、私たちと貢税を取りに行ってください^{V2}。そうすればあなたは^{S3}財物を手に入れ^{V3}、我々も(財物を手に入れることができます)」と……

- (8) … [i] poslaša k nemu gl(agolja)šte (ifv.pr.prt.). “počto ideši^{V1} (ifv.pr.) opjatъ poimalъ^{V2} (ifv.l-prt.: ifv.pf.) jesi (ifv.pr.) vsju danъ.” … [55-3]

(……そこで(人々は) 彼に使者を送って言った、「(あなたは) どうして再び来る^{V1}のですか。(あなたは) すでに貢税をすべて取り立てている^{V2}ではありませんか」……

以上の点を考慮し、直接話法を用いて引用された対話の部分のテキストを、上で見た「事実叙述」、「コメント」タイプのテキストと区別し、「直接引用」というもう1つのタイプを立てる必要がある。このタイプに現れる動詞の時

制形式は、すべて説明のために使用されているものとして扱うことにする。^{24) 25)}

§ 9 いま 1 つのテキストタイプを分類しておく必要がある。それは聖書の本文から直接引用された部分、すなわち「聖書翻訳」タイプとでも呼ぶべきテキストである。上の例 (3) に次のような部分があった。

(9 = 3) ... 『7 bo mьstii *prija*^{V1}(pfv.aor.) Kainъ^{S1} ubiъ^{V2}(pfv.pt.prt.) Avelja. a Lamechъ 70 Poneže *bě*^{V3}(ifv.impf. : ifv.AnImpf.) Kainъ^{S3} ne vědyi(ifv.pr.prt.) mьštenъja prijati (pfv.Inf.) ot B(og)a. a Lamechъ^{S4} *vědyi*^{V4}(ifv.pr.prt.) kazнь byvši na praroditelju jeho. *stvorі*^{V5}(pfv.aor.) ubiistvo. *reč(e)*^{V6}(pfv.aor.) bo Lamechъ^{S6} kъ svoima ženoma. “muža *ubichъ*^{V7}(pfv.aor.) vъ vredъ mně. i unošju vъ jazvu mně. tьmъže” *reč(e)*^{V8}(pfv.aor.) “70 Mьstii na mně. poneže” *reč(e)*^{V9}(pfv.aor.) “[se] *vědaja*^{V10}(ifv.pr.prt.) *stvorichъ*^{V11}(pfv.aor.) se” Lamechъ^{S12}. *ubi*^{V12}(pfv.aor.) dva brata Jenochova. i *poja*^{V13}(pfv.aor.) sobě ženě jeju. se^{S14} že S(vja)topolkъ novyi Avimelechъ. iže^{S15} sja *bě*^{V15}(ifv.impf. : pfv.plpf.) rodilъ(pfv.l-prt.) ot preljubodějanъja. iže^{S16} *izbi*^{V16}(pfv.aor.) bratju svoju. s(y)ny Gedeony.』 tako i sь^{S17} *bys(t)*^{V17}(ifv.aor.).

(……『カインは^{S1}、アベルを殺して^{V2}、7つの復讐を受けた^{V1}が、レメクは70の(復讐を受けた)。というのはカインは^{S3}神から復讐を受けることになるのを知らなかった^{V3}が、レメクは^{S4}彼の先祖に加えられた罰を知りながら^{V4}殺人を行った^{V5}からである。レメクは^{S6}自分の2人の妻に言った^{V6}、「(私は) 私の痛手のために人を殺した^{V7}。そして私の傷のために若者を(殺した)。そのことのゆえに——(彼は) 言った^{V8}——70の復讐が私に(あった)——(彼は) 言った^{V9}——[そのことを] 知りながら^{V10}これを行った^{V11}からである」。レメクは^{S12}エノクの2人の兄弟を殺し^{V12}、彼らの妻を自分のものとした^{V13}。このスヴァトポルクこそは^{S14}、姦淫から生まれ^{V15}、ギデオンの子である自分の兄弟を殺した^{V16}、新しいアビメレクである。』このもの^{S17}(=スヴァトポルク)も同じであった^{V17}。)

ここでV1～V6, V8, V9, V12～V16は内容的には聖書に基づくものであるが、年代記の編纂者が自分の言葉であらたに述べ直したものと考えられ、²⁶⁾「コメント」のテキストに属するものとして扱える。これに対しV7を中心とする節は聖書本文から直接引用されたものである。このような引用が行われた場合には、²⁷⁾次の70人訳のテキストとの対照が示すとおり、基本的には古代教会スラブ語の場合と同じく、原典にきわめて忠実な翻訳が行われる。

(10) a. muž_{a1} ubichъ₂(pfv.aor.) vъ₃ vredъ₄ mně₅. i₆ unošju₇ vъ₈ jazvu₉ mně₁₀.

b. ... ἀνδρα₁ ἀπέκτεινα₂(aor.) εἰς₃ τραῦμα₄ ἐμοί₅ καὶ₆ νεανίσκον₇ εἰς₈ μώλωπα₉ ἐμοί₁₀,
... [Genesis 4:23]

((私は)私(に対して)の₅傷の₄ために₃人を₁殺した₂。そして₆私(に対して)の₁₀鞭
あとの₉ために₈若者を₇(殺した), ……)

また V 10, V 11 を中心とする節も現行の旧約聖書 70 人訳の本文には直接対応する箇所はないものの、引用の可能性を完全に否定することはできない。

以下では、このように旧・新約聖書から明らかに引用された場合、あるいはその可能性を否定できない場合については、その奴隷制的な性格から、考察の対象からはずすことにする。数量的な調査の対象とした 4 箇所 44 コラム中その数は節にして約 40 であった。

§ 10 上の議論に基づき、以下、次の 3 つのタイプのテキストを区別して論じることとする。

- 1) 「事実叙述」
- 2) 「コメント」
- 3) 「直接引用」

機能的な観点からはここで言う「事実叙述」のタイプのテキストは一般に言われる語りのテキストと同じものであり、ワインリヒの「語りの時制群」に属する動詞形式を中心とする文(節)によって構成される。このタイプのテキストは基本的には代々の記録者の記述に基づくものであると考えられる。ここでは完了体動詞と不完了体動詞の使い分けにより、いわゆる前景と背景が交替しながら物語が進行していく。²⁸⁾

「コメント」タイプのテキストでは、語りと説明の両方が行われ、「語りの時制群」と「説明の時制群」が混在して使用される。「語りの時制群」が使用される部分では短い物語が語られ、その中で前景と背景も区別される。「説明の時制群」が使用される部分では短い説明が行われる。この両者が混然一体となって 1 つのテキストを構成しているのである。このタイプのテキストは代々の記録者の記述が集成、編纂される段階で、集成者の手により、

その時代の観点からの記述としてつけ加えられたと考えられる。

「直接引用」タイプのテキストでは、「語りの時制群」と「説明の時制群」の両方が使用されるが、少なくともここで用いたデータ中には、はっきりとした物語としての語りは存在しなかった。1人称の長い物語が語られる可能性は否定できないものの、以下ではすべて説明のテキストを構成するものとして扱った。

これら3つのタイプの内、「事実叙述」と「コメント」タイプのテキストは、いわゆる「地の文」を構成し、『過ぎし年月の物語』全体の中で等しく重要な価値を持っている。事実関係の記録という点では「事実叙述」タイプのテキストの部分が重要である。一方で、この年代記の成立の目的、編纂者の意図をより明確に示すのは「コメント」タイプのテキストの部分である。これに比べ、「直接引用」タイプのテキストの部分は、物語全体の構成の中で、それほど重要な価値を持つものではない。しかし、「事実叙述」、「コメント」タイプのテキストが書き言葉の資料を提供するのに対し、このタイプのテキストは生きた話し言葉の資料を提供するものである。以下では、「直接引用」タイプのテキストに現れる話し言葉の言語の特徴に留意しつつ、物語全体の基調をなす「事実叙述」タイプのテキストと「コメント」タイプのテキストの差異に重点を置いて、議論を進めることにする。

このように、分布、内容、機能、形式といった基準に従って、テキストをタイプに分けるやり方は、例えばワインリヒ流に時制形式の使用という完全に形式的な基準に従って語りと説明に分けるやり方に比べ、折衷的に見えるかもしれない。しかし、実際の年代記テキストの分析に当たってはより実質²⁹⁾的で優れたやり方である。

2.2. 動詞のテンス・アスペクト形式、語順、照応形の使用

§ 11 テキスト性 (texture) に関与すると考えられる幾つかの言語的手段の使用について現代ロシア語と古ロシア語の違いを見ておきたい。

まず動詞のテンス・アスペクト形式の使用について見る。次は『過ぎし年

月の物語』の977(978)年の記事(例(11))と現代ロシア語で書かれた歴史書の同じ事件を解説した部分(例(12))である。³⁰⁾前者はここで言う「事実叙述」タイプのテキスト、後者も語りのテキストに属する。なお、以下の例では、動詞形式は後述の前景を示す形式と背景を示す形式に分け、FとBで表示する。この例には現れないが、説明の形式はDで示す。

- (11) Vъ lѣt 6485. Poidi^{F1}(pfv.aor.) Jaropolkъ^{S1} na Olga brata svojego na Derevъsku zemlju. i izide^{F2}(pfv.aor.) protivu jeho Olegъ^{S2}. i vpolčitasja^{F3}(pfv.aor.) rativšemasja^{B4}(ifv.pt.prt.) polkoma^{S4}. pobědi^{F5}(pfv.aor.) Jaropolkъ^{S5} Olga. poběgšju^{F6}(pfv.pt.prt.) že Olgu^{S6} s voi s voi svoimi. vъ gradъ rekomyi Vručii. bjaše^{B7}(ifv.impf.) čeresъ groblju mostъ^{S7} ko vratotomъ gradnymъ. tēsnjačesja^{B8}(ifv.pr.prt.) drugъ druga. pichachu^{B9}(ifv.impf.) vъ groblju. i spechnuša^{F10}(pfv.aor.) Olga s mostu v debrъ. padachu^{F11}(ifv.impf.) ljudje^{S11} mnozi. [74–22]

(6485 (977–978) 年 ヤロ波尔クが^{S1}ドレヴリャネの地の自分の弟オレグに向かって兵を進めた^{F1}。そしてオレグも^{S2}彼に向かって出撃した^{F2}。そして(2人は)互いに対峙した^{F3}。両軍は^{S4}戦い^{B4}、ヤロ波尔クが^{S5}オレグを打ち負かした^{F5}。オレグが^{S6}自分の軍勢と共にヴルチと呼ばれる町に逃げてくると^{F6}、町の門に通じる橋が^{S7}濠にかかっていた^{B7}。(彼らは)互いにひしめきあい^{B8}、濠に突き落しあった^{B9}。そして(彼らは)オレグを橋から堀に突き落した^{F10}。多くの人々が^{S11}落ち^{B11}、……)

- (12) čerez dva goda, t.e. kogda Jaropolku bylo^{B0}(ifv.pt.) 16, a Olegu 15 let, kievskij knjaz^{S1} (=Jaropolk, A. S.) pošel^{F1}(pfv.pt.) rat'ju na drevljanskogo (=Oleg, A. S.); poslednij^{S2} (=Oleg, A. S.) vyšel^{F2}(pfv.pt.) k nemu navstreču s vojskom, i Jaropolk^{S5} pobedil^{F3}(pfv.pt.) Olega. Oleg^{S6} pobežal^{F6}(pfv.pt.) v gorod, nazyvaemyj Ovruč; na mostu, perekinutom čerez rov k gorodskim vorotam, beglecъ^{S8} stesnilis^{F8}(pfv.pt.) i stalkivali^{B9}(ifv.pt.) drug druga v rov, pričem stolknuli^{F10}(pfv.pt.) i Olega; ljudej^{S11} popadalo^{F11}(pfv.pt.) mnogo, . . . (Solov'ev. 1959: 171)

(二年後、すなわちヤロ波尔クが16歳で^{B0}、オレグが15歳のとき、キエフの公(=ヤロ波尔ク)は^{S1}ドレヴリャネの公(=オレグ)を攻めた^{F1}。後者は^{S2}軍を率いて彼を迎え撃った^{F2}。そしてヤロ波尔クが^{S5}オレグを撃ち破った^{F5}。オレグは^{S6}オヴルチと呼ばれる町に逃げた^{F6}。濠にかかった、町の門に通じる橋のうえで、逃げて来た者たちが^{S8}ひしめきあって^{F8}、互いに相手を濠に落とし^{F9}、そしてこの時、オレグをつき落とした^{F10}。そして多くの人が^{S11}落ちた^{F11}……)

動詞のテンス・アスペクト体系について、古ロシア語から現代ロシア語への歴史的な変化の過程において、完了体と完了体の対立によるスラブ語に固有の体 (vid: アスペクト) の組織が完成する一方、アオリストと未完了過去の対立が消失し、かつての完了がその本来の意義を失い単なる過去の形式として両者の機能を吸収するという変化が生じた。³¹⁾しかし、このような変化にも関わらず、テンス・アスペクト形式がテキスト形成上果たす機能は古ロシア語の場合も現代ロシア語の場合も本質的には変わらない。上で時制形式が、語りと説明という2つの機能上のタイプの分類を行うための形式的基準となることを見た。例(11), (12) はいずれも過去形、すなわち古ロシア語における完了体アオリスト、完了体未完了過去、完了体アオリスト、現代ロシア語における完了体過去、完了体過去の使用が語りのテキストを特徴づけていることを示している。

§ 12 一方で、このテンス・アスペクト形式の対立がロシア語、さらにスラブ語一般で語りにおけるいわゆる「前景」(foreground)と「背景」(background)の対立を担っていることが、例えば Rassudova (1968), Forsyth (1970), Maslov (1984 a, b) その他の研究で明らかにされてきた。³²⁾この点について簡単に見ておきたい。マスロフのあげる現代ロシア語の例を引用する。(cf. Maslov. 1984 a: 26–27)。

- (13) V Navoloki parochod^{S1} prišel^{F1}(pfv.pt.) nočju. Major Kuz'min^{S2} vyšel^{F2}(pfv.pt.) na palubu. Morosil^{B3}(ifv.pt.) dožd'^{S3}. Na pristani bylo^{B4}(ifv.pt.) pusto, — gorel^{B5}(ifv.pt.) tol'ko odin fonar'^{S5}. Gde že gorod? — podumal^{F6}(pfv.pt.) Kuz'min^{S6}. — T'ma, dožd' — čert znaet čto! (K. Paustovski: Doždliivyj rassvet)

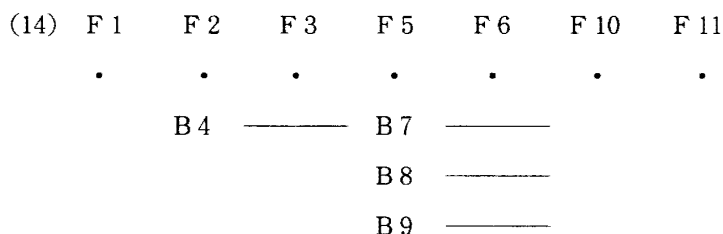
F 1	F 2	F 6
.	.	.
B 3	_____	
B 4	_____	
B 5	_____	

(ナヴォロキに船が^{S1}着いた^{F1}のは夜だった。クジミン少佐は^{S2}デッキに出た^{F2}。こぬか雨が^{S3}降っていた^{B3}。船着き場は人気がなかった^{B4}。ランタンが^{S5}1つ燃えている^{B5}だけだった。「町はどこにあるんだろう」——クジミンは^{S6}考えた^{F6}——「霧と雨、 たまったもんじゃな

い」。(パウストフスキー『雨の夜明け』)

ここで完了体動詞過去形 (F1, F2, F6) は事件を継起的に生じたものとして時間軸上に連続的に配列する。これにより物語の筋が展開し、その骨格が示される。これが前景である。一方不完了体動詞過去形 (B3, B4, B5) の使用により、物語の展開がある時点 (上では F2 の時点) で一旦止まり、補助的な背景の情報が与えられる。

同じことが古ロシア語の場合にも観察される。前景を示すのは完了体アオリスト、背景を示すのは不完了体未完了過去である。また不完了体アオリストは前景を、完了体・不完了体過去完了は背景を示すと考えられる。³³⁾ 分詞についてはなお議論が必要であるが、ここでは暫定的に完了体過去分詞は前景を、不完了体現在分詞、同過去分詞は背景を示すとする。この分類に基づき、上の例 (11) における物語の事件の進行は次のように示すことができる。



§ 13 この完了体と不完了体の対立は前景と背景を区別するだけでなく、いわゆる新情報と旧情報の対立とも関係している。Forsyth (1970), およびそのデータにもとづいて議論を進めた Hopper (1979) によれば、文中で動詞とその目的語が新情報、焦点として強調される場合には完了体過去が、動詞やその目的語以外の要素が強調される場合には不完了体過去が用いられると³⁴⁾いう。結果として新しい名詞句が主語として文脈中に導入される場合には不完了体、すなわち背景の形式が使用されることになる。³⁵⁾

- (15) a. — Kto^{S1} pisał^{B1} (ifv.pt) 《Voinu i mir》?
 (誰が^{S1}『戦争と平和』を書いた^{B1}のか。)

- b. — Tolstoj^{S2} pisal^{B2}(ifv.pt.) 《Vojnu i mir》.
(トルストイが^{S2}『戦争と平和』を書いた^{B2}。)

- (16) a. Safonov : Èto verno. A pisatelja ϕ^{S1} vyzval^{F1}(pfv.pt.)?
(サ：そのとおり。それで（君は^{S1}）（その）作家を呼んだのか^{F1}。)

- b. Il'in : ϕ^{S2} Vyzval^{F2}(pfv.pt.) ϕ_{ACC} .
(イ：（僕は^{S2}その作家を）呼びました^{F2}。)

- c. Safonov : Ja ego choču načal'nikom osobogo otdela.
(サ：私は、彼を特別部の部長に欲しいのだ。)

(Simonov : Russkie ljudi.)

不完了体動詞が使用されている（15）の例では新情報を伝える主語が強調され、焦点となっている。ここで動詞句は旧情報を示し、前提されている要素である。一方完了体動詞が使用されている（16）では、主語はすでに明らかであり省略されている。焦点として強調されているのは、（16）a. では動詞とその目的語、b. では動詞そのもの、厳密には動詞の表す命題が肯定されているということである。

§ 14 例（11）と（12）を比べてみると、その最も大きな違いは語順にあることがわかる。他のスラブ諸語と同様、現代ロシア語の語順も、その豊富な屈折体系の故にかなり自由であり、機能的、談話的な要因によって決定されると考えられる。すなわち、文を構成する諸要素は、文の機能的な構造を反映しテーマ（何について伝達されるかを示す）—— レーマ（そのテーマについて伝達されるものを示す）³⁶⁾の順で配列されたり、あるいは談話の情報構造を反映し旧情報—— 新情報の順で配列されると考えられる。

- (17) a. Čto sdelal brat? (兄は何をしたのか。)
Brat || kupil knigu. (兄は || 買った一本を : 兄は || 本を買った。)
- b. Kto kupil knigu? (誰が本を買ったのか。)
Knigu kupil || brat. (本を一買った || 兄は : 本を買ったのは || 兄だ)
- c. Kakim sposobom brat priobrel knigu? (兄はどうやってこの本を手にいれたのか?)
Brat knigu || kupil. (兄は一本を || 買った : 兄は本を || 買ったのだ。)

文レベルの機能的な概念としてのテーマ——レーマの対立と、談話レベルの概念である旧情報——新情報の対立は必ずしもつねに一致するわけではない。³⁷⁾しかし、通常両者は重なりあい、旧情報がテーマ、新情報がレーマとして選ばれることが多い。そして語用論的にテーマが主語になる場合が多いことから、主語—動詞—(目的語)、SV(O)という語順が現代ロシア語の基本的な語順³⁸⁾ということになる。

(12) の現代ロシア語の例を見ると、まず「キエフの公 (=ヤロポルク) がドレヴリャネの公 (=オレグ) を攻め」(S1F1)、つぎにオレグがテーマとなり「後者 (=オレグ) は軍を率いて彼 (=ヤロポルク) を迎え撃つ」(S2F2)、すると迎え撃たれたほうのヤロポルクが再びテーマになって「ヤロポルクがオレグを撃ち破る」(S5F5)、さらに今度はオレグがテーマになり「オレグはオヴルチと呼ばれた町に逃げる」(S6F6) というように、先行する文の動詞句の中の要素が次々に後続する文のテーマとして選ばれて主語になり、主語を明示した SV 語順がとられる。「逃げて来た者たちがひしめきあい」(S8F8) でテーマとして新しい名詞句が導入されるが、これも先行文脈からある程度予想されるものである。この新しい主語が、次の「相手を濠におとし」(B9)、「オレグをつき落とした」(F10) においてもゼロ代名詞の形で連続して現れる。最後に「多くの人々が落ちた」(S11F11) という文で新しい名詞句がテーマとして選ばれるが、これも意味的には先行文脈によって規定されている。このように、先行文脈中に現れ旧情報として予想可能な名詞句の指示対象がテーマとして選択され、同時に主語となって SV 語順の節が用いられることになる。主語が交替せずに連続する場合には、その主語は省略される。

一方、古ロシア語の例 (11) では、談話の情報構造は現代ロシア語の場合と変わらないはずであるのに、主語が省略される場合を除き、一律に VS 語順がとられている。すなわち、poidi^{F1} Jaropolkъ^{S1}「ヤロポルクが兵を進めた」(F1S1)、izide^{F2} ... Olegъ^{S2}「オレグも……出撃した」(F2S2)、rativ-šemasja^{B4} polkoma^{S4}「両軍は戦い」(B4S4)、pobědi^{F5} Jaropolkъ^{S5}「ヤロポルクが打ち負かした」(F5S5)、poběgšju^{F6} ... Oľgu^{S6}「オレグが逃げて来

ると」(F6S6), bjaše^{B7} ... mostъ^{S7} 「橋が濠にかかっていた」(B7S7), padachu^{F11} ljudъje^{S11} 「多くの人々が落ち」(F11S11)。動詞句がテーマとして選ばれたためにこのような語順が選択されたとは考えにくい。ここで用いられている動詞を見ると, 完了体アオリストなど前景を表す形式の方が優勢であるが, § 13 で見た現代ロシア語についての観察を古ロシア語にも適用するとすれば, この前景を示す形式は旧情報, テーマではなく, 新情報, 焦点を示していることになるからである。ここで語順は VS に固定し, 新情報と旧情報の対立, テーマとレーマの対立を担っていないように見える。

なお, (11), (12) における語順は, 同一の主語の連続 (省略される場合を含む) を「=」で, 主語の交替を「—」で示すことにすると, 次のように図式化することができる。

(11') F1S1—F2S2—F3—B4S4—F5S5—F6S6—B7S7—B8—B9—F10—F11S11

(12') B0—S1F1—S2F2———S5F5—S6F6———S8F8—B9—F10—S11F11

§ 15 次に主語の照応関係に関連して, 現代ロシア語の 3 人称の人称代名詞と, これに対応する古ロシア語の指示代名詞の使用にも, 違いが見られることが観察される。次の例 (18), (19) はいずれも a. の現代ロシア語 (上掲ソロビヨフの歴史書) と b. の『過ぎし年月の物語』の対応する箇所を対照したものである。

- (18) a. ... Posly_i^{S1} otvečali^{B1} (ifv.pt.): “Poslala^{D2} (pfv.pt.) nas Drevljanskaja zemlja^{S2} skazat' tebe: muža_j tvoego my^{S3} ubili^{D3} (pfv.pt.), potomu čto on_j^{S4} grabil^{D4} (ifv.pt.) nas, kak volk, ...” Ol'ga^{S5} skazala^{F5} (pfv.pt.) im_i na éto: “... a kak zavtra utrom ja^{S6} prišlju^{D6} (pfv.pr.) φ_{kACC} za vami, to vy^{S7} skažete^{D7} (pfv.pr.) poslannym_k: ne edem^{D8} (ifv.pr.) na konjach, nejdem^{D9} (ifv.pr.) peškom, a nesite^{D10} (ifv.Impr.) nas v lod'e! Oni_k^{S11} vas i ponesut^{D11} (pfv.pr.)”. (Solov'ev. 1959: 153)
- (使者_iは^{S1}答えた^{B1}, 「ドレヴリャネの国が^{S2}あなたにこう言わせるため我々を送ったのです^{D2}, 『あなたの夫_jは我々が^{S3}殺した^{D3}。なぜなら彼_jが^{S4}, 狼のように, 我々を略奪した^{D4}からだ』。オリガは^{S5}これに答えて彼ら_iに言った^{F5}, 「……明日の朝になったら私は^{S6}あなた方を迎えに φ_{kACC} やります^{D6}。あなた方は^{S7}使者たち_kに向かってこう言い

なさい^{D7}, 『(我々は) 馬でも行かぬ^{D8}, 徒歩でも行かぬ^{D9}, 我々を船にのせてはこ
べ^{D10}』と。そうすれば, 彼ら_kは^{S11}あなた方を運ぶでしょう^{D11}。』)

- b. *rěša*^{F1} (pfv.aor.) že Drevljane_i^{S1}. “posla^{D2} (pfv.aor.) ny Deržvŭska zemlja^{S2}.
rěkušte^{D2'} (pfv.pr.prt.) sice “muža tvojego_i ubichomъ^{D3}(pfv.aor.). bjaše^{D4}(ifv.
impf.: ifv.AnImpf.) bo mužb_j^{S4} tvoi aki volkъ. voschištaja(ifv.pr.prt.) i grabja
(ifv.pr.prt.)...” ” ... reč(e)^{F5}(pfv.aor.) že imъ_i Olga^{S5} “... [i] azъ^{S6} utro
poslju^{D6}(pfv.pr.) φ_{kACC} po vy. vy^{S7} že rěčete^{D7}(pfv.Impr.) φ_{kDAT} “ne jedemъ^{D8}(ifv.
pr.) na koněch. ni pěši idemъ^{D9}(ifv.pr.). no ponesete^{D10}(pfv.Impr.) ny v loď.” i
φ_k^{S11} vъznesutъ^{D11}(pfv.pr.) vy v loďi.” ... [55–31]

ドレヴリャネ_iは^{S1}言った^{F1}, 「ドレヴリャネの国が^{S2}私たちを遣わした^{D2}のです。こう
言って^{D2'}です, 『(私たちは) あなたの夫_jを殺しました^{D3}。あなたの夫_jが^{S4}狼のように
盗みや掠奪を行っていた^{D4}からです。…』」…オリガは^{S5}彼ら_iに言った^{F5}, 「私は^{S6}明朝
お前たちを迎えに φ_{kACC} (使者を) 送りましょう^{D6}。お前たちは^{S7}φ_{kDAT} (彼らに) 言
いなさい^{D7}, 『(我々は) 馬でも行かぬ^{D8}。徒歩でも行かぬ^{D9}。我々を船に乗せたまま運
べ^{D10}』と。そうすれば, φ_j^{S11} (彼らは) お前たちを船に乗せたまま運ぶでしょう^{D11}」
...

- (19) a. ... Korostency_i^{S2} bilis' B2 (ifv.pt.) krepko, znaja^{B3}(ifv.pr. prt.), čto oni_i^{S4} ubili^{B4}
(pfv.pt.) knjazja i potomu ne budet^{F5} (pfv.pr.) im_i milosti^{S5}, kogda φ_i^{S6}
sdatutsja^{F6}(pfv.pr.). Celoe leto prostojala^{F7}(pfv.pt.) Ol'ga_j^{S7} pod gorodom_k i φ_j^{S8}
ne mogla^{B8}(ifv.pt.) vzjat' ego_k, togda ona_j^{S9} pridumala^{F9}(pfv.pt.) vot čto sdelat':
φ_j^{S10} poslala^{F10}(pfv.pt.) skazat' v Korosten' ... (Solov'ev. 1959: 154–155)

(コルスニの人々_i (=ドレヴリャネの人々) は^{S2}頑強に戦った^{B2}。彼ら_iが^{S4} (イゴリ)
公を殺した^{B4}ので, φ_i^{S6} 降伏すれば^{F6}彼ら_iにとって良くないことが^{S5}起こる^{F5}と φ_i^{S3}
知っていた^{B3}のである。まる一年の間オリガ_jは^{S7}町_kの外に陣をしいていた^{F7}が, これ_k
をとることが φ_j^{S8} 出来なかった^{B8}。このとき, 彼女_jは^{S9}あることを思いついた^{F9}。そし
てコルスニの町に使者を φ_j^{S10} 送って^{F10}, 言った…)

- b. ... a Derevljane_i^{S1} zatvorišasja^{F1}(pfv.aor.) vъ gradě_k. i φ_i^{S2} borjachusja^{B2}(ifv.
impf.) krepko izъ grada_k. φ_i^{S3} věděchu^{B3}(ifv.impf.) bo jako sami_i^{S4} ubili^{B4}(pfv.
pt.) knjazja. i na čto sja predati(pfv.Inf.). i stoja^{B7}(ifv.aor.) Olga_j^{S7} lěto. [i] φ_j^{S8}
ne možaše^{B8}(ifv.impf.) vzjati grada_k. i φ_j^{S9} umysli^{F9}(pfv.aor.) sice. φ_j^{S10} posla^{F10}
(pfv.aor.) ko gradu_k gl(agolja)šti(ifv.pr.prt.)... [58–13]

(ドレヴリャネ_iは^{S1}町_kの中に立てこもり^{F1}, 町_kの中から激しく φ_i^{S2} 戦った^{B2}。自分た
ち_iが^{S4} (イゴリ) 公を殺し^{B4}, そのことに対して報いを受けなければならないことを
φ_i^{S3} 知っていた^{B3}からである。そのためオリガ_jは^{S7}一夏中 (そこに) とどまったが^{B7},
町_kを占領することが φ_j^{S8} で出来なかった^{B8}。そこで φ_j^{S9} (彼女は) 一計を案じ^{F9}, 町_kに

使者を ϕ_i^{S10} 送って^{F10}, 言った……)

例(18), (19) を見て感じるのは, 現代語の3人称の人称代名詞の主格形に比べ, 古ロシア語でこれに対応する指示代名詞³⁹⁾の使用がきわめて少ない点である。(18) a. on^{S4} 「彼」に対しては b. の $mu\check{z}b^{S4}$ $tvoi$ 「汝の夫」というように通常の名詞句が, 同じく a. の oni^{S11} 「彼ら」に対しては b. のゼロ代名詞が, (19) a. の oni^{S4} 「彼ら」に対しては b. の $sami^{S4}$ 「(彼ら) 自身」という強意の定代名詞が, a. の ona^{S9} 「彼女」に対しては b. のゼロ代名詞が対応している。勿論現代ロシア語でも, 例(19)にもあるように, 主格の人称代名詞はしばしば省略される。しかし, その頻度は古ロシア語における方がはるかに大きい。これは量的な違いというより, 何か質的な違いの存在を予想させる。

他方, 主格以外の形についてみると, この文脈ではその出現例は限られているが, 一般に現代語で3人称の人称代名詞の斜格形が現れるところでは, 古ロシア語でも同じ形が現れることが多いことが観察される。ここでは, (18) a. の im_i 「彼らに(複数与格)」と b. の $im\check{b}_i$ 「同」が対応している。(19) a. の im_i 「彼らに(複数与格)」は構文上の違いにより b. では対応する要素がない。従って, はっきりと対応していないのは (19) a. の ego_k 「彼を/それを(否定生格)」に対する b. の $grada_k$ 「町を(否定生格)」だけであるが, この場合も先行詞が a. では直前の節中にあるが, b. ではかなり前の方にあるということによって説明が可能である。

以上の観察は, 古ロシア語が3人称の指示代名詞, 照応形の主格形の使用について固有の特徴をもっていることを示している。⁴⁰⁾

次章以下で, 古ロシア語『過ぎし年月の物語』の言語について, 物語の基調をなす「事実叙述」, 「コメント」タイプのテキストを中心に, ここで概観したテンス・アスペクト形式の使用, 語順, 主語の照応関係と3人称指示代名詞主格形の使用といった問題についてさらに詳しく観察したい。

3. 『過ぎし年月の物語』におけるテキストのタイプとその言語的特徴

3.1. 「事実叙述」タイプのテキスト

§ 16 それぞれのタイプのテキストの特徴を実際の例に即して観察する。まず「事実叙述」タイプのテキスト，すなわち歴史的な出来事，事件ををそのまま語るタイプのテキストを見る。

次は，945年の記事の後半，イゴリ公がキエフ周辺の東スラブ系の種族ドレヴリャネに殺された後，妻オリガがその復讐を遂げる物語の発端の部分である。

- (20) a. Volьga^{S1} že bjaše^{B1}(ifv.impf.) v Kijevě sь s(y)n(o)mъ svoimъ sь dětьskomъ S(vja) toslavomъ. i kormilecъ jeho Asmudъ. i vojevoda bē^{B2}(ifv.impf.) Svēneldъ^{S2}. tože o(te)cъ Mistišinъ. rěša^{F3}(pfv.aor.) že Derevljane^{S3}. “se knjazja ubichomъ Ruskago. poimemъ ženu ego Volьgu za knjazь svoi Maъ i S(vja)-toslava. i stvorimъ jemu jakože choštemъ.” [55–10]

(オリガは^{S1}自分の息子の幼いスヴァトスラフと共にキエフにいた^{B1}。彼の養育係アスムドも（そこにいた）。そして，スヴェネリドが^{S2}軍司令官であった^{B2}。彼はまたミステシヤの父でもあった。ドレヴリャネ^{S3}が^{S3}言った^{F3}，「我々はルシの公を殺した。彼の妻オリガを自分たちの公マルのために捕えよう。そしてスヴァトスラフも（捕え），彼に思うままのことをしよう」と。

- b. S1B1 — B2S2 — F3S3

まず不完了体未完了過去，すなわち背景の形式を用いて，以下の物語，エピソードの主人公である公妃オリガが文脈中に導入される。同時にアスムドやスヴェネリドといった他の登場人物も導入される。アスムドの導入に当たっては動詞は省略されるが，スヴェネリドについての背景的な情報は不完了体未完了過去で示される。その後最初の事件が起きる。すなわち，オリガの夫イゴリを殺した敵であるドレヴリャネが，あることを「言った」という出来事が，前景を示す形式である完了体アオリストで示される。ここからいよいよ「オリガの復讐」の物語を構成する一連の出来事が始まることになる。

以上がある程度の長さを持つエピソードが始まる時のパターンの1つである。このパターンは現代語と変わらない。しかし実際には、必ずしもつねに、それぞれの年の記述、あるいはその中の1つのエピソードが、このように背景の形式で始まるとは限らない。導入部としての背景を示すことなく、直接前景の出来事からある年の記述が始まることも多い。

次に、このエピソードが展開していく様子を見る。上の例の少し後の部分、⁴¹⁾ドレヴリャネの使者がオリガのもとに到着した時のことである。

- (21) a. ... i ϕ_k^{S1} povědaša^{F1}(ifv.aor.) Olbžē_i jako Derevljane_j^{S2} pridoša^{B2}(pfv.aor.). i vozva^{F3}(pfv.aor.) je_j Olga_i^{S3} k sobě. [i ϕ_i^{S4} reč(e)^{F4}(pfv.aor.) im_j] “dobri gostyje pridoša.” i reša^{F5}(pfv.aor.) Derevljane_j^{S5} “pridochomъ knjagine.” i reč(e)^{F6}(pfv.aor.) im_j Olga_i^{S6} “da gl(ago)l(ě)te čto radi pridoste sěmo.” reša^{F7}(pfv.aor.) že Derevljane_j^{S7}. “posla ny Derěvŋska zemlja. rьkušte sice muža tvojego ubichomъ. bjaše bo mužь tvoi aki volkъ. voschištaja i grabja. a naši knjazi dobri sutъ. iže raspasli sutъ Derevŋsku zemlju. da poidi za knjazь našь za Malъ.” bē^{B8}(ifv.impf.) bo imja^{S8} jemu Malъ. knjazju Derěvŋsku. [55–27]

(…… ϕ_k^{S1} (人々は) ドレヴリャネ_jが^{S2}来た^{B2}ことをオリガ_iに告げた^{F1}。そこでオリガ_iは^{S3}彼ら_jを自分のもとに呼び入れた^{F3}。そして彼ら_jに ϕ_i^{S4} 言った^{F4}、「よい客人たちが来た」と。そしてドレヴリャネ_jは^{S5}言った^{F5}、「私たちは来ました、公妃よ」。そしてオリガ_iは^{S6}彼ら_jに言った^{F6}、「何のためにお前たちはここへ来たのか言いなさい」と。するとドレヴリャネ_jは^{S7}言った^{F7}、「ドレヴリャネの国が私たちを遣わしたのです。こう言ってです、『(私たちは) あなたの夫を殺しました。あなたの夫が狼のように盗みや掠奪を行っていたからです。しかし私たちの公たちは善良で、彼らはドレヴリャネの国をよく治めています。私たちの公マルに嫁いで下さい』」と。彼、ドレヴリャネの公の名は^{S8}マルだったのである^{B8}。

- b. F1—(S2B2)—F3S3—F4—F5S5—F6S6—F7S7—B8S8

ここでは最後の1つを除き、すべて完了体あるいは不完了体のアオリストが使用され、継起的に生じた出来事が語られる。但し pridoša^{B2} は本来前景を示す動詞形式であるが、povědati「語る」という伝達動詞の補文中にあり、⁴²⁾ここでは背景を示すと考えた。最後の不完了体未完了過去(B8)の使用により、物語の進行がいったん止まり背景が示される。この後さらに、完了体ア

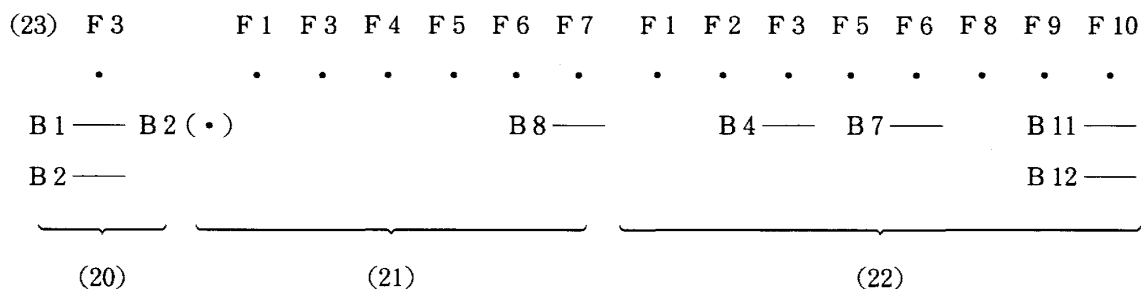
オリスト、不完了体未完了過去などの使用により、前景と背景が交替しつつ、物語の筋が展開していくことになる。次は上の例に直ちに後続する部分である。

- (22) a. reč(e)^{F1}(pfv.aor.) že imъj Olga_i^{S1} “ljuba mi jestъ rěčъ vaša. uže mně muža svojego ne krěsiti. no chočju vy počtiti nautrija predъ ljudъmi svoimi. a nyně iděte v lodъju svoju. i ljazite vъ lodы veličajuštesja. [i] azъ utro poslju po vy. vy že rьcěte “ne jedemъ na koněch. ni pěši idemъ. no ponesěte ny v lodъě.” i vъznesutъ vy v lodы.” i ϕ_i ^{S2} otpusti^{F2}(pfv.aor.) ja_j v lodъju. Olga_i^{S3} že povelě^{F3}(pfv.aor.) ϕ_{kDAT} iskopati jamu. veliku i gluboku. na dvorě teremъstěmъ. vně grada. i zautra Volga_i^{S4} sědjaštъ^{B4}(ifv.pr.prt.) v teremě. ϕ_i ^{S5} posla^{F5}(pfv.aor.) ϕ_{kACC} po gosti_j. i ϕ_k ^{S6} pridoša^{F6}(pfv.aor.) k nimъj. ϕ_k ^{S7} gl(agolja)šte^{B7}(ifv.pr.prt.). “zovetъ vy Olga na čestъ veliku.” oni_j^{S8} že rěša^{F8}(pfv.aor.) “ne jedemъ na konichъ ni na vozěchъ. [ni pěši idemъ] ponesěte ny v lodы.” rěša^{F9}(pfv.aor.) že Kijane_k^{S9} “namъ nevolja knjazъ našъ ubъjenъ. a knjagini naša choče za vašъ knjazъ” i ϕ_k ^{S10} ponesoša^{F10}(pfv.aor.) ja_j v lodы. oni_j^{S11} že sědjachu^{B11}(ifv.impf.) v peregrъbčch. vъ velikichъ sustugachъ ϕ_j ^{S12} gordjaštesja^{B12}(ifv.pr.prt.). [56–6]

「オリガ_i^{S1}は彼ら_jに言った^{F1}、『私にはお前たちの言葉が気に入りました。もう私には自分の夫を生き返らせることができません。だから私は明朝自分の家臣の前でお前たちに敬意を表したいと思います。いまは自分たちの船に戻り、威張って船に入りなさい。私は(明)朝お前たちを迎えに(使者を)送りましょう。お前たちは(彼らに)言いなさい、『我々は馬でも行かぬ。徒歩でも行かぬ。我々を船に乗せたまま運べ』と。そうすれば(彼らは)お前たちを船に乗せたまま運ぶでしょう』。そして ϕ_i ^{S2}彼ら_jを船に帰らせた^{F2}。オリガ_i^{S3}は町の外の塔の邸に大きくて深い穴を掘るように ϕ_{kDAT} (キエフの人々に)命じた^{F3}。そして翌朝オリガ_iは^{S4}塔に座り^{B4}、客人_jを迎えに ϕ_{kACC} (キエフの人々を) ϕ_i ^{S5}送った^{F5}。 ϕ_k ^{S6} (キエフの人々は)彼ら_jのところにやって来て^{F6}、 ϕ_k ^{S7}言った^{B7}、「オリガが大きな栄誉(を与える)のためにあなた方を呼んでいます」。彼ら_jは^{S8}言った^{F8}、「我々は馬でも車でも行かぬ。徒歩でも行かぬ。我々を船に乗せたまま運べ」。キエフの人々_kは^{S9}言った^{F9}、「仕方ありません。私たちの公は殺され、また私たちの公妃はあなた方の公に嫁ごうと望んでいます」。そして彼らを船に乗せたまま ϕ_k ^{S10}運んだ^{F10}。彼ら_j^{S11}は、手を腰にあて胸に大きな飾留金をつけ、 ϕ_j ^{S12}大威張りで^{B12}、座っていた^{B11}。

- b. F1S1 = F2 = S3F3 = S4B4 = F5 — F6 = B7 — S8F8 — F9S9 = F10 —
S11B11 = B12

以上, (20)b, (21)b., (22)b.の図式にも示されるとおり, 「事実叙述」タイプのテキストでは前景を示す形式と背景を示す形式が交替し, 物語の筋を進めていくことが確認される。但し, 全体として, 背景の形式よりも前景の形式が優勢であり, 前景の出来事が中心になっているように思われる。この様子は § 12 の例にならい次のように図示される。



§ 17 同じ例を用いて, 語順について考えてみたい。例 (20) に示されるように, まず SV 語順をとる節により 1 つのエピソードが始まり (S1B1), 続いて (21) に見られるように VS 語順をとる節の連続により一連の事件が展開していく。同一の主語が連続する場合には, これは省略され (ゼロ代名詞の使用), 動詞のみが現れる。これは以下で V 語順と呼ぶことにする。主語が交替する場合には VS 語順が取られる。この VS 語順がこのタイプのテキストにおける基本的な語順である。(21) の F3S3, F6S6 の主語 Olga 「オリガ」, F5S5, F7S7 の主語 Derevrjane 「ドレヴリャネの人々」は, いずれも先行文脈中で主語として現れ, F3S3, F5S5, F7S7 については直前の節中でも斜格目的語の形で現れている。これはいわゆる旧情報であり, それぞれの節のテーマとして, 節の先頭に現れてもよいはずである。しかし実際には動詞の後ろに現れている。§ 14 で観察したとおり, ここで語順は VS に固定し, テーマとレーマの対立を担っていないように見える。

例 (22) の途中ではじめて主文中に SV 語順の節が現れる。これは同一の主語が連続する場合 (F2=S3F3=S4B4) も可能であるが, もっぱら主語が交替する場合 (B7—S8F8, F10—S11B11) によく現れる。後者の場合, 主語

(S8F8, S11B11とも oni_j「彼ら (=客人たち=ドレヴリャネの使者たち)」) は先行文脈中ですでに主格主語として現れ、同時に直前あるいは1つ前の節中で斜格の名詞句 (k nim_z_j「彼らのところに」, ja_j「彼らを」) の形で現れている。従っていずれの場合も主語は旧情報であり、旧情報——新情報の順で配列されているようにも見える。しかし、この主語と先行詞の関係は上の例 (21) について見た VS 語順の場合と全く同じであり、どのような場合に VS 語順が選択され、どのような場合に SV 語順が選択されるのかは、談話の情報構造からは決定されないことがわかる。別の要因によって決定されていると考えられる。

ここで SV 語順の節の使用に際し、強調、対照を示す小辞 *že* あるいは *a*⁴³⁾ が現れている点が注目される。この SV 語順が、何らかの文体上の要因によって選択されている可能性を示唆するからである。Borkovskij ed. (1983: 132) によれば、この *že* はそれぞれの節の先頭の語の後に付加され、この語を「強調し、この *že* を含む当該の節と先行するテキストの間の意味的 (テキスト的) な関係がどのようなものであるかを明らかにすることを助ける。通常 *že* はこの位置で、行為の主体、時、場所といった、テキストの連結性 (tekstovye svjazi) に関与する意味上の連続性が破壊 (中断) されることを示す。これにより、*že* によって結び付けられた節とこれに先行するテキストの間の意味上の対立が生じる」という。上の例について言えば、基本的な語順である VS 語順から SV 語順への切替えは、この *že* の使用と相まって、あるエピソードを構成する一連の連続的な出来事をより小さな単位、場面へと区切っていく役割を果たしていると考えられる。強調の小辞 *že* や *a* が節の先頭に引出された主語に付加されることにより、主語の交替、テーマの変更が強調され、書き手の視点の変化が示される。これにより場面の転換が示されるのである。これが、S8F8 「彼ら (=ドレヴリャネの使者たち) は言った」、S11B11 「彼らは…座っていた」の場合である。勿論このような場面の転換、小段落への区切りはきわめて主観的なものであり、規則的に行われるわけではない。通常幾つかの節により1つの場面が構成されるが、場合によっては (22) の例にあるように、1つないし2つの節で1つの場面、小段落が

構成されることもある。これに対し例 (21) では F1 から B8 S8 まで一連の出来事がいわば一息で語られたことになる。

繰り返して言うが、SV 語順をとる節の使用によりテーマの変更が強調されるからといって、SV あるいは VS という語順そのものが、談話の情報構造や文の機能的構造を反映しているわけではない。重要なのは、基本的な VS 語順から SV 語順への切替えということであり、これによりテーマの交替が示されるということである。むしろ語順が VS に固定し、情報構造とは直接のつながりを持たないが故に、はじめて、その SV への切替えがテーマの交替を強調し、小段落の区切りを示すという文体上の機能を果たすことができるようになったと考えられる。一旦このような機能が確立すると、次に必ずしも主語が交替しなくとも、語順の切替えだけで小段落の区切り、場面の転換を示すことも可能になる。例 (22) の前半に現れる S3 F3, S4 B4 がそれである。⁴⁴⁾ オリガがドレヴリャネの使者を帰らせた (F2) ことにより 1 つの場面が終わり、次の場面が始まる。ここでは主語「オリガ」は交替しないが、S3 F3 という SV 語順をとる節の使用により小段落の区切りがマークされるのである。次の S4 B4 でも主語「オリガ」はそのまま、また小辞 *ze* あるいは *a* も現れないが、この場合も場面の転換が行われると考えられる。*i zautra* 「そして翌朝」という副詞的表現により、時間的な非連続性が示されているからである。

このような場面の転換、小段落の区切りを「;」という記号で表わすことにすると、(22)b. は次の (22)b' のように表される。

- (22) b' F1 S1=F2; =S3 F3; =S4 B4=F5—F6=B7; —S8 F8—F9 S9=
F10; —S11 B11=B12

それぞれの区切りの内部では、同一の主語が連続する場合にはこれを省略した V 語順の節が現れ (F2, F5, B7, F10, B12), 交替する場合には基本的な語順である VS 語順の節が現れる (F9 S9)。動詞が前景を示す形式の場合 (S3

F3, S8F8) も、背景を示す形式の場合 (S4B4, S11B11) も SV 語順への切替えによる場面の転換が行われていることから、場面の転換と前景・背景の対立は直接の関係を持たないことがわかる。そこで F と B をまとめて V で示し、全体をさらに模式化すると、次のような図が得られる。

(22) b." VS=V-VS=V; SV=V-VS=V; SV=V-VS=V; SV=V-VS=V; ...

それぞれのエピソードがある程度の長さを持つ場合、まず全体が幾つかの小段落、小場面に区切られる。最初の場面は明示的な主語を持つ VS 語順の節ではじまり、以後場面が変わるごとに小辞 *ze* あるいは *a* をともなった SV 語順の節の使用により新しい場面への転換が示される。それぞれの小段落の内部では、主語を省略した節あるいは VS 語順の節が現れる。このようにして 1 つのエピソードが語られて行くのである。⁴⁵⁾

以上、古ロシア語の「事実叙述」タイプのテキストでは基本的な語順は VS 語順であり、小場面を区切るという文体的な効果を求めて、小辞 *ze* あるいは *a* をともなった SV 語順の節が使用されることがわかった。語順は談話の情報構造やテーマやレーマといった文の機能的な構造とは直接の関係を持たない。SV 語順の節の主語となる名詞句は、その時はじめて談話中に導入された名詞句ではなく、すでに主格あるいは他の形で文脈中に導入されていることが多い。その意味ではこの SV 語順の節の使用も談話の情報構造とまったく無関係というわけではない。しかしそれは、すでに一度主語として現れた名詞句を再び主語として選択し、かつそのことを小辞 *ze* あるいは *a* の付加によって強調することにより場面の転換を示すという、文体上の効果とより密接に結びついているのである。ここでの SV 語順の節の使用、VS 語順から SV 語順への切替えは、一種の語りのスタイルとでも言うべきものであり、書き言葉における 1 つの技法であると考えられる。⁴⁶⁾

§ 18 上の例 (22) の S4B4 では対比を示す小辞 *ze* あるいは *a* は現れていないが、文脈から判断して場面の転換が行われていると見ることも可能

である。しかし、特に対比のニュアンスをもたず、場面の転換とも結びつかない、いわば単なる SV 語順とでもいうべき節が現れることもある。これは次の例のように、ある年の記述やエピソードのはじめの方の部分でその登場人物がはじめて導入される際に用いられるのが、最も多い。⁴⁷⁾ (23) の模式図で示されたエピソードのはじめの小段落の先頭の VS の代わりに SV が現れたり、あるいは最初の幾つかの小段落の中で VS に代わって SV が現れるのである。例 (24) は 1017 (1018) 年の記述、(25) は 1019 (1020) 年の記述、(26) は 1024 (1025) 年の記述のそれぞれのはじめの部分で、ともにこの年の記事に始めて導入される登場人物が SV 語順の節の主語として現れている。一方ではじめて導入される他の登場人物や事物が VS 語順の節の主語としても現れている。全体を通してみるとこのような VS 語順の節の方が一般的である。上でみた小辞 *že* あるいは *a* をともなう SV 語順の節の使用が、書き言葉の特別なスタイルであるとする、このような段落の区切りを示さない SV 語順の節の使用は、話し言葉の特徴を反映するものである可能性がある。

- (24) a. Vъ lēt 6525. *Jaroslavъ*^{S1} *ide*^{F1}(ifv.aor.) [v Kijevъ]. i pogorě^{F2}(pfv.aor.) c(e)rkvi^{S2}. [142-23]
(6525 (1017-1018) 年 ヤロスラフが^{S1} [キエフに] 行き^{F1}, 教会が^{S2}焼けた^{F2}。)
b. S 1 F 1 — F 2 S 2
- (25) a. Vъ lēt 6527. *Pride*^{F1}(pfv.aor.) S(vja)topolkъ^{S1} s Pečeněgy. v silě tjažьcě. i *Jaroslavъ*^{S2} *sobra*^{F2}(pfv.aor.) množьstvo voi. i vzyde^{F3}(pfv.aor.) protivu jemu na Lъto. [144-9]
(6527 (1019-1020) 年 スヴァトポルクが^{S1}ペチェネギの大軍を率いて来た^{F1}ので、ヤロスラフは^{S2}多数の軍勢を集め^{F2}, 彼に向かってリト川に出撃した^{F3}。)
F 1 S 1 — S 2 F 2 = F 3
- (26) a. Vъ lēt 6532. *Jaroslavu*^{S1} *suštju*^{B1} (ifv.pr.prt.) Nověgorodě. *pride*^{F2} (pfv.aor.) Mъstislavъ^{S2} is Tъmutorokanja. Kyjevu. i i ne prijaša^{F3}(pfv.aor.) jeho Kyjane^{S3}. [147-19]
6532 (1024-1025) 年 ヤロスラフ^{S1}がノヴゴロドにいた^{B1}とき、ムスチスラフ^{S2}がトムトロカニからキエフにやって来た^{F2}が、キエフの人々は^{S3}彼を受け入れなかった^{F3}。

以下では強調、対比を表す小辞 *že* あるいは *a* をとめない、1つのエピソードの中で小場面の転換を示し、文体上の区切りをもたらすSV語順の節を「SV転換構文」、この小辞をとまわず、特別なニュアンス、文体上の効果を持たずに使用されるSV語順の節を「SV単純構文」と呼んで区別することにする。単にSV語順、SV語順の節と言う時には両方の構文を指すことにする。⁴⁸⁾

§ 19 「SV転換構文」の使用に際し、主語として、名詞を主要部とする通常の名詞句と並んで、遠称の指示代名詞 (*onъ/ono/ona/oni*) が現れる場合が多いことが注目される。例(22)で言えばS8F8の主語 *oni_j* 「彼ら」、S11B11の主語 *oni_j* 「彼ら」である。先に§ 15で、現代ロシア語の3人称の人称代名詞の主格形に比べ、古ロシア語でこれに対応する指示代名詞の生起がきわめて少ないことを指摘したが、『過ぎし年月の物語』では遠称の指示代名詞の主格形の使用は、事実上「事実叙述」タイプのテキスト中でこのような「SV転換構文」の主語として用いられる場合に限られている。また近称 (*sb/se/si/si*)、中称 (*tъ/ta/to/ti*) の指示代名詞の使用も「事実叙述」タイプのテキストではごくまれである。

この指示代名詞の「遠称」という意味について注意しておきたい。直示的に使用される場合には、これは話し手とこの代名詞を用いて指示される対象の間の空間的距離が大きいことを示す。これに対し「事実叙述」タイプの語りのテキストの中で照応形として使用される場合には、テキスト内における先行詞との距離が大きいことを示すと考えられる。例(22)に現れる2つの例について言えば、いずれも直前の節の省略された主語 ϕ_k^{S7} 「キエフの人々」、 ϕ_k^{S10} 「同」ではなく、それよりさらに前、すなわちテキスト中でより遠い位置に主語として現れている名詞句「ドレブリャネの使者」(例(21)の中で *Derevljane_j^{S5}*, *Drevljane_j^{S7}* という主格形で現れる) を先行詞としてとり、これを再度主語として導入するために用いられるのである。⁴⁹⁾ この指示代名詞の使用に

際して、その指示対象が主語以外の形、すなわち斜格の目的語の形で直前の節に現れていることも多い。例(22)でも oni_j^{S11} の先行詞「ドレヴリャネの使者」は直前の $ponesoša^{F10}$ 「運んだ」の直接目的語 ja_j 「彼らを」としても現れている。しかし、これは、この指示代名詞の使用のためにどうしても必要な条件ではない。先行詞が先行文脈中で主格の主語として現れていることの方がより重要であり、必須の条件であると考えられる。⁵⁰⁾

この遠称の指示代名詞も、先行詞を持つ以上、照応形としての機能を保っていることは否定できない。しかしこの指示代名詞が「SV 転換構文」にのみ現れるということは、これが、結束的なテキストを作るための形式的な装置として、照応形本来の目的で使用されているというより、むしろ VS 語順から SV 語順の節への切替えを示すためのマーカーとして使用されていることを示唆している。実際、テキスト上の距離を置いた照応関係であっても、SV 語順をとるべき動機がないとき、すなわち場面が転換されないときは、この指示代名詞は使用されない。通常の名詞句がそのまま使用されるのである。これが上例(21)で VS 語順の節が使用されている場合である：F 3 S 3 (主語はオリガ)， F 5 S 5 (主語はドレヴリャネの使者)， F 6 S 6 (主語はオリガ)， F 7 S 7 (主語はドレヴリャネの使者)。

3.2. 「コメント」タイプのテキスト

§ 20 上で「コメント」というテキストのタイプを立てた。その動機は、全体として特定の分布を持ち、内容的にもまとまりを持つ1つのテキスト単位をなすと考えられる一方で、そこで使用される動詞の形式を見ると、現在形や過去形が混在して用いられ、歴史記録の対象となる実際の出来事、聖書上の古い出来事、現在の状況、未来の可能性がすべて一様に記述されるという点で、通常の語りのテキストの枠内にも説明のテキストの枠内にも入れにくいということであった。

もう1つ例を引く。次は955(956)年、オリガが夫イゴリの復讐を遂げた後、ツァリグラド(コンスタンチノーポル)に赴き、キリスト教の洗礼を受けた記

その後、いわばオリガのこれまでの生涯に対する総括として現れる部分である。⁵¹⁾

- (27) a. se_q^{S1} že bys(t)^{F1}(ifv.aor.) jakože pri Solomaně. pride^{F2}(pfv.aor.) c(a)r(i)ca^{S2}
 Jefiop̣skaja k Solomanu. slyšati ϕ_i^{S3} chotjašti^{B3}(ifv.pr.prt.) pr(e)m(u)dr(os)ti
 Solomani. i mnogu m(u)drosṭ ϕ_i^{S4} vidě^{F4}(ifv.aor.) i znamjaṇja. takože i si_j
 bl(a)ž(e)naja Oḷga_j^{S5} iskaše^{B5}(ifv.impf.) dobroč m(u)dr(o)sti B(o)žbi. no ona_i^{S6}
 č(e)l(o)v(ě)č(̣)ski. a si_j^{S7} B(o)žbja. ištjušti^{S8}(ifv.pr.prt.) bo m(u)dr(o)sti
 obrjaštjuṭ^{D8}(pfv.pr.). [62–8]

これ_qは^{S1}ソロモンの時（にあったこと）と同じであった^{F1}。エチオピアの女王_iが^{S2}、
 ソロモンの知恵を ϕ_i^{S3} 聞こうとして^{B3}、ソロモンのもとにやって来た^{F2}。そして多くの
 知恵と（その）証を ϕ_i^{S4} 見た^{F4}。そのようにこの_j祝福されたオリガ_j^{S5}もまた、神の
 よき知恵を求めていたのである^{B5}。しかし彼女の女_i（＝エチオピアの女王）は^{S6}人間の
 （知恵を求めたのだが）、この女_j（＝オリガ）は^{S7}神の（知恵を求めたのである）。知
 恵を求めるものは^{S8}見出すのである^{D8}。

- b. S1F1—F2S2—B3—F4—S5B5—S6—S7—S8D8

まず、先行する「事実叙述」タイプのテキスト中に述べられた一連の歴史的出来事が、「これはソロモンの時（にあったこと）と同じであった」という形で、聖書の記述と併せて総括される。さらに、先行する「事実叙述」タイプのテキスト中で語られた物語の主人公オリガと聖書の中のエチオピアの女王⁵²⁾をだぶらせた記述が行われる。オリガの行為を過去の出来事として語り、同時に聖書の記述についてもあたかも本当にあった出来事のように語っている。そして、最後に一般的な真理が現在形を用いて述べられる（S8D8）。この例のように、多少なりとも連続した語りが行われる場合には、完了体と不完了体の使い分けによる前景（F2S2, F4）と背景（B3）の区別も可能である。⁵³⁾

この「コメント」タイプのテキストについて、まず「事実叙述」タイプの場合に比べ、語順がより自由である点に注意したい。SV 語順の節は *že* あるいは *a* を伴わず、場面の転換、文体上の区切りといったニュアンスとは無関係に、いわばごく自然に「SV 単純構文」として現れている。SV 語順をとる節の使用の頻度も、「事実叙述」タイプの場合に比べ、大きくなっている。

これは、このタイプのテキストで語順が固定していないこと、従って談話の情報構造や文の機能的な構造を反映し得るものであることを示唆している。⁵⁴⁾

具体的に観察してみる。最初の節 (S1F1) は、強調の *že* をともなっているものの、先行するテキストの内容、すなわち旧情報が主語となって近称の指示代名詞の中性形 *se* で示され、現代語と同じテーマの位置にあると考えることができる。次の節 (F2S2) では VS 語順が取られているが、これは現代ロシア語における、テーマの部分を持たずレーマの部分のみからなる文と、同じ構造を持つと解釈することができる。例えば次のような例である。これらはいずれも動詞が文頭に現れ主語が後続するという VS 語順をとり、意味的には何らかの個体や状況の存在あるいは出現、事件の生起、外的環境の様子と結びついている。⁵⁵⁾

(28) || *Goreli fonari.* (燃えていた一角灯, || 角灯が燃えていた。)

|| *Grochočet artilerija.* (轟いている一大砲, || 大砲の砲声が轟いている。)

|| *Cvela čeremucha.* (咲いた一みざくら, || みざくらが咲いた。)

|| *Razdalsja zvonok.* (鳴り響いた一ベル, || ベルが鳴り響いた。)

|| *Podkatil motocikl.* (乗り付けた一オートバイ, || オートバイが乗り付けた。)

これに続く 2 つの節 (B3, F4) では主語が省略されているが、その後の 2 つの節 (S5B5, S8D8) では再び SV 語順が取られる。いずれも旧情報が主語となり文のテーマとなっていると考えて問題はない。以上、この「コメント」タイプのテキストでは現代語と同じ語順の原理が存在していると考えることが可能である。

§ 21 照応的な指示代名詞の使用については、近称の指示代名詞 (*sb/se/si/si*) がよく現れることが注目される。遠称の指示代名詞は基本的には「事実叙述」タイプのテキストにのみ現れる。例 (27) でも遠称の *ona*_i⁵⁶⁾「彼の女 = エチオピアの女王」が使用されているが、これは後続する近称の *si*_j⁵⁷⁾「この女 = オリガ」とペアになっている。このような場合に限り、遠称の指示代名詞も「コメント」タイプのテキストに現れることができると考えられる。

これに対し、近称の指示代名詞は主として「コメント」タイプのテキストに現れる。この短い文脈の中でも、先行するテキスト内で述べられた出来事全体を指す中性の se_Q^{S1} 「これは」、 $si_j\ bl(a)ž(e)naja\ Olbga_j^{S5}$ 「この祝福されたオリガ」、また述語動詞が省略されているため厳密には節の主語ではないが、 si_j^{S7} 「この女＝オリガ」の3つが現れる。いずれの場合もSV語順が取られているが、第1の se_Q^{S1} の場合を除き、小辞 $že$ や a は付加されていない。「事実叙述」タイプのテキストにおける遠称の指示代名詞が、基本的なVS語順からSV語順の節への切替えを示すためのマーカーとして使用されていたのに対し、ここでの近称の指示代名詞はこのような機能とは無関係に、本来の照応形として使用されているように見える。

先行詞との関係を見ると、両者の違いがよりはっきりする。名詞句 $si_j\ bl(a)ž(e)naja\ Olbga_j^{S5}$ 「この祝福されたオリガ」の中で名詞を修飾している近称の指示代名詞 si 「この」について見てみよう。もしこの指示代名詞が、「事実叙述」タイプに現れる遠称の指示代名詞と並行的に使われているとすれば、こちらは近称であるのだから、直前の節 $vidě^{F4}$ 「見た」の省略された主語 ϕ_i^{S4} 、すなわち「エチオピアの女王」を指すことになるはずである。ところが実際の先行詞は、もっと前、すなわち先行する「事実叙述」タイプのテキストの中にある。これはこの指示代名詞の持つ「近称」という名称に矛盾している。また、先行する「事実叙述」タイプのテキスト中に先行詞があるということは、ある人物を記述の中心とする一連のエピソードからなる「事実叙述」タイプのテキストと、その人物についての評価を行う「コメント」タイプのテキストによって構成される、より大きな複合的テキストを1つの単位とし、その中で先行詞を求めるということに他ならない。この近称の指示代名詞は、単なる照応形として使われるというより、むしろこのような複合的テキスト単位の中で、談話の主題、主要な登場人物を直接指すために使用されていることが多いように思われる。例(27)の $si_j\ bl(a)ž(e)naja\ Olbga_j^{S5}$ 「この祝福されたオリガ」について言えば、先行する一連のエピソードの主人公であり、コメントの対象となっている「公妃オリガ」その人

が、この指示代名詞によって指示されているのである。すなわちここで使用される近称の指示代名詞は、テキスト上の距離が小さいことを示すのではなく、語り手との心理的な距離が小さいことを示すと考えられる。そう考えると、これが直前の節の主語「エチオピアの女王」（ゼロ代名詞の形で現れている）ではなく、離れているところにある「オリガ」を指しているという事実も納得が行く。

同じことは § 7 にあげた例 (3) についても観察される。se_i že S(vja)-topolk_i^{S25} novyi Avimelechъ 「このスヴァトポルクこそは新しいアビメレクである」、tako i sb_i^{S28} bys(t)^{V28} 「このもの (=スヴァトポルク) も同じであった」、いずれの場合も近称の指示代名詞 sb は先行する「事実叙述」部のエピソードの主人公であり、同時にコメントの対象となっているスヴァトポルクを指している。⁵⁶⁾ もしこれがテキスト上で近い距離にある名詞句を先行詞としてとるとすれば、前者はレメク、後者はアビメレクを指すはずである。

以上、本稿の出発点において1つのタイプとして立てることを提案した「コメント」タイプのテキストは、その現れる位置が決まり、種々の時制形式が混在して自由に用いられるという特徴以外にも、語順や指示代名詞の使用について、「事実叙述」タイプのテキストとは異なる独自の特徴を持つことがわかった。このコメントタイプのテキストは「地の文」を構成するが、その言語は「事実叙述」タイプのテキストとは異なり、語順や照応形の使用について、書き言葉の特別な技法に制約されない、より自由な言語としての特徴を示していると言えよう。これは書き言葉であるが、同時に次節で見る「直接引用」のテキストに現れる話言葉のテキストと共通する性格を持つことが予想される。

3.3. 「直接引用」タイプのテキスト

§ 22 次は 945 (946) 年の記事の中のオリガの復讐の物語から引用した部分である。

- (29) a. ... i umysli sice. posla ko gradu gl(agolju)šti(ifv.pr.prt.). “čto chočete^{D1}(ifv.pr.) dosědēti a vsi gradi vaši^{S2} predašasja^{D2}(pfv.aor.) mně. i jalisja^{D3}(pfv.pt.) po danь. i dělajutъ^{D4}(ifv.pr.) nivy svoja i zemlě svoja. a vy^{S5} chočete^{D5}(ifv.pr.) izъmereti gladomъ. ne imučesja^{D6}(pfv.pr.prt.) po danь.” Derevljane že rekoša(pfv.aor.). “radi sja bychomъ^{D7}(ifv.Cond.: pfv.Cond.) jali(pfv.l-prt.) po danь. no chošteši^{D8}(ifv.pr.) mьštati muža svojego.” reč(e)(pfv.aor.) že imъ Oľga. jako “azъ^{S9} mьstila^{D9}(pfv.pt.) uže obidu muža svojego. kogda pridoša^{D10}(pfv.aor.) Kijevu. vtoroje i tretъjeje. kogda tvorichъ^{D11}(ifv.aor.) tryznu muževi svojemu. a uže ne choštju^{D12}(ifv.pr.) mьštati. no choštju^{D13}(ifv.pr.) danь imati pomalu. [i] smirivšisja^{D14}(pfv.pt.prt.) s vami poidu^{D15}(pfv.pr.) opjatъ.” ... [58–17]

(そこで(オリガは)一計を案じ、町に使者を送って言った、「あなた方は」なぜ最後まで立てこもろうとする^{D1}のですか。あなた方のすべての町は^{S2}私に降伏しました^{D2}。すでに貢税を引き受けています^{D3}。自分たちの畑と土地を耕しています^{D4}。それなのにお前たちは^{S5}、貢税を引き受けず^{D6}、餓死しようとしている^{D6}のです」。ドレヴリャネは言った、「私たちは喜んで貢税を引き受けたいところです^{D7}が、(あなたは)自分の夫の仇を討とうとしている^{D8}ではありませんか」。そこでオリガは彼らに言った、「私は^{S9}、(あなた方の使者が)キエフに来たとき^{D10}、すでに自分の夫の恥をそいでいます^{D9}。(そして)二度目にも(そのようにし)、また自分の夫のために(私が)追悼会を行った^{D11}三度目にも(そうしています)。だからもう私は復讐しようとは思いません^{D12}。少しだけ貢税を取りたいと思います^{D13}。そして、お前たちと和を結んで^{D14}、引き揚げます^{D15}」。

- b. D1—S2 D2=D3=D4—S5 D5=D6,
D7—D8,
S9 D9—D10—D11=D12=D13=D14=D15

ここでは3つの直接引用が行われ、合計15の動詞述語が存在する。それぞれの引用は gl(agolju)šti 「(彼女は) 言った」、rekoša 「(彼らは) 言った」、reč(e) 「(彼は) 言った」という伝達動詞によって導かれている。

引用された動詞述語の幾つかはワインリヒのいわゆる「語りの時制群」に属しているが、いずれの場合も何かの物語が語られているとは考えにくい。§8で述べたとおり、これらの動詞述語は単独の出来事の生起を記述するものであり、ここで特別に小さな語りのテキストを設定すること、さらにその中で背景と前景を区別することは意味がない。また§8ではアオリストと並

んで現在完了の使用の例を示したが、例(29)では本来の現在完了の形に代わり、連辞が省略された形が現れている: *jalisja*^{D3} *po danь* 「貢税を引き受けています」, *mbstila*^{D9} 「恥をそそいでいます」。これが現在のロシア語の過去形の始まりである。

明示的な主語が現れ、語順の問題に関与するのは S2D2, S5D5, S9D9 の3つである。いずれも SV 語順がとられている。その内の2つは対比を示す小辞 *a* をともなっている。しかし、これは単なる対比を示すにとどまり、「事実叙述」タイプのテキストの場合のようにそこからさらに進んで、物語を小場面に区切っていくという特別な文体上の機能は認められない。なお「直接引用」タイプのテキストでは、この小辞 *a* は比較的好く現れるが、*že* の方はごくまれにしか現れない。これは注43)で触れた、*že* は物語的 (*povestvovatel'nyj*) 要素を含むテキストに、*a* は実務文書 (*gramota*) 類によく現れるという Borkovskij の観察に適合する。

一方で、*azь*^{S9} 「私」、*vy*^{S5} 「お前たち」といった1・2人称の直示的代名詞の使用とこの自然な SV 語順をとる節が多く現れることの間に相関があるようにも見える。対話の引用であれば当然、1・2人称の人称代名詞の使用が多くなる。もしその現れる位置が動詞の前に固定しているとすれば、必然的にこの「直接引用」タイプのテキストでは SV 語順をとる節が多く現れることになるからである。そこでこのタイプのテキストにおける語順について論じるときは1, 2人称を切り離し、3人称の場合について議論を進めることが必要になる。この例では S2D2 の例しかないが、次に § 8 で引いたいくつかの例を図式化して示す。この中で3人称の明示的な主語を持つのは (5') S3D3, (6') S1D1, (7') S1D1 の3つである。(5') S3D3 は疑問代名詞 *kto* が主語として現れているので、語順が固定している可能性を考えて議論から除くとしても、残り2例はいずれも SV 語順をとっている。全体として「直接引用」タイプのテキスト、つまり話し言葉の言語においては、主語が1・2人称の人称代名詞でなくとも、SV 語順の節の使用はごく自然なことである。

(5') D1—D2, S3D3, D4=D5—D6

(6') S1D1, D2

(7') S1D1—D2=S3D3

(8') D1=D2

VS 語順の節はこれらの例には現れていないが、全体を通して見ると、SV 語順の節とほぼ同じ割合で現れるようである。例えば上で引いた例 (18) b. の中の直接話法の部分にも、3 人称の明示的な主語を持つ VS 語順の節が現れている。次にその直接話法の部分だけを抜き出して図式化して示す。ここで D2 S2, D4 S4 がその例である。第 1 の例: posla^{D2} ny Derъvъska zemlja^{S2} 「ドレヴリャネの国が私たちを遣わしたのです」 について言えば、これは (18) a. の現代ロシア語においても poslala^{D2} nas Drevljanskaja zemlja^{S2} 「ドレヴリャネの国が…我々を送ったのです」 となって同じ VS 語順で現れている。

(18)b' D2S2—D2', D3—D4S4, S6D6—S7D7, D8=D9—D10, D11

『過ぎし年月の物語』の中に現れる断片的な対話のそれぞれについて、話し手や聞き手にとって何が旧情報として認識され何が新情報として認識されているのか、何が文のテーマとして選択され何がレーマとして選択されているのかを、明確な形で示すことはきわめて困難である。従って、この古ロシア語の「直接引用」のテキストにおいて、語順が談話の情報構造や文の機能的構造を反映していることの直接的な証拠を示すことはできない。しかし、以上見たように、「事実叙述」タイプのテキストの場合と異なり、語順が VS あるいは SV のいずれか一方に片寄らず自由であること、物語を小場面に区切っていくという文体上の機能を果たす「SV 転換構文」が用いられないこと、さらに現代語と同一の語順をとる例もあること、これらの点から判断してこの話し言葉のテキスト、「直接引用」のテキストでは語順が談話の情報構造や文の機能的構造を反映していると見ることに大きな無理はないと考え

られる。

主語の照応関係についてはここで引用したいいくつかの例を含め、全体をとおして特に注意を引く点はなかった。1, 2 人称の直示的な人称代名詞の使用が見られるのは当然のことである。3 人称の指示代名詞もこのテキストでは直示的に使用されることになる。但し実際の使用例は少なく、わずかに近称の指示代名詞 (sb/se/si/si) の使用がいくつか確認されたにとどまる。

3.4. テキストのタイプとその特徴: まとめ

§ 23 本章では、2 章で分類した「事実叙述」、「コメント」、「直接引用」というテキストのタイプと、結束的なテキストを形成する上で重要な役割を果たしていると考えられる動詞のテンス・アスペクト形式、語順、照応形の使用という3つの言語的な手段との関係について考察した。そして、これらの手段がそれぞれのタイプのテキストを区別する上でどのように役立つのか、さらにそれぞれのタイプのテキストにおいてこれらの手段がどのように機能しているのかということを見てきた。ここで、本章での観察を中心にこれまでの観察の結果を簡単にまとめておきたい。

まず、「事実叙述」タイプのテキストは動詞の過去形、いわゆる「語りの時制群」に属する形式の使用によって特徴づけられる。完了体アオリストや不完了体アオリストなどの前景を示す形式と不完了体未完了などの背景を示す形式が交互に現れることにより、物語が語られていく。基本的な語順は VS 語順である。現代語と異なり語順は談話の情報構造や文の機能的な構造を反映するものではなく、文体上の機能を果たしている。VS 語順の節の連続は事件の連続性を強調し一連の出来事を一息で述べる。この VS 語順から、ここで「SV 転換構文」と名付けた、強調、対比の意味を持つ小辞 *že* あるいは *a* をともなう SV 語順の節への切替えにより、物語の場面の転換、文体上の区切りが示される。このタイプのテキストには遠称の指示代名詞 (*онъ/ono/ona/oni*) の使用が特徴的である。この指示代名詞は先行文脈中で離れたところにある名詞句を先行詞としてとる。この指示代名詞の使用は語順の切替え

による場面の転換という文体上の技法と密接に関係している。

「コメント」タイプのテキストでは「語りの時制群」に属する過去の諸形式と「説明の時制群」に属する現在の諸形式が混在して用いられる。ここでは小さな物語が語られ、同時に説明が行われる。強調を示す小辞 *že* や *a* をともなわず特別な文体上の価値を持たない SV 語順の節と VS 語順の節が同じように現れる。すなわち語順は自由であり、談話の情報構造や文の機能的構造を反映していると考えられる。また近称の指示代名詞 (*sb/se/si/si*) の使用が特徴的である。この指示代名詞はテキスト上で近いところにある名詞句を先行詞としてとるのではなく、むしろ談話の主題、先行する「事実叙述」タイプのテキスト内の一連のエピソードの主人公であり、ここでの評価の対象となる人物を直接指示していることが多い。

「直接引用」タイプのテキストは話し言葉のデータを提供するものである。ここでも過去の諸形式と現在の諸形式が混在して現れる。しかし、過去の諸形式の使用は、必ずしも物語が語られていることを意味しない。ここで使用されるアオリストは、一連の事件を時間軸上に位置づけ物語を語るために使用されるのではなく、単に直前の出来事、あるいは過去の事件の生起を記述するだけである。そこからこのアオリストと、このタイプのテキストに特徴的な現在完了という2つの形式の間で、交替の可能性が生じる。ここでも特別な文体上の価値をもたない SV 語順の節が使用される。語順は自由であり、談話上、機能上の要因によって決定されていると考えることが可能である。

以上の点をまとめると、「コメント」タイプのテキストの言語は、「地の文」を構成する書き言葉でありながら同時に「直接引用」タイプのテキストに示される話し言葉の特徴の一部をも共有するという点で、「事実叙述」タイプのテキストの言語と「直接引用」タイプのテキストの言語の中間に位置すると考えることができる。

4. 数量的考察

4.0. はじめに

§ 24 前章では『過ぎし年月の物語』の言語について「事実叙述」, 「コメント」, 「直接引用」という3つのテキストタイプを分け, それぞれについて動詞のテンス・アスペクト形式, 語順, 照応形がどのように使用されているかを, 実際の例に即して観察した。本章ではこの観察の結果を数量的な面から確認したい。§ 5で述べたとおり, 次の4つの部分からデータを収集した。結果としてそれぞれの部分ごとの違いはあまり明確には現れなかったもので, 4つの部分を総合した観察の結果を述べることにする。

- A: 945年～955年: 「イゴリの死」, 「オリガの復讐」, 「オリガのコンスタンチノーブル行き」, 「オリガの洗礼」, 「息子スヴァトスラフへの伝道」
- B: 1016年～1047年: 「ヤロスラフとスヴァトポルクの戦い」, 「ヤロスラフの勝利と権力確立」, 「ヤロスラフがキエフの町の基礎を置く」, 「ヤロスラフの治世の終わり」
- C: 1051年: 「ペチェルスキー修道院の始まりの物語」
- D: 1074年: 「ペチェルスキー修道院長フェオドシー死す」, 「フェオドシーの死の詳細」, 「僧たちの列伝」

4.1. 動詞のテンス・アスペクト形式とテキストのタイプ

§ 25 まず, 3つのテキストタイプ, ならびに前景と背景の対立と, 動詞のテンス・アスペクト形式の相関について見る。但しその多くは, 当初の定義より明らかなことの確認である。

以下の表中で, MC「主節」は当該の形式が主節中にあることを, SC「従属節」は従属節中にあることを示す。「直接引用」タイプのテキストは対話をそのまま引用したものであり, 当然1・2人称の主語が多くなる。 § 22

で、1・2人称の直示的な人称代名詞が主語になる場合、動詞に対するその位置が決まっています。結果としてSV語順の節のみが現れる可能性があること、従って語順について考察するためには1・2人称と3人称の場合を分けて考える必要があることを述べた。動詞のテンス・アスペクト形式との関連では両者を分ける必要は特にはないと思われるが、後の議論との関係上、この表でも1/2P「1・2人称」と3P「3人称」を分け、さらに1・2人称の場合には、+AZ「主語が人称代名詞により明示されている」場合と-AZ⁵⁷⁾「主語が省略されている」場合を分けて表示しておく。

(30) 表I. テキストタイプとテンス・アスペクト形式の使用

		事実叙述		コメント			直接引用		
		語り		語り		説明	説明		
		前景	背景	前景	背景		1/2P		3P
							+AZ	-AZ	
pfv.aor.	MC	536		24		4	1	5	12
	SC	16	5	8	1			6	5
pfv.pt.prt.	MC	96		4				5	3
	SC	2	1						
ifv.aor.	MC	70		4				1	1
	SC	6		1		1		1	
ifv.impf.	MC		139		17	1	1		1
	SC		31		7			1	
ifv.pr.prt.	MC		99		14	3	1	6	6
	SC		6						
ifv.pt.prt.	MC		35		1	1		1	7
	SC								
pfv.plpf.	MC		3				1		
	SC		4					1	1
ifv.plpf.	MC		1						
	SC	1							
pfv.pr.	MC					6	7	23	6
	SC					5	3	8	8
ifv.pr.	MC					22	13	45	32
	SC		10			22	2	7	14
pfv.pf.	MC					1		4	5
	SC		2				1	5	2
ifv.pf.	MC							1	
	SC		1						
pfv.pt.	MC			1			1		2
	SC	1	4						
ifv.pt.	MC						1		
	SC		2						1
その他	MC	33	6		2	7	4	58	11
	SC	4	11		2	3		7	7
計		764	360	42	44	76	36	185	124
		1124		162			345		

それぞれの時制形式はこれまで例文中で用いて来たのと同じ略号を用いて示す。 § 6 および § 12 において、完了体・不完了体アオリストは語りの前景を示す形式、不完了体未完了過去、完了体・不完了体過去完了は語りの背景を示す形式、また完了体・不完了体現在、完了体・不完了体現在完了は説明のための形式と考えた。分詞は語りにも説明にも使用できるが、語りににおいて使用される場合には、完了体過去分詞は前景を、不完了体現在分詞、同過去分詞は背景を示す形式と考えた。但しこの表から、分詞形の大部分は、実際には、語りににおいて使用されていることがわかる。

「事実叙述」タイプの前景で完了体アオリスト、完了体過去能動分詞、不完了体アオリストが多く、背景で不完了体未完了過去、不完了体現在能動分詞、不完了体過去能動分詞が多いのは、当初の分類の当然の結果である。本来前景を示すための形式が背景を示すために使用されているのは、いずれも従属節の場合である。⁵⁸⁾ 前景と背景の比率は $764:360 = 2,12:1$ で前景の形式の方が優勢である。前景を示す諸形式のうち従属節中に現れるのは全体の 3,9% ($30/764$) にすぎないが、背景の場合には 21,4% ($77/360$) が従属節中に現れている。

「コメント」タイプのテキストでは過去の諸形式等を用いて語られる部分と現在の諸形式等を用いて説明される部分の比率は 86:76 とバランスがとれている。両方の時制群に属する形式が混在して用いられるということが、このタイプのテキストを立てた第1の動機であったが、そのことが確認されたことになる。

「直接引用」タイプのテキストでは1・2人称の主語が3人称よりも多いことが確認される (221:124)。1・2人称の場合には全体の 16,3% ($36/221$) が直示的な人称代名詞を明示的な主語として持っている。「語りの時制群」の形式および分詞類と「説明の時制群」の形式の使用の比率は 67:186 (この数字からは pfv.pt., ifv.pt. および「その他」は除いてある) となり、全体として「説明の時制群」の形式の使用が優勢である。 § 8, § 22 で、「直接引用」においては「語りの時制群」に属する形式が使用されていても、特に物語が語られてい

るというニュアンスは感じられないこと、完了体アオリストと完了体現在完了の交替の可能性があることを述べた。この表から完了体現在完了の使用が実質上この「直接引用」の場合に限られていることがわかる。また § 22 で完了体現在完了の連辞を省略した形式、すなわち現代語の過去形の来源となった形式が「直接引用」のテキストに現れている例を示したが、この表からは、このような過去形が完了体、不完了体を問わず、むしろ「事実叙述」タイプのテキストによく現れていることがわかる。これについては、連辞をともなう本来の現在完了と連辞が脱落した過去形がそれぞれ異なる機能を持っていたとする解釈と、連辞の脱落が書き言葉、「事実叙述」タイプのテキストから始まったとする解釈の2つが可能であるが、ここではこの問題には立ち入らないことにする。

4.2. 語順とテキストのタイプ

§ 26 次にテキストのタイプと語順の関係について調べてみたい。ここでSVは「SV単純構文」、SV+ŽEは小辞 *že* をともなう「SV転換構文」、SV+Aは小辞 *a* をともなう「SV転換構文」、VSはVS語順の節を指す。不定人称文⁵⁹⁾および無人称文は定義上主語を持たず、語順についての議論からは除外してよい。

まず明示的な主語を持つか主語を省略するかという点についてみると、明示的な主語を持つ形式(SV, SV+ŽE, SV+A, VS)と主語を省略した形式(V)の割合は「事実叙述」タイプの前景では315:397、背景では151:186、「コメント」タイプの前景では24:18、背景では20:19、説明では39:36とほぼ平均しているが、「直接引用」タイプの3人称では82:36となり主語が明示されている例が多い。これは一見意外にも思えるが、「直接引用」タイプで引用された登場人物たちの言葉が主として対話の断片的な記録に基づくものであるため、同一の主語の連続が少なく、必然的に主語が省略されにくくなったためと考えられる。これは、下の(33)表IV.において、「直接引用」の場合に0タイプ「初出主語」のケースが圧倒的に多いことから確認される。

(31) 表Ⅱ. テキストのタイプと語順

	事実叙述		コメント			直接引用		
	語り		語り		説明	説明		
	前景	背景	前景	背景		1/2P		3P
						+AZ	−AZ	
SV	37	31	8	10	15	23	2	34
SV+ŽE	79	29	3	1	5	3		1
SV+A	10	2	1	2	1	7		6
VS	189	89	12	7	18	3	3	41
V	397	186	18	19	36		180	36
不定人称文	47	19		3	1			5
無人称文	5	4		2				1
計	764	360	42	44	76	36	185	124

ここで問題となるのは、明示的な主語が現れる場合に SV 語順が取られるか VS 語順がとられるか、さらに SV 語順が取られる場合には「SV 単純構文」として現れるか že あるいは a をともなう「SV 転換構文」として現れるかという点である。

まず SV 語順と VS 語順の割合を見る。「事実叙述」タイプでは VS 語順が優勢であることが確かめられる。すなわち前景では 126:189, 背景では 62:89, 両者を合わせて $188:278 = 0,68:1$ である。これに対し「コメント」および「直接引用」タイプの場合には逆に SV 語順が優勢であるか、あるいは両者が同じ比率で現れることが確認される。すなわち「コメント」タイプの語りでは 25:19, 説明では 21:18, 両者を合わせて $46:37 = 1,24:1$ の割合で SV 語順が若干優勢である。「直接引用」タイプの 1・2 人称で人称代名詞が明示的な主語として現れる場合には、すでにその可能性を示唆したとおり、SV 語順が圧倒的に多いことが確認される。これは何らかの機能的な理由によるというより、むしろこの人称代名詞が原則として決まった位置、すなわち動詞の前に現れることを示している。従って以下では、1・2 人称の形式は語順に関する議論から除き、3 人称についてのみ見ることにする。3 人称の場合、SV 語順と VS 語順の節の比率は 41:41 で、両者は同じ割合で現れている。

SV 語順が取られる場合、語順が自由であることを示唆する「SV 単純構文」と、小辞 *že* あるいは *a* をともない場面の転換を示すという文体上の機能をもって使用される「SV 転換構文」のどちらが優勢であるかを見る。まず「事実叙述」タイプの場合には前景と背景を通して 68:120 と、「SV 転換構文」の出現が明らかに優勢である。前景と背景を分けて考えると、前景では 37:89 と全体の傾向と一致しているが、背景では 31:31 となり「SV 単純構文」の出現の割合が上がる。「SV 転換構文」の使用は、前景、背景いずれにおいても可能であるが、主語の交替を強調しつつ語りを進めていくという点で、前景中に現れるのがより自然であると考えられる。一方、「コメント」および「直接引用」タイプの場合には「SV 単純構文」が優勢であることが確認される。「コメント」では前景、背景、説明の全体を通して 33:13 と「SV 単純構文」が優位を示し、「直接引用」の 3 人称の場合にも 34:7 と「SV 単純構文」が圧倒的に優位に立っている。

また「SV 転換構文」について小辞 *že* を用いる場合と *a* を用いる場合について、「事実叙述」タイプと「コメント」、「直接引用」タイプの間で明らかな違いがあることも注目される。SV+ŽE と SV+A の生起の割合は「事実叙述」タイプでは $108:12 = 9:1$ 、「コメント」タイプでは $9:4 = 2,25:1$ 、「直接引用」タイプでは $1 \cdot 2$ 人称、3 人称を通して $4:13 = 0,31:1$ である。これは小辞 *že* の使用が書き言葉に特徴的であり、*a* の使用が話し言葉に特徴的であること、この点に関して「コメント」タイプのテキストの言語が、書き言葉でありながら話しことばの特徴をも備えていることを示している。

§ 27 前節の観察の幾つかをより明確にするために、問題の動詞が主節の中に現れる場合 (MC) と、従属節の中に現れる場合 (SC) を分けて考えてみる。

この調査により、小辞 *že* あるいは *a* をともなう「SV 転換構文」が従属節には現れないことがわかる。これはこの構文の持つ、主語の交替を強調することにより場面を転換するという機能からして当然のことであると考えられ

る。何らかの統語要素の強調は、主節中で行われるのが自然だからである。

「事実叙述」タイプのテキストにおいて、このような特別の文体上の機能を持たない自然な SV 語順の節、すなわち「SV 単純構文」の現れかたを見ると、程度の差こそあれ全体を通して従属節中でより現れやすくなっていることがわかる。まず前景が示される場合、主節では「SV 単純構文」とそれ以外の明示的な主語を持つ節が使用される比率は $34:269 = 0,13:1$ 、従属節では前景が示されること自体が少ないのでデータの信頼性は下がるが、 $3:9 = 0,33:1$ となり、従属節中で「SV 単純構文」の現れる割合が高くなっている。この傾向は「背景」の場合にさらにはっきりとする。すなわち主節では $12:62 = 0,19:1$ 、従属節では $19:31 = 0,61:1$ となる。

(32) 表Ⅲ. テキストタイプ、語順と節の種類

		事実叙述		コメント			直接引用		
		語り		語り		説明	説明		
							1/2P		3P
SV	MC	34	12	5	5	9	17	2	22
	SC	3	19	3	5	6	6		12
SV+ŽE	MC	79	2	3		4	3		1
	SC				1	1			
SV+A	MC	10	2	1	2	1	7		6
	SC								
VS	MC	180	58	7	5	10	3	3	27
	SC	9	31	5	2	8			14
V	MC	383	162	17	17	20		144	25
	SC	14	24	1	2	16		36	11
不定人称文	MC	44	18		3	1			4
	SC	3	1						1
無人称文	MC	4	2		2				1
	SC	1	2						
計		764	360	42	44	76	36	185	124

同じことが、本来「SV 単純構文」がよく用いられる「コメント」、「直接引用」タイプのテキストについても確認される。すなわち「コメント」タイプ全体を通して主節では「SV 単純構文」とそれ以外の明示的な主語を持つ節が使用される比率は $19:33 = 0,56:1$ 、従属節では $14:17 = 0,82:1$ 、

「直接引用」タイプの3人称の主節では $22:34 = 0,65:1$ 、従属節では $12:14 = 0,86:1$ となり、いずれも従属節中で「SV 単純構文」の現れる割合が大きくなっている。

4.3. 主語の照応関係、語順とテキストのタイプ

§ 28 次に主語の照応関係、すなわち当該の主語が先行文脈中に先行詞を持つか否か、持つとすればどこに、どのような形で持つかということと語順の相関関係、さらにテキストのタイプと指示代名詞の使用の関係について見てみたい。

表IV. では次の5つの場合を分けて考えることにする：1) 文脈中にはじめて導入される名詞句がそのまま当該の主語になる場合、すなわち先行詞がない場合（絶対初出主語：表中の0タイプ）、2) 先行文脈中で主格の主語としては現れていないがそれ以外の形（斜格目的語）で導入されている名詞句が当該の節で始めて主語となる場合、すなわち斜格の名詞句のみを先行詞として持つ場合（斜格導入初出主語：表中のIタイプ）、3) 同一の主語が連続する場合、すなわち直前の節の主語が先行詞になる場合（連続主語：表中のIIタイプ）、4) 直前の節中には主格、斜格いずれの形でも現れていないが文脈中ですでに主格の主語として現れている名詞句が再び主語として選択される場合、すなわち先行文脈中の離れたところにある主格の名詞句が先行詞となる場合（絶対再出主語：表中のIIIタイプ）、5) 文脈中ですでに主語として現れかつ直前の節中にも斜格であられる名詞句が再び主語として選択される場合、すなわち先行文脈中の主格の名詞句と直前の節中の斜格の名詞句の2つを先行詞としてとる場合⁶⁰⁾（斜格導入再出主語：表中のIIIoblタイプ）。また、それぞれの数字の右側上付きの小数字は遠称の指示代名詞（онъ/ono/ona/oni）の使用、同左下付きの小数字は近称の指示代名詞（сѣ/se/si/si）の使用を示す。いずれも内数である。中称の指示代名詞（тѣ/to/ta/ti）の使用は殆ど観察されなかったため、ここでは議論から除く。また、斜格導入初出主語（Iタイプ）についても、その例がきわめ

(33) 表Ⅳ. テクストタイプ, 語順, 主語の照応関係

				SV	SV+ŽE	SV+A	VS	V	不定人称文	無人称文
事実 叙述	語り	前景	0	24	5		86	5	30	5
			I		4	1	5	7		
			II	3 ¹	3 ¹	3	20 ²	314	13	
			III	8 ¹	34 ⁵	5	42	53	4	
			IIIobl	2	33 ¹⁸	1	36	18		
		背景	0	17	7	2	51	7	13	4
			I		1		5	3		
			II	6 ³	1 ¹		12 ⁵	151	6	
			III	7	7 ¹		12	15		
コ メ ン ト	語り	前景	0	4	1	1	9	1		
			I							
			II	1	1		2	15		
			III	3	1		1	2		
			IIIobl							
		背景	0	7	1 ¹	1	3		2	2
			I					1		
			II				2	16	1	
			III	2		1	2	1		
直 接 引 用	説明	1/2P +AZ	0	10	4	1	14	6	1	
			I				1	2		
			II	2			3	19		
			III		1			3		
			IIIobl	3				6		
		-AZ	0					74		
			I					7		
			II	2			2	71		
			III					10		
直 接 引 用	3P	3P	0	30		5	35	12	4	1
			I				2	3		
			II	1	1	1	1	18	1	
			III				2	2		
			IIIobl	3			1	1		
		計								
				160	121	29	362	872	75	12

て少なく、かつ有意義な観察結果を見いだせなかったもので、以下の議論では特に触れていない。以下で初出主語と呼ぶのは絶対初出主語（0タイプ）の場

合を指す。また絶対再出主語 (Ⅲ) と斜格導入再出主語 (Ⅲobl) を合わせて再出主語と呼ぶことにする。

まず「事実叙述」タイプについて見る。不定人称文、無人称文の場合を除き、明示的であるとないとを問わず主語を持つ場合をすべて通して見ると、前景では初出主語が少なく、大部分が連続主語あるいは再出主語であることがわかる (初出主語: 連続・再出主語 = 120:575 = 0,21:1)。一方背景では初出主語の割合が高くなっていることがわかる (初出主語: 連続・再出主語 = 84:244 = 0,34:1)。この結果は、§ 13 で紹介した、新しい名詞句が主語として文脈中に導入される時には不完了体の動詞、すなわち背景の形式が使用され、すでに明らかな主語に対しては完了体動詞、すなわち前景の形式が使用されるという Forsyth (1970), Hopper (1979) の観察が、古ロシア語にも当てはまることを示している。前景の形式の機能は、すでに文脈中に導入されている名詞句を主語 (=主題) としてこれについてコメントすることであり、当然連続主語、再出主語の割合が高くなる。一方背景の形式の持つ、物語の進行を一旦停止して補助的な情報を提供するという機能は、Forsyth 等の指摘した新しい登場人物を主語の形で文脈中に導入することと、すでに文脈中に導入されている名詞句についてもう一度コメントすることの2つにより実現されと考えられる。従って背景の場合に初出主語の割合が高くなるのである。

連続主語の場合最も優勢なのは前景、背景いずれにおいても V 語順、すなわち主語が省略された節である。これは当然のことである。

§ 29 前章では、語順について、「事実叙述」タイプのテキストでは語順が固定し、談話の情報構造や文の機能的構造を反映しないが、「コメント」タイプ、「直接引用」タイプのテキストでは自由な語順が可能であり、談話の情報構造や文の機能的構造を反映することができると考えた。初出主語と連続主語、再出主語についてのデータから、この問題について、より直接的な観察が可能になる。

もし語順が談話の情報構造を反映しているとすれば、SV 語順がとられる場合、これは特別な文体上の機能を持つと考えられる「SV 転換構文」では

なく、「SV 単純構文」として現れるはずである。そして、その主語は当然旧情報としてすでに文脈中に現れているはずである。従って、「SV 単純構文」は連続主語あるいは再出主語の場合に最もよく用いられることになるはずである。これに対し、VS 語順がとられる場合には、§ 20 で言及した現代ロシア語のレーマのみからなる文と同様、主語は新情報となり、当然初出の名詞句が主語となるのが自然である。

「事実叙述」タイプについて見る。まず、「SV 単純構文」の列を見ると、これが最もよく使用されているのは連続主語や再出主語の場合ではなく、初出主語の場合であることがわかる。これは、「事実叙述」タイプのテキストでは、「SV 単純構文」はある年の記述やそれぞれのエピソードのはじめの部分で、新しい登場人物を導入するために使用されることが多いという、§ 18 の観察にも一致する。一方、VS 語順の列を見ると、こちらも一見して初出主語の場合が多くなっていることから、この場合には語順が談話の情報構造を反映している可能性があるようにも見える。しかし、そもそも初出主語と連続・再出主語の場合の絶対数が異なるので、単純に2つの語順の使用を比べることはできない。「SV 単純構文」とVS 語順の節の使い分けについて、初出主語の場合と連続・再出主語の場合に分けて確かめる必要がある。煩雑さを避けるため前景と背景を合わせた数字を比べると、「SV 単純構文」とVS 語順の節の使用の割合は初出主語の場合は $41:137 = 0,30:1$ 、連続・再出主語の場合は $27:131 = 0,21:1$ となり、どちらも同じようにVS 語順の節の使用が圧倒的に優勢である一方で、しいて言えば、むしろ初出主語の場合に「SV 単純構文」の使用の割合が若干上がっていることがわかる。すなわち、語順が談話の情報構造を反映するとして予想される結果とは、ちょうど逆の結果が得られたことになる。

「コメント」タイプのテキストの場合には、データの数あまり多くないので、語りの前景と背景、そして説明を合わせた数について調べてみる。すると、「SV 単純構文」とVS 語順の節の使用の割合は、初出主語の場合には $21:26 = 0,81:1$ 、再出・連続主語の場合には $12:10 = 1,2:1$ となり、どち

らの場合もほぼバランスがとれている一方で、初出主語の場合には VS 語順の節の使用が若干優位であり、連続主語および再出主語の場合には「SV 単純構文」の使用が若干優位である傾向が確認される。これは、語順が談話の情報構造を反映するとして予想される結果に適合する。この数字を完全に評価するためには、現代ロシア語との比較が必要になるが、現在その準備はない。しかし、少なくとも「事実叙述」タイプのテキストとの違いは明らかである。

「直接引用」タイプのテキストについては、全般に、そして特に 3 人称の場合、初出主語の割合が非常に高いことに気づく。これは § 26 で指摘した、このタイプのテキストの多くが短い断片的な会話からなり立っているということによる。また 1・2 人称で連続主語、および再出主語の比率が若干高くなっているのは、これが対話の引用であるということの結果であると考えられる。3 人称について、「SV 単純構文」と VS 語順の節の使用の割合を、同じく初出主語の場合と、連続・再出主語の場合に分けて調べてみると、初出主語の場合には $30:35 = 0,86:1$ 、連続・再出主語の場合には $4:4 = 1:1$ となり、「コメント」タイプの場合とよく似た結果が得られる。

他方、「事実叙述」タイプのテキストでは語順は文体的な要因によって決定されるという本稿での立場に関して、再出主語の場合に「SV 転換構文」と VS 語順の節が前景では 73:78、背景でも 20:21 とほぼ 1 対 1 の割合で現れている点が注目される。これは、語り手が、VS 語順を用いて事件を連続的に切れ目なくスピーディーに記述していくか、それとも「SV 転換構文」を用いて適宜場面を転換し記述にアクセントをつけていくかという 2 つの手法の間で、バランスよく選択を行っていることを示していると解釈できるからである。上でこの「SV 転換構文」による場面の転換は、すでに一度主語として現れた名詞句を再び主語として選択し、かつそのことを小辞 *že* あるいは *a* の使用によって強調することにより行われると考えた。このことは「SV 転換構文」の使用が初出主語や連続主語ではなく、再出主語の場合に集中していることにより確認される。さらに絶対再出主語と斜格導入再出主語

ではその使用の割合が同じであることから、先行詞が直前の節中に斜格で現れるか否かということは「SV 転換構文」そのものの使用には関与しないこともわかる。

以上テキストのタイプと語順、そして主語の照応関係に関する観察は、「事実叙述」タイプのテキストでは語順は談話の情報構造を反映せず文体的な要因によって決定され、「コメント」タイプおよび「直接引用」タイプのテキストでは語順は談話の情報構造を反映している可能性があるという、前章での観察結果を支持するものである。

§ 30 前章で指摘した「事実叙述」タイプのテキストと「コメント」タイプのテキストのもう1つの違いは指示代名詞の主格形の使用にあった。そこで表IV.の各数字に付加された遠称の指示代名詞 (онъ/ono/ona/oni) と近称の指示代名詞 (sb/se/si/si) の使用の様子を見ることにする。

まず遠称の指示代名詞が「事実叙述」タイプのテキストに優勢であり、近称の指示代名詞が「コメント」タイプのテキストに優勢であることが、この表からはっきりと確認される。「事実叙述」タイプのテキストで遠称の指示代名詞が主語となるのは44回、近称の指示代名詞が主語となるのは5回であるのに対し、「コメント」タイプのテキストで遠称の指示代名詞が主語となるのは1回、近称の指示代名詞が主語となるのは8回である。「コメント」タイプの例の絶対数が少ないことを考慮すれば、このタイプにおける近称の指示代名詞の生起数8回はかなり大きな数と見なすことができる。すなわち、「コメント」タイプで明示的主語を持つ全83例に対する8回の生起は、「事実叙述」タイプのテキストにおける明示的な主語を持つ全466例に対する遠称の指示代名詞の生起44例とほぼ一致している。

次に、主語の照応関係との関連において、この2つの指示代名詞の使用を観察してみたい。まず「事実叙述」タイプのテキストにおける遠称の指示代名詞の使用は、連続主語の場合と再出主語の場合、すなわち先行詞を持つ場合に限られていることがわかる。従ってこの遠称の指示代名詞が照応形としての機能を保持していることも事実であるということになる。さらに、前景、

背景を合わせて連続主語のケースが 13、再出主語のケースが合計 31 で、明らかに再出主語の場合が優勢であることから、この照応が基本的には先行詞との間に距離を置いた照応であることが確認される。さらにこの指示代名詞が現れるのが「SV 転換構文」に集中していることも確認される。VS 語順をとる節にも前景と背景を合わせて合計 7 例が現れていることから、この指示代名詞の位置が動詞の前に固定されているということはないと思われる。それにも拘らず 44 例中 32 例がこの「SV 転換構文」に現れるということは、この指示代名詞が単に照応形としてのみ機能しているのではなく、「SV 転換構文」の果たす文体上の働きと密接な関係を持っていることを示している。すなわち主語が交替したことを強調することによって生じる場面の転換という効果である。さらに絶対再出主語に比べ斜格導入再出主語として現れる方が明らかに多いことから、この指示代名詞の使用の引き金となるのは、文脈中に主格主語の形で現れている名詞が直前の節にも斜格の形をとって現れることであるということがわかる。但しこれが必須の条件でないことも明らかである。以上、「事実叙述」タイプのテキストを特徴づける遠称の指示代名詞は、照応形としての機能を維持しつつも、「SV 転換構文」と密接に結びついて、文体上の機能を果たしていることが確認された。

「コメント」タイプのテキストに現れる 8 例の近称の指示代名詞のうち、小辞 *ze* をともなって現れるのは 2 例だけであることから、この近称の代名詞が場面の転換を示すといった特別の文体上の機能を持つことなく使用されていることがわかる。「コメント」タイプのテキストにおけるこの近称の指示代名詞の使用は、「事実叙述」タイプにおける遠称の指示代名詞の使用に比べ、より自由であるように思われる。絶対数が少ないことから断定は出来ないものの、初出主語（1 回）、連続主語（1 回）の場合にも可能である。また再出主語の場合も、絶対再出主語（4 回）、斜格導入再出主語（2 回）となっていて、「事実叙述」タイプのテキストに現れる遠称の指示代名詞とは異なり、「直接先行する節の中に同一指示の名詞句（先行詞）が斜格の形であらわれる」といった、その生起のための引き金は存在しないと考えられる。絶対再出主

語の場合の4例は、その中のいくつかについてはすでに上で見たが、いずれも先行する「事実叙述」タイプのテキスト中に現れる談話の主人公を先行詞としてとるものである。それ以外の4回の使用についても、談話全体の主人公ではないが、談話のその部分で非常に重要な要素を指していると考えることができる。以上の観察は前章で述べた (§ 21, § 23 参照), この指示代名詞が近称という名称から予想されるにも拘らず、決して直前の節の主語を先行詞としてとるのではなく、談話の主題、主人公を直接指示するために使用されている可能性があるという見方に適合するものである。なお、この近称の指示代名詞は「直接引用」タイプのテキストにも2回現れているが、これは直示的な用法での使用である。

以上この章を通しての議論により、前章で実際の例について観察した結果、すなわち 1) 「事実叙述」、「コメント」、「直接引用」という3つの異なるテキストのタイプが、動詞のテンス・アスペクト形式の分布によって区別されるということ、2) 「事実叙述」タイプと「コメント」、「直接引用」タイプが優勢な語順の違いによって区別されるということ、3) 「事実叙述」タイプと「コメント」、「直接引用」タイプにおいて語順が果たす機能が異なっているということ、4) 「事実叙述」タイプと「コメント」タイプは指示代名詞の使用においても異なっていること、5) 「事実叙述」タイプのテキストに現れる遠称の指示代名詞と「コメント」タイプのテキストに現れる近称の指示代名詞はそれぞれ異なる機能を持っていること、6) 「コメント」タイプのテキストは書き言葉でありながら話し言葉の特徴をもち、特別なスタイルの書き言葉としての「事実叙述」タイプのテキストと話し言葉としての「直接引用」タイプの中間にあること、といった諸点がデータの数量的な観察から支持されることが示された。⁶¹⁾

5. 『過ぎし年月の物語』の成立とその言語的特徴

§ 31 本稿は、「事実叙述」、「コメント」、「直接引用」という3つのテキストのタイプと、テキストを形成するために重要な役割を果たしていると考えられる種々の言語的手段との関係について、『過ぎし年月の物語』全体を通しての記述を試みるものであった。一方で『過ぎし年月の物語』の複雑な生成の過程を考えると、問題としたテンス・アスペクト形式の使用、語順、指示代名詞の使用が、この物語のそれぞれの部分において異なった特徴を示す可能性は十分に考えられる。しかしこの点を実際に確かめるのはきわめて困難である。

語順を例とする。本稿の議論では、「SV 単純構文」は「コメント」と「直接引用」タイプのテキストによく現れ、そこで語順が談話的な要因によって決定されている可能性を示すものであった。また、「事実叙述」タイプのテキストが主として年ごとの記録に基づいているのに対し、「コメント」タイプのテキストは集成者によっていわば書き下されたものと考えた。従って、テキストの内容と成立の過程により、例えば集成者が自らの経験に基づいて記述したような事件の記録があるとすれば、「事実叙述」タイプのテキスト中であっても、「コメント」タイプのテキストと同じ特徴を持っている可能性があることになる。次の表 V-A. と表 V-D. はそれぞれ、A. 「945～955 年」と D. 「1074 年：フェオドシーの死とペチェルスキー修道院の僧たちの列伝」の部分で語順を調査したものである。一見して、「事実叙述」タイプのテキストでは、D. の方に「SV 単純構文」がよく現れているように見える。そこで、さらに「SV 単純構文」と VS 語順の節の生起の割合を調べてみると、前景の場合は A. で $3 : 47 = 0,07 : 1$ 、D. で $9 : 41 = 0,22 : 1$ 、背景の場合は A. で $7 : 18 = 0,39 : 1$ 、D. で $14 : 31 = 0,45 : 1$ となっている。この違いは『過ぎし年月の物語』の成立の過程を反映しているようにも思える。D. の部分はいずれかの編纂者が自らの経験に基づいて書き下ろした可能性もあり、結果としてこの部分の「事実叙述」タイプが「コメント」タイプのテキスト

と共通の特徴を持っていることも考えられるからである。

(34) 表V-A.

	事実叙述		コメント			直接引用		
	語り		語り		説明	説明		
	前景	背景	前景	背景		1/2P		3P
						+AZ	−AZ	
SV	3	7	2	2	6	11	75	9
SV+ŽE	20	8	1			1		
SV+A	3	2				4		
VS	47	18	3		6	1		12
V	84	32	3	1	2			15
不定人称文	3	2						
無人称文	1	1						
計	161	70	9	3	14	17	75	40

(35) 表V-D.

	事実叙述		コメント			直接引用		
	語り		語り		説明	説明		
	前景	背景	前景	背景		1/2P		3P
						+AZ	−AZ	
SV	9	14		6	2	7		14
SV+ŽE	26	11		1		2		1
SV+A						2		
VS	41	31	1	3	1	1	2	21
V	135	98	1	8	7		64	17
不定人称文	19	6		3				1
無人称文	2							1
計	232	160	2	21	10	12	66	55

しかし実際にはそれほど単純な問題ではない。§ 18で、「事実叙述」タイプのテキストでは、「SV 単純構文」はある年の記述やそれぞれのエピソードのはじめの部分によく現れ、登場人物をはじめて文脈中に導入する働きをもっていることを述べた。さらに§ 29で、「事実叙述」タイプのテキストでは、「SV 単純構文」は初出主語の場合によく現れることを確認した。従ってここでもまず初出主語の絶対数を問題にする必要がある。これは次の表に示

される。

(36) 表VI—A.

				SV	SV + ŽE	SV + A	VS	V	不定人称	無人称文
事 実 叙 述	語り	前景	0	2			7		3	1
			I		1		2	2		
			II		1	1	4	59		
			III		8	2	15	13		
			IIIobl	1	10		18	5		
	背景		0	3	2	2	11		1	1
			I				3			
			II	1			2	28	1	
			III	3	1		1	2		
			IIIobl		5		1	2		

(37) 表VI—D.

				SV	SV + ŽE	SV + A	VS	V	不定人称	無人称文
事 実 叙 述	語り	前景	0	5	3		17		9	2
			I		2		2	2		
			II				3	109	6	
			III	4	11		13	19	2	
			IIIobl		10		6	5	2	
	背景		0	6	3		14		4	
			I				1	3		
			II	4	1		6	74	2	
			III	3	3		4	11		
			IIIobl	1	4		4	10		

この表から直ちに A.と D.で初出主語の絶対数が異なることがわかる。すなわち、不定人称文、無人称文の場合を除き、初出主語を持つ節が現れるのは、A.では前景、背景を合わせて 27 回であるのに対し、B.では 48 回に上る。そして特に前景の場合、初出主語を持つ「SV 単純構文」の生起が、初出主語を持つ節の絶対数によって規定されていることがわかる。すなわち前景について、初出主語を持つ「SV 単純構文」の明示的な初出主語を持つ形式全体に対する割合を見ると、A. では $2 : 9 = 0,22 : 1$ 、D. では $5 : 25 = 0,20 : 1$ となって A.と D.の間で差は見られない。さらに初出主語を持つ

「SV 単純構文」と VS 語順の節の割合についても、A.の前景では $2 : 7 = 0,29 : 1$ 、背景では $3 : 11 = 0,27 : 1$ 、D.の前景では $5 : 17 = 0,29 : 1$ 、背景では $6 : 14 = 0,43 : 1$ となり、D.の背景の場合を除けばほぼ平均し、A.と D.の間で特に大きな差は見られない。ちなみに § 28 の表IV.に現れる、全体の数値を見ると、「事実叙述」タイプで初出主語を持つ「SV 単純構文」と VS 語順の節の現れる割合は、前景では $24 : 86 = 0,28 : 1$ 、背景では $17 : 51 = 0,33 : 1$ となっている。ここでみた A., D.ともにこれとそれ程変わらない傾向を示していると言えよう。

このように考えると、一見して D.の「事実叙述」の部分で「単純 SV 構文」が多く現れるように見えるからといって、これを直ちにこの年代記の成立の事情と結びつけて考えることは適当でないことがわかる。本稿では、テキストのタイプとテキストを形成する種々の言語的な手段の関係について、『過ぎし年月の物語』全体を通しての特徴を明らかにすることにつとめた。この問題と年代記の成立の過程とを関係づけて考えることは、いずれ資料を増やしたうえで、稿を改めて論じることにはしたい。

6. 結び

§ 32 以上、本稿では 12 世紀初頭に成立した古ロシアの年代記『過ぎし年月の物語』の言語を対象に、談話的、テキスト的な観点からその特徴を明らかにすることを試みた。まずはじめに地の文に属する「事実叙述」、「コメント」、直接話法によって引用された対話からなる「直接引用」という 3 つのタイプのテキストを分けて考えることを提案した。「事実叙述」タイプのテキストはこの年代記全体のいわば基調をなす部分である。これは複数の物語、エピソードからなる 1 つの大きな、複合的な物語である。それぞれの年の記述がごく短い 1 つ、あるいは 2 つのエピソードからなる場合もあれば、「オリガの復讐の物語」のように長大なエピソードもある。「コメント」タイプのテキストはこのような 1 つの長いエピソード、あるいは同一の主人公に

ついでの一連のエピソードの後に、それまで語ってきた一連の出来事とその主人公に対する、編纂者の時代、キリスト教徒としての立場からの評価を行うために挿入される。この「コメント」が終わると再び、「事実叙述」タイプのテキストにより新しいエピソードが始まるのである。その意味で「事実叙述」タイプのテキストと「コメント」タイプのテキストはそれぞれ固有の分布を持っているということになる。一方「直接引用」タイプのテキストは「事実叙述」タイプのテキスト中に直接引用された登場人物の言葉からなる。その内容はさまざまであるが、これも種々の伝達動詞によって導入されるという意味でやはり固有の分布をもっていると言えよう。

次に動詞のテンス・アスペクト形式、語順、主語の照応関係と指示代名詞の使用という、結束的なテキストを形成する上で重要な役割を果たしていると考えられる3つの言語的手段に関して、それぞれのタイプの特徴を明らかにすることを試みた。議論は具体例の観察と数量的な考察という2つの側面から行った。結果は次のようにまとめることができる。

まず動詞のテンス・アスペクト形式の分布については、「事実叙述」タイプのテキストはいわゆる「語りの時制群」に属する動詞の過去形、すなわち完了体・不完了体アオリスト、不完了体未完了過去などの使用によって特徴づけられ、「コメント」タイプのテキストは「語りの時制群」に属する過去形と「説明の時制群」に属する現在の諸形式が混在して使用されるという点で特徴づけられた。「直接引用」タイプのテキストにおいても「語りの時制群」の動詞形式と「説明の時制群」に属する動詞形式が混在して現れる。このタイプでは現在完了の使用も特徴的である。

これらのテンス・アスペクト形式がそれぞれのタイプのテキストの中でどのような機能を果たしているかという点についても見た。まず「事実叙述」タイプのテキストでは完了体アオリスト、不完了体アオリストなどのいわゆる前景の出来事を示す形式と、不完了体未完了過去などの背景を示す形式の対立により、物語の主要な筋と背景的な情報が区別され、物語がより物語らしい形をもって語られている。この対立は「コメント」タイプのテキスト中

でも観察される。すなわち「コメント」タイプのテキストでは語りと説明の両方が行われ、その語りの部分で前景と背景が区別されることになる。一方「直接引用」タイプのテキストではこの対立は意味を持たない。少なくともデータ中には、ある程度以上の長さをもった1人称の本格的な語りの例は見いだせなかった。

次に、語順という点については、「事実叙述」タイプではVS語順が優勢であるのに対し、「コメント」タイプ、「直接引用」タイプではSV語順とVS語順がほぼ同じ割合で現れることが確認された。

語順がそれぞれのタイプのテキスト中で果たしている機能は次のように考えられる。まず「事実叙述」タイプのテキストでは語順は談話の情報構造や文の機能的構造を反映しない。ここでは基本的な語順であるVS語順の節と、ここで「SV転換構文」と名付けた強調、対比の意味を持つ小辞 *že* や *a* をともなうSV語順の節の交替が観察されるが、これは談話上の要因によるものではない。一種の語りのスタイル、書き言葉の技法と見なすべきものである。VS語順の節の連続は一連の出来事をいわば一息で語る効果を持ち、スピーディな記述が可能になる。一方VS語順の節からSV語順の節への切替えは場面の転換を示し、語りに一種のアクセントをつける。「コメント」タイプのテキストでは語順は自由であり、SV語順とVS語順の節が同一の頻度で使われるが、文体上の機能を持つ「SV転換構文」は使われない。ここで使われるのは「SV単純構文」のみである。ここでは語順は談話の情報構造、文の機能的な構造を反映していると考えられる。これは「直接引用」のテキスト、すなわち話し言葉の言語においても同様である。語順は自由であり、SV語順の節とVS語順の節が同じ割合で現れる。ここでも語順は談話上、文の機能的な構造上の要因により選択されている可能性が強いと考えられる。

それぞれのタイプのテキストにおける語順と談話の情報構造の関係は、主語名詞句の照応関係、すなわち文脈中に先行詞を持つかどうか、持つとすればどこに持つかといった観点からの議論により、より明確に示される。さら

に、3人称の指示代名詞の主格形の使用という点についても、それぞれのタイプの違いがはっきりする。すなわち、「事実叙述」タイプのテキストはいわゆる遠称の指示代名詞 (онъ/ono/ona/oni) の使用により、「コメント」タイプのテキストは近称の指示代名詞 (сь/se/si/si) の使用により特徴づけられる。「直接引用」タイプのテキストは1・2人称の人称代名詞 (азъ/ty/my/vy) の使用により特徴づけられるが、これは単に対話をそのまま引用したことによるものである。

さらに、この照応形の機能も異なっていることが示された。「事実叙述」タイプのテキストに現れる遠称の指示代名詞は照応形としての機能を果たすとともに、つねに小辞 *ze* あるいは *a* とともに現れ、「SV 転換構文」のマーカーとしての文体上の機能を果たしている。その先行詞は直前の節の主語ではない。それよりも前にある節の主語である。その意味でこの指示代名詞は「遠称」ということになる。この先行詞が同時に、直前の節中にも斜格の目的語として現れることが、この指示代名詞の使用のための引き金になる。但し、これは必須の条件ではない。この指示代名詞の使用のための必要条件は、先行詞となる名詞句が先行文脈中で主格の主語として現れていることである。一方「コメント」タイプのテキストで使用される近称の指示代名詞は、遠称の指示代名詞が持つような文体上の機能を持たない。この指示代名詞は、その「近称」という名称にも拘らず、一番近くにある名詞句を先行詞としてとるのではなく、談話の主題、主要な登場人物を直接指示するために使われている可能性が強い。

「事実叙述」タイプ、「コメント」タイプのテキストの言語は地の文を構成する書き言葉であり、「直接引用」タイプのテキストの言語は話し言葉である。しかし以上の観察の結果は、「コメント」タイプのテキストの言語が、「事実叙述」タイプのテキストの言語と話し言葉としての「直接引用」タイプのテキストの言語の中間にあることを示している。

以上は『過ぎし年月の物語』を全体として捉えた観察の結果である。しかしこの複雑な生成の過程を持つ年代記のそれぞれの部分と、このような特徴

がどのように関係しているのかという点については、本稿では扱えなかった。それが非常に困難な問題であることを示したのみである。これは今後の課題としたい。また「事実叙述」タイプのテキスト，すなわち書き言葉の言語における優位な形式である VS 語順がどのようにして成立したのか，スラブ語における本来的な語順を示すものであるか否かという点についても，今後の課題としたい。

注

- 1) 通称『原初年代記』とも呼ぶ。最近の邦訳として、筆者も加わった日本古代ロシア研究会による共訳『ロシア原初年代記』（訳者代表國本哲男，山口巖，中条直樹，名古屋大学出版会 1987 年刊）がある。本稿で用いた例文の訳は，これを参照しつつ，原文の構造，特に節の区切りができるだけ明らかになるよう留意して，筆者があらたに行った。
- 2) drevnerusskij jazyk
- 3) 現ウクライナのキエフを中心とするロシアの古称。
- 4) 『過ぎし年月の物語』1037（1038）年の記事を参照。
- 5) Šachmatov（1908），同（1916），Tichomirov（1960）などを参照。
- 6) 僧ラヴレンチーにより 1377 年にスズダリ大公ドミトリー・コンスタンチノヴィチのために筆写されたラヴレンチー年代記（Lavrent'evskaja letopis'）の前半部，15 世紀末に成立したラヂヴィル年代記（Radzivilovskaja letopis'），同じく 15 世紀に成立したと考えられるモスクワ教会アカデミー本年代記（Moskovsko-Akademičeskaja letopis'）などの系列，および 15 世紀のイパチー年代記（Ipat'evskaja letopis'），16 世紀のフレブニコフ年代記（Chlebnikovskaja letopis'）を中心とする系列の写本である。
- 7) *Lavrent'evskaja letopis'. vyp. 1 : Povest' vremennyx let. (Polnoe sobranie russkich letopisej izdavaemoe postojannoju istoriko-arheografičeskoj komissiej u Akademii Nauk SSSR. tom 1.) izd. 2. Leningrad. 1926.* 引用はそのリプリント版である Müller, L. ed. (1977) *Handbuch zur Nestorchronik. Band 1. (Forum Slavicum. Band 48.) München.* によった。
- 8) 当時のロシアでは聖書の記述にもとづき天地創造からはじめて年代を数えるというビザンツ式の暦法が用いられ，1 年は 3 月 1 日に始まるとされていた。編年体の記述が始まるのは原テキストで 6360 年であるが，これは西暦 852 年の 3 月～12 月，同 853 年の 1 月～2 月にあたる。以下本文中では西暦紀元になおした年号を用いるが，例文中に年号が現れる場合には訳中に原テキストの年号と西暦の年号を併記した。それぞれの事件が何月に起きたのかがわかれば正確な西暦の年号を示すことができるが，殆どの場合これは明らかにされていないので，例えば 852（853）年のように記すことにした。
- 9) Šachmatov（1908）参照
- 10) 『過ぎし年月の物語』の 5 次にわたる集成の行われた年を【 】に入れて図中に示した。年号は厳密には例えば [945（946）] とすべきところを [945] とした。等号「=」は 2 つの年代記の記述がほぼ完全に一致すること，不等号「≠」は対応する記事はあるが内容的には異なっていることを示す。対応する記事が欠けている場合は「—」という記号で示した。
- 11) 各ページが 2 段組になっていて，各段（コラム）に通し番号がふってある。ページが打たれていないため，以下の引用では例文末尾にコラムと行を示すことにする。

- 12) 将来的には『過ぎし年月の物語』各部分の差異について、これ以外のデータも加えた上でその成立の過程と関係づけた議論を行いたいが、本稿ではこれらの部分を総合して得られるこの年代記の言語の一般的特徴を明らかにすることを目標とする。
- 13) p. 184 参照。なお同書ではこれに論述テキスト (argumentative texts: 「特定の信念や観念を真あるいは偽なるものとして、あるいは肯定的ないし否定的なものとして受け入れた、評価したりすることを推し進めるために」 (p. 184) 使用される) を加えている。descriptive (texts) の訳語としては「記述 (のテキスト)」の方が正確であろう。しかし本稿では「記述」、「記述する」という日本語の表現は「説明」と「語り」の両方をカバーする一般的な用語としてとっておきたい。
- 14) 同訳書 p. 20. 参照
- 15) 以下の引用はカールスキー校訂版による。キリル文字はローマ字化して転写したが、その際同校訂版で区別されている特殊な文字は、ここでは特に区別せず、**ia**, **А** は ja で、**ie**, **ε** は je で、**ω** は o で、**ы** は y で、**ѡѣ**, **8** は u で、**i** は i で転写した。また **ш** は st で転写した。[] 印は同校訂版でラヴレンチャー年代記の明らかな欠落部分を他の写本にもとづいて補った部分を示す。省略綴の使用に際し原写本でそれぞれの綴の上部に補われている小型文字は、特に区別せずその本来の位置に挿入した。省略綴の一部しか補われていない場合には、残りの部分を () にいれて補った。直接語法の部分についてはカールスキー校訂版では特に示されていないが、本稿では“ ”を用いて明示した。数字は同校訂版では原写本に基づいてキリル文字アルファベットを用いて表記してあるがこれはアラビア数字に転記した。それぞれの例の末尾の数字 (例えば [145-17]) はそのはじめの部分の位置をカールスキー版のコラムと行によって示したものである。
- 16) 以下の例では述語動詞を V, その主語を S で示し、対応する主語と述語に同一の番号を付す。例(11) 以下では動詞について、語りの前景を示す形式と背景を示す形式 (§ 12 参照), そして説明のための形式を区別し、それぞれ F, B, D という符号で示す。

動詞のテンス・アスペクト形式については次の略号を用いる: pfv.AnPas.pf.: perfective analytical passive perfect 「完了体迂言的受動現在完了」, pfv.aor.: perfective aorist 「完了体アオリスト」, pfv.Cond.: perfective conditional 「完了体条件法」, pfv.Impr.: perfective imperative 「完了体命令法」, pfv.Inf.: perfective infinitive 「完了体不定法」, pfv.l-prt.: perfective resultative participle (l-participle) 「完了体過去能動分詞第2形」, pfv.pt.: perfective past 「完了体過去」, pfv.pt.prt.: perfective past active participle 「完了体過去能動分詞」, pfv.pt.pas.prt.: perfective past passive participle 「完了体過去受動分詞」, pfv.pf.: perfective perfect 「完了体現在完了」, pfv.plpf.: perfective pluperfect 「完了体過去完了」, pfv.pr.: perfective present 「完了体現在」, pfv.pr.prt.: perfective present active participle 「完了体現在能動分詞」, ifv.AnImpf.: imperfective analytical imperfect 「不完了体迂言的未完了過去」, ifv.aor.: imperfective aorist 「不完了体アオリスト」, ifv.Cond.: imperfective conditional 「不完了体条件法」, ifv.impf.: imperfective imperfect 「不完了体未完了過去」, ifv.Impr.: imperfective imperative 「不完了体命令法」, ifv.l-prt.: imperfective resultative participle (l-participle) 「不完了体過去能動分詞第2形」, ifv.pr.: imperfective present 「不完了体現在」, ifv.pr.prt.: imperfective present active participle 「不完了体現在能動分詞」, ifv.pr.pas.prt.: imperfective present passive participle 「不完了体現在受動分詞」。

それぞれの例を図式化して示す際には同一の主語が連続することを「=」, 主語が交替することを「-」の記号で示す。

完了体現在完了, 同過去完了は完了体過去能動分詞第2形 (結果を表す l 分詞) と連辞 byti の現在あるいは未完了過去によって、またここで完了体迂言的受動現在完了と呼んだ

ものは完了体過去受動分詞と連辞 byti の現在によって作られる複合動詞を指す。現在完了の連辞は時として省略される。これが現代ロシア語の過去形の来源である。ここではこの助動詞が省略された形を完了体過去 (pfv.pt.), 不完了体過去 (ifv.pt.) と呼んで現在完了そのものから区別する。条件法は過去能動分詞第2形と連辞 byti の条件法によって作られる。またここでは、不完了体動詞の現在能動分詞短尾形と連辞 byti の未完了過去からなる名詞的述語 (cf. Ivanov. 1983: 378) を、不完了体迂言的未完了過去と呼ぶことにする。

例文中でこのような複合形式が現れる時は、分詞、連辞いずれであれ線条構造において最初に現れた要素と主語との相対的な順序をもとに語順を論じることにする。例文中の動詞の番号もこの最初に現れた要素につける。例えば例文(1)の jestь^{V1} (ifv.pr.: pfv. AnPas.pf.) svjazanь (pfv.pt.pas.prt.) 「～(する)ことになる」。この場合複合形式全体の形は、番号をつけた方の要素の説明中で「:」の後に示すことにする。

- 17) 本稿では、主格で現れ動詞と数と人称が一致する名詞句の他、例(2)の S 12 のようなスラブ語に固有の存在否定をあらわす生格 (genitive) の名詞句と、絶対与格構造で行為の主体を示す与格名詞句も主語として扱うことにする。iže, ježe, jaže タイプの関係代名詞主格については、例文中では便宜上主語として扱い対応する動詞と同じ番号を付与した (例えば、例(3)の iže_p^{S26} ... bē^{V26}, iže_p^{S27} izbi^{V27})。しかし、その位置は節の先頭に固定しているの、これを主語とするとこのような関係節ではつねに SV 語順が現れることになる。そこで、後の語順に関する議論からはこのようなタイプの関係節は除くことにし、統計上は主語を持たない V 語順の構文として扱った。
- 18) 以下本文中での議論に関係がある場合に限り、名詞句による同一指示 (coreference) の関係を i, j, k ... の添字を用いて示す。その際、主語が省略されている場合にはこれを ϕ (ゼロ代名詞) の形で補う。主格以外の名詞句が省略されている場合も、必要があればこのゼロ代名詞を用い、例えば ϕ_{ACC} のようにその格形式を示す。またいわゆる近称の指示代名詞中性形 se が、名詞句よりも大きな単位、例えば節などを先行詞としてとり、何らかのプロセス (～すること)、あるいは事実 (～であること) について言及する場合 (Halliday and Hasan (1976: 52 ff.) では extended reference, text reference と呼ばれる。英語では it, that, this がこの用法で使用される) には、これに Q, R, S ... の添字を付して示す。但し先行詞の方は特に示さなかった。例文中でのゼロ代名詞 (ϕ) は、便宜的に現代ロシア語における中立的な位置、すなわち主語については動詞の前、目的語については動詞の後ろに置いた。訳文でも原則として同じ位置に置いた。但し明示的な代名詞その他の形でこれを翻訳しなければ、日本語として意味が通じなくなる場合には、日本語の文として適切な位置に () に入れたその訳語を補い、ゼロ代名詞はその前に置いた。
- 19) 分詞が述語となる節の主語については次のように考えた。現代ロシア語では分詞そのものは主語をもたず定動詞に付随して現れる。しかし古ロシア語においては分詞と定動詞の違いはそれほど明確ではない。まず第1に与格名詞句により主語を明示したいいわゆる絶対与格構造がある (例(2)の bēžaštju^{V3} jemu^{S3} 「彼が逃げる」、例(3)の sudu^{S1} našedšju^{V1} 「裁きが降り」など)。つぎに、分詞の主語となる可能性を持つ名詞句が現れ、一方でこの名詞句を主語として取り得る定動詞が存在しないため、必然的にこの名詞句を分詞の主語と見なさざるを得ない場合 (A タイプ: 例えば: i bys(t)^{F1} (ifv.aor.) vęstь^{S1} Grьkomъ. jako izbilo^{B2} (pfv.pt.) more^{S2} Rusь. i poslawъ^{F3} (pfv.pt.prt.) c(a)рь imenemъ Monomachъ^{S3} po Rusi. oljadii 14. Volodimerъ^{S4} že viděvъ^{B4} (ifv.pt.prt.) s družinoju. jako idutъ^{B5} (ifv.pr.) po nemъ. [154–18] ... 「海が^{S2}ルシを打ち滅ぼした^{B2}という報せが^{S1}グレキのもとにもたらされた^{F1}ので、モノマコスという名の皇帝が^{S3}ルシを追って十四隻の船を送った^{F3}。ウラヂミルは^{S4}(彼らが)自分たちを追って来る^{B5}のを従士団と共に見て^{B4}...」)、および、分詞の主語となる可能性を持つ名詞句が現れ、かつこの名詞句を主語として取り得る定動詞も存在するが、接続詞 i (and) や分詞の目的語が両者の間に介在して名

詞句を定動詞から引き離すので、必然的にこの名詞句を分詞の主語として解釈せざるを得ない場合（Bタイプ：*prinikъši^{F1}*(pfv.pt.prt.) *Olga^{S1} i reč(e)^{F2}*(pfv.aor.) *imъ*... [56-26]「オリガは^{S1}身を屈め^{F1}、そして彼らに言った^{F2}、……」, *slyšav^{B1}*(ifv.pt.prt.) *že Jaroslavъ^{S1} volchvy. pride^{F2}*(pfv.aor.) Suzdalju. [147-29]「ヤロスラフは^{S1}占師たちのことを聞いて^{B1}スズダリにやって来た^{F2}。」)がある。

以上古ロシア語では分詞が主語を持つ可能性を否定できない。本稿では、特に後述の語順に関する考察との関係から、分詞もすべて主語を持つという立場に立って議論を進めたい。そこで分詞と定動詞そして名詞句が並んで現れる時は、上の例のように統語的に明らかかな場合を除き、この名詞句がどちらの主語であるかを決める必要が生じる。3つの配列の可能性がある：1) 名詞句——分詞——定動詞、2) 分詞——名詞句——定動詞、3) 分詞——定動詞——名詞句。このうち、3)については名詞句は明らかに定動詞の主語である（VS語順）。また1)も、SV語順かVS語順かという点に関して数量的な考察を行う際には、実質上の障害とはならない。この名詞句が分詞、定動詞いずれの主語であってもSV語順が1例、V語順（主語省略）が1例と数えることができるからである（例：*oni^{S1/S2} že to slyšavše^{B1}*(ifv.pt.prt.) *sъvezoša^{F2}*(pfv.aor.) *medy mnogi zělo*. [57-14]「彼らは^{S1/S2}これを聞き^{B1}、非常に多くの蜜を持ち寄った^{F2}。これに対して、2)の場合には問題が生じることになる（例：*se slyšavše^{B1}*(ifv.pt.prt.) *Novgorodci^{S1/S2} rěša^{F2}*(pfv.aor.) Jaroslavu [142-4]「ノヴゴロドの人々は^{S1/S2}これを聞いて^{B1}ヤロスラフに言った^{B2}」)。名詞句を分詞の主語と考えればVS語順、定動詞の主語と考えればSV語順になるからである。しかしこの場合も実は、数量的な考察について言えば、結果としてそれほど大きな影響を与えるものではない。その数のごく限られているからである。数量的考察の対象とした全1631例の節の内、主語省略（V語順）文、不定人称文、無人称文をのぞいて語順に関する議論の対象となるのは672例、その中で2)のタイプの問題が生じる可能性を持つのは12例に過ぎない。ちなみに、絶対与格構文は60例、統語的に名詞句を分詞の主語と考えざるを得ない場合は（上のA、B2つのタイプをあわせて）23例、1)の名詞句——分詞——定動詞の順に並んでいて語順に関する数量的な考察については実質的な障害とならない場合も同じく23例であった。そこで、2)のタイプの12例について、名詞句を分詞の主語と解釈してVS語順と考えると、定動詞の主語と解釈してSV語順と考えると、統計上はそれほど大きな差異が出るとは考えにくい。以上の点を考慮し、ここでは機械的に線条構造において前にある要素から順次語順を決めていくことにする。従って、2)の場合については分詞（VS語順）——分詞の主語——定動詞（主語省略）ということになる。1)の場合についても、同じ基準に従い、分詞の主語——分詞（SV語順）——定動詞（主語省略）とする。本文中の例ではこのような基準により主語を指定した。結果としてVS語順の節の出現の割合が実際よりも多少高くなる可能性は否定できない。しかし、その影響は最小限と考えてよいだろう。

- 20) テキスト中における時制の一貫性については Weinrich (1974) の他, Dymarskaja-Babaljan (1988: 20) を参照。
- 21) 現代の視点から客観的に見れば、これは単にキリスト教的な立場からの評価というより、むしろ交替した次の為政者によって年代記作成の作業を委嘱された編纂者の立場からの評価ということになるだろう。
- 22) Halliday and Hasan (1976: 274 ff.) の用語を借りれば reiteration および collocation により lexical cohesion が生じたということになる。
- 23) 訳文では、それぞれアオリスト、完了の形式の意味を強調した訳をあててある。しかし、古ロシア語における完了とアオリストの使い分けについては、現在なお未解決の点が多い。cf. 山口 (1991)
- 24) 同じくこの例に現れる命令法の形式も便宜上説明として扱う。

- 25) 対話とは別に、1人称で語られかつある程度の長さを持つ物語としては、『過ぎし年月の物語』全体を通してみると、1091（1092）年の記録者あるいは編纂者自身の体験に基づくと思われる「元修道院長フェオドシーの遺体の改葬の経緯」、1096（1097）年の記事の中程に見られる「ノブゴロドのロゴフの子ギュリャタから聞いた話」、そして1096（1097）年の記事の後に挿入されている「モノマフの教訓」などがあげられる。この中で第1、第3のものは直接話法というよりは1人称で語られた地の文における物語であり、「事実記述」のテキストに分類される。「ギュリャタから聞いた話」については、ギュリャタが1人称で語った物語を直接引用した可能性は否定できないが、これについては別に論じる必要があらう。
- 26) カインとアベルについては旧約聖書創世記第4章1節～17節、レメクについては同18節～24節、アビメレクについては旧約聖書士師記8章30節～31節、同9章1節～57節参照。ただしレメクが殺人を犯したという記述、彼がエノクの2人の兄弟を殺しその妻を自分のものにしたという記述は旧約聖書にはない。ここでは、レメクについての旧約聖書の記述とアビメレクに関する記述が混乱していると考えられる。
- 27) 引用はドイツ聖書協会刊行 Alfred Rahlfs 編, *Septuaginta: Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*. Stuttgart: 1935. によった。
- 28) § 12 参照。
- 29) 以上の議論に従い、4章で行う数量的考察ではそれぞれの動詞形式を、「事実叙述」タイプのテキストについては前景と背景に、「コメント」タイプのテキストについてはまず語りと説明に、次に語りを前景と背景に分けて考える。「直接引用」タイプのテキストについては一律に説明として扱うことにする。
- 30) 子供向けに易しく書かれたものを含め、『過ぎし年月の物語』の幾つかの現代ロシア語訳、抄訳を参照したが、いずれも現代語には存在しない語彙や文法範疇を現代語のそれに置き換えただけで、他の点では古ロシア語のオリジナルと殆ど変わるところはなかった。そのためここでは、間接的なやり方ではあるが、『過ぎし年月の物語』のオリジナルとはじめから現代ロシア語で書かれた歴史書のテキスト（Solov'ev, S. M. (1959). *Istorija Rossii s drevnejšich vremen*. kn. 1. Moscow: Izd. Social'no-ekonomičeskoj literatury.）を比較した。
- 31) 古ロシア語の段階では現代のスラブ諸語において確立している完了体動詞（glagoly soveršennogo vida）と不完了体動詞（glagoly nesoveršennogo vida）の対立からなる体（vid）の組織はまだ完成せず形成の過程にあったと考えられる。厳密な言い方をすれば、この時代のロシア語については完了体動詞、不完了体動詞という名称の代わりに例えば完了的動詞（glagoly s perfektivnym značeniem）、不完了的動詞（glagoly s imperfektivnym značeniem）と言った名称を用いるべきであろう（cf. Bukatevič et al. 1974: 188）。しかし、古ロシア語を対象とする以上特に誤解の恐れはないので、ここでは完了体、不完了体という名称を用いることにする。
- 32) ロシア語については、すでに1940年代に、Vinogradov がプーシキンの『スペードの女王』の言語のスタイルを対象とした論文（Vinogradov. 1941）の中で、「完了体動詞の過去形はあたかもその内部に動的なエネルギーを持っているかのようである。どの完了体動詞過去形をとってみても、語りを展開し前進させる能力がその中に存在する」、そして「…完了体動詞過去の諸形によって形成される物語りの線条的な（場合によっては点線で示されることもある）プランの中に、不完了体動詞の諸形によって新しい次元が導入される」と指摘している。（引用は Vinogradov (1980: 230–231) による）。
- 33) Maslov (1984 a: 32 ff) の現代ブルガリア語に関する議論を参照。
- 34) Forsyth 自身は主として具体例について、論理的強調（logical emphasis）、新しい主題（new topic）、新しい情報（new information）といった用語を用いて完了体と不完了体

の用法を説明している。Hopper (1979) はこの Forsyth (1970) の議論にもとづき、より明確に「完了体の使用は、主語の主題性が高く、動詞述部が文の焦点となっているような情報構造と関係している… (これに対し) 動詞とその補語が新しく提示された情報を示さない場合には…不完了体が使用される」(p. 218: 括弧内は筆写) と述べている。

- 35) 例は Forsyth (1970: 84–88) より。
- 36) Mathesius によって提案された Functional Sentence Perspective (aktual'noe členenie predloženia) の考えに基づく。本文中の例でⅡの左の部分がテーマ (theme), 右の部分がレーマ (rheme) である。Raspopov (1979), Švedova et al. eds. (1980: 190 ff.) などを参照。例は Švedova et al. eds. (1980: 190) より。
- 37) 例えば、次の a. では先行文脈中に現れない、すなわち新情報である skazki 「お伽話」という語がテーマの部分にある。逆に b. では、レーマの部分に存在する ob ètom 「このことについて」は、指示代名詞の使用からもわかるとおり明らかに旧情報である。a. Skazki njanja nam Ⅱ ne rasskazyvala. 「お伽話を—乳母は—私たちに Ⅱ 語らなかった: 乳母は私たちにお伽話はしてくれなかった」, b. Ja Ⅱ pošel pogovorit' ob ètom s djadej. 「私は Ⅱ 出かけた—話す—このことについて—叔父と: 私はこのことについて叔父と相談するために出かけた。」(例は Švedova et al. eds. (1980: 193) より)。
- 38) § 13 で見た完了体と不完了体の対立による新情報と旧情報の対立という問題も関与してくるため、現代ロシア語の語順の問題はそれほど簡単には処理できないが、基本的には、現代ロシア語の語順は談話的、機能的要因により決定されることができよう。
- 39) 現代ロシア語では照応形として3人称の人称代名詞 (on/ono/ona/oni 「単数男性/同中性/同女性/複数」), および指示代名詞 (ètot/èto/èta/èti 「この: 単数男性/同中性/同女性/複数」) が使用される。古ロシア語では3人称の人称代名詞は十分に発達しておらず、代わりに指示代名詞が使われていた。これには近称 (sъ/se/si/si 「この: 単数男性/同中性/同女性/複数」) と遠称 (onъ/ono/ona/oni 「あの: 単数男性/同中性/同女性/複数」, そして中立的な指示代名詞 (tъ/to/ta/ti 「その: 単数男性/同中性/同女性/複数」) の3種類がある。この遠称の指示代名詞が現代語の人称代名詞の起源となった。一方1・2人称の直示的な人称代名詞の使用についても、現代ロシア語の ja/my 「1人称単数/同複数」, ty/vy 「2人称単数/同複数」と古ロシア語の jazъ/my 「1人称単数/同複数」, ty/vy 「2人称単数/同複数」の間で差異が存在する可能性はあるが、ここではこの問題は扱わなかった。
- 40) 現代ロシア語において主格の人称代名詞の省略 (ゼロ代名詞の使用) がどのように条件づけられるかという点について、Nichols (1984) は、連続的に現れ予測可能な登場人物 (theme) はゼロ代名詞 (anaphoric zero pronoun) で示され、他の副次的な登場人物の挿入や、統語構造の変化により語りが非連続になる場合、また登場人物が交替することにより視点が変化する場合には、明示的な主語が示されるとする。また、Flashner (1987) は現代ポーランド語の口頭の1人称の語りについて、連続的に現れ予測可能な登場人物 (theme) はゼロ主語 (anaphoric zero subject) で示され、主格以外の形で導入された登場人物が後続の文で主語として現れる場合 (eg. Tatuś^{S1}_{NOM} jęⁱ_{iACC} spotkał^{F1} (pfv.pt.) w Saradowie, i ona^{S2}_{iNOM} pracowała^{B2} (ifv.pt.) w stołówce, i ona_i … 「パパが^{S1}彼女_iとサラトフで会った^{F1}。彼女_iは^{S2}食堂で働いていた^{B2}。彼女_iは……」), またいわゆる提示文 (presentative construction) により新しい登場人物が導入され、そのまま後続する文の主語になる場合 (eg. ale do mego wagonu wchodzi^{F1} (ifv.pr.) oficer^{S1}_{iNOM}, on^{S2}_i uhladuje^{F2} (ifv.pr.) swoją_i żonę, … 「ところが、私の車室に士官が^{S1}入って来た^{F1}。彼_iは^{S2}, えーっと、自分_iの妻を押し込んで^{F2}, ……」) には、照応形を用いて明示的に示されるとする。

古ロシア語で3人称の指示代名詞の斜格形に比べ、主格形の出現はかなり限られている。これに対し現代ロシア語では3人称の人称代名詞の主格形は文脈により省略が可能である

にも拘らず、省略が困難な斜格形に比べてもはるかに大きな頻度で現れる。安藤厚氏の『罪と罰』第1部、第2部計145ページを対象とした調査によれば、3人称単数人称代名詞男性形の主格 on「彼」が1144回現れるのに対し、対格/生格 ego は464回、与格 emu が230回、同女性形の主格 ona「彼女」が242回現れるのに対し、対格 ee の出現は150回であるという。(文部省科学研究費総合 (A)「スラヴ語学文学の比較対照研究の課題と方法」研究会 (1992年1月18日)における同氏の口頭発表「concordance によるドストエフスキの語彙と文体の研究」による)。

- 41) これは上の例 (18) と重なる部分である。なお、図式において従属節中において背景を示すと考えられる節は括弧の中に入れることにする。
- 42) 従属節中の形式についてそれが前景を示すか背景を示すかという点は従来必ずしも十分に論じられているわけではない。Weinrich (1977) は、フランス語に関する議論の中で主節、従属節という概念に頼らず、時制形式にのみ頼って前景と背景を決定する方が現実をうまく説明できるとする (同訳書 p. 209 参照)。一方 Givón (1984: 288–289) は前景と背景の対立について、「この相関関係は絶対的なものではなく、むしろ蓋然的なものに過ぎない」とし、次の表にあるようにそれぞれの要素ごとに前景と背景の対立を認めることを主張する。これによれば、主節と従属節の対立も前景と背景の対立に関与していることになる。

DISCOURSE FOREGROUND/BACKGROUND CORRELATIONS OF TENSE-ASPECT-MODALITY

feature	foreground	background
tense	past	present, future, habitual
sequentiality	in-sequence	out-of-sequence, anterior, perfect
durativity	compact/punctual	durative/continuous
perfectivity	perfective/completive	imperfective/incompletive
modality	realis	irrealis
(activeness)	(action/event)	(state)
(syntax)	(main clauses)	(subordinate clause)

本稿では主節中の前景を示す形式によって時間軸上である時点まで進行してきた物語の筋が、従属節中の動詞形式によってさらに前に進む場合には、この従属節中の形式は前景を示していると考え、進まない場合には、これが完了体アオリスト、不完了体アオリストなど本来前景を示す形式であっても、背景を示していると考えた。次のような例を挙げることができる。

A. 従属節内部の完了体アオリストによって前景が示される。

[i] rěša^{F1}(pfv.aor.) Derevljane^{S1} k Olbžě ... ona^{S2} že reč(e)^{F2}(pfv.aor.) ... [i] jako upišasja^{F3}(pfv.aor.) Derevljane^{S3}. povelě^{F4}(pfv.aor.) otrokomъ svoimъ piti na nja. a sama^{S5} otide^{F5}(pfv.aor.) kromě i ... [57–22] (ドレヴリャネ^{S1}はオリガに向かって言った^{F1},「…」と。すると彼女^{S2}は言った^{F2},「…」と。そしてドレヴリャネ^{S3}が酔うと^{F3}, (オリガは) 自分の下級従士に彼らの (名誉の) ために飲むように命じ^{F4}, 自分は^{S5}脇へ退いた^{F5}。そして)

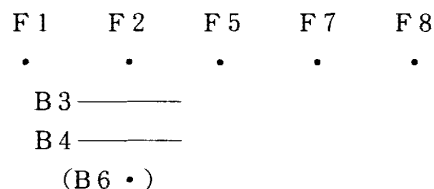
ここではそれぞれの事件は時間軸上で次のように配列される。F3は接続詞 jako で導かれる時を示す副詞節の中にあるが、F1, F2まで進行してきた事件の流れを時間軸上でさらに前に進めているので、前景を示していると考えた。

F1 F2 F3 F4 F5

B. 従属節内部の完了体アオリストによって背景が示される。

... i poslaša^{F1}(pfv.aor.) Derevljane^{S1} lučšije muži čislomъ 20 vъ lody k Olъž. i pristaša^{F2}(pfv.aor.) podъ Boričevymъ v lody. bē^{B3}(ifv.impf.: ifv.AnImpf.) bo togda voda^{S3} tekušti(ifv.pr.prt.). vъzdolъ gory Kijevъskija. i na podolъ ne sēdjachu^{B4}(ifv.impf.) ljudъje^{S4}... i povēdaša^{F5}(ifv.aor.) Olъž jako Derevljane^{S6} pridoša^{B6}(pfv.aor.). i vozva^{F7}(pfv.aor.) je Olъga^{S7} k sobě. [i reč(e)^{F8}(pfv.aor.) imъ] ... [55 – 16] (…そしてドレヴリャネは^{S1}その数二十人の身分の高い家臣を船でオリガのもとへ送った^{F1}。そして(彼らは) ボリチェフ (の坂) の下に船をとめた^{F2}。当時水が^{S3}キエフの山のそばを流れていて^{B3}, 人々は^{S4}ポドリエに住んでおらず^{B4}, …… (人々は) ドレヴリャネが^{S6}来た^{B6}ことをオリガに告げた^{F5}。そこでオリガは^{S7}彼らを自分のもとに呼び入れた^{F7}。[そして彼らに言った^{F8}, …])

これは本文中の例 (21) の少し前の部分から示したものである。伝達動詞 povēdaša^{F5}「(人々が) 告げた」の補文(接続詞 jako によって導かれる)中の pridoša^{B6}「(ドレヴリャネが) 到着した」(例 (21) では B2) が問題になる。ここで B6 は完了体アオリストによって示される瞬間的出来事であるが、時間軸上においてあきらかに F5 に先行する事件であり、アオリストの使用により F1, F2, F5 というように時間軸上で進行してきた事件をさらに前に進めるものではない。従って背景を示していると判断した。



なお、本稿では接続詞 jako, da, ašte などに導かれる節、関係代名詞 iže に導かれる節の他、小辞 bo に導かれる理由を示す節も従属節として扱った。bo については Borkovskij (1983: 130 ff.) 参照。

- 43) 但し (22) の例では a は現れていない。že はある語の後ろに付加され、その語を強調する。他の言語からもっとも近い意味の語を探せば希 *ǝē* にあたる (cf. Meillet. 1965: 484)。一方 a は前に付加され、概ね仏《et, mais》にあたる (同: 485)。Borkovskij (1983: 119) によれば、これらは「連結的なテキスト (svjaznyj tekst) の中でそれぞれの節を連結していくための形式的、統語的な手段」とされる。また že は年代記、世俗文学、旅行記などの物語的 (povestvovatel'nyj) 要素を含むテキストに、a はそのような要素が少ない実務文書 (gramota) 類に現れるという (同書: 132)。
- 44) 但し、数の上では、これは主語が交替する場合に比べそれほど多くない。§ 28, 表IVに関する議論を参照。
- 45) この点で Hopper (1979) に見える古英語の年代記の語りのスタイルが興味深い。その背景では、verb peripheral の原則、すなわち動詞は主語に先行するか (VS), あるいは直接補語に後続する (OV) という原則に従って、語りが進められるという。VS 語順の節はそれぞれのエピソードの先頭に現れ、その後続く一連の出来事が OV 語順の節で示される。当該のエピソードが比較的長く、その中が幾つかの下位のエピソードに分かれる場合 (Hopper は Cynewulf story を例としてあげる) には、それぞれの下位のエピソードが VS 語順の節で始まるつぎのようなパターンが観察されるという。

VS—OV—OV—OV; VS—OV—OV—OV; VS—OV—OV—OV; …

Hopper によれば、「場合によっては、このような区切りを行うことへの明確な動機付けが存在する、すなわちある種のテーマの交替が明らかに行われているといったこともある。しかし、このような区切りが一種の息継ぎ、あるいは恐らくは美的な効果を求めて行われているという場合も、しばしば存在する」という。本文中で見た古ロシア語の「事実叙述」タイプのテキストにおける VS 語順から SV 語順への切替えによる場面の転換も、それぞ

れの区切りによって生じる小単位の大きさの違いは考慮する必要があるものの、機能的にはこれと同様の文体的、美的な効果を求めて行われたと考えるのが妥当であろう。

なお、古英語では、古ロシア語を含むスラブ語一般で動詞のテンス・アスペクト形式を用いて行われている前景と背景の区別も語順によって行われるという。すなわち、物語の導入部で背景が示されるところでは SV タイプの語順が現れ、前景の出来事が示されるところでは VS 語順および OV 語順が現れるという。

- 46) Vlasto (1988) は現代のスラブ諸語に見られる SVO 語順を古ロシア語においても中立的な語順とし、この語順からの逸脱、例えば目的語を文頭に出すことなどは「強調効果」のためであるとする。一方で彼は、文頭や文末の位置が必ずしも真の強調とはならない可能性にふれ、本稿で問題としているような「年代記の語りにおいて、動詞はしばしば文頭の位置におかれ（本稿における VS 語順の節を指す：A. S.）、一連の行為が相互に関係づけられていることを、適度に、強調する」（同書：206）とし、自然な（SVO の）語順は例えばイヴァン雷帝にあてたヴァシリイの手紙のような特に芸術的效果を狙わないテキストに現れるとする。彼は年代記の VS 語順は特に強い強調を伴わない、書き言葉的な表現であると考えているようである。
- 47) 年代記の「事実叙述」タイプのテキストの部分は年ごとの記録に基づいて成立したと考えられる。従って、基本的にはそれぞれの年の記事によって一つの（一応）完結したテキストの単位ができあがっていると考えることができる（勿論、§ 7 に示したように、それぞれが完結した小さなテキスト単位からより大きな複合的なテキストができるのは当然である）。そこで、同じ人物が何年にもわたって登場する場合、それぞれの年の記述ごとに、あるいは同じ年の記述であっても明らかに異なるエピソードが述べられる場合には、それぞれのエピソードごとに、その人物があらたに導入されると考えることにする。
- 48) 例 (22) の *i zautra Volga⁸⁴ sēdjašti⁸⁴* 「そして翌朝オリガは塔に座り」については小辞 *ze* や *a* がないが、場面の転換が行われていると考えた。しかし、4 章で数量的な観点から考察する際には、このような場合も統計上「SV 単純構文」として扱うことにする。
- 49) Borkovskij (1968) も、イパーチー年代記においてこの遠称の指示代名詞が直前に挙げられた名詞ではなく、より離れたところにある名詞を代用している例があることを指摘している（同書：197）。この遠称の指示代名詞の、直前の節の主語名詞句を代用するという用法、すなわち現代語の 3 人称人称代名詞と同じ用法が広まったのは 15～16 世紀のことであったという（同書：196）。
- 50) 4 章、§ 30 の議論を参照。
- 51) S 6, S 7 は動詞が省略されている。
- 52) 旧約聖書列王記 10 章 1 節以下に現れるシバの女王を指す
- 53) これは次のように図示される。

F 2 F 4
 • •

B 3 —————

- 54) S 1 F 1 では小辞 *ze* が現れているが、これにより先行する「事実叙述」のテキストとの区切りが示されることが出来る。但し、「事実叙述」と「コメント」の間でつねにこのような区切りが置かれるわけではない。
- 55) Švedova et al. eds. (1980: 195–196), Raspopov (1970: 115 ff) を参照。例は Švedova et al. より。注 40) に引用した Flashner (1987) があげた現代ポーランド語の新しい登場人物の出現を示す presentative construction も同じく VS 語順の形を取っている。
- 56) 前者の例 (S 25) では *se* となって中性の形をとっているように見えるが、これは他の写本（ラヂヴィル年代記、モスクワ教会アカデミー本年代記）では *sei* となっており男性形 *sb* の異形態と考えられる。

- 57) 人称代名詞は使用されていないが、定代名詞 sam「自ら、自身」の系列が主語の位置に現れる場合には、-AZ の項に分類した。次節の表Ⅱ. で -AZ でありながら SV 語順をもつ例がこれにあたる。
- 58) 注 42) 参照
- 59) 動詞が 3 人称複数形で主語を持たず、不特定の行為主体（人間）による行為を示す構文をこのように呼ぶことにする。3 人称複数の特定の主語が省略されている場合（ゼロ代名詞があると考えられる）とは区別される。
- 60) 厳密には直前の節中に現れる斜格名詞句が先行詞ということになる。
- 61) 本稿では「事実叙述」タイプのテキストにおける VS 語順の節の優位性、また VS 語順から SV 語順の節への切替えを、書き言葉に固有の文体上の現象と考えて議論を進めてきた。しかし、何故書き言葉において VS 語順が優勢な語順となったのかということを考えると、この書き言葉における優勢な語順がより古い時代の形式を残している可能性についても考慮しておく必要がある。

Meillet (1965) は、スラブ語の語順について、動詞が文の中央に位置することは共通スラブ語ではまれであり、スラブ諸語のその後の歴史の中で広まったものと考えた。そしてスラブ語本来の語順が古代教会スラブ語の語順に反映している例として、ギリシア語 ἀκολουθεῖν「ついて行く」に対応する古代教会スラブ語の動詞 iti po「動詞《行く》+所格支配の前置詞《～の後に》」の使用を引く：a) Lc. 9. 11. narodi^{1/3} že² ... po⁵ n'emь⁵ idq⁴ <oi¹ δē² ὄχλοι³ ... ἠκολούθησαν⁴ αὐτῶ⁵「人々は彼について行った」、b) Mt. 8. 19. idq⁴ po² tebe² <ἀκολουθήσω¹ σοί²「(私は) あなたについて行きます」。ここで古代教会スラブ語の動詞句は、ギリシア語からの忠実な翻訳の結果、ギリシア語と同じ位置、つまり文末あるいは文頭に現れている。しかし、より細かく見ると、動詞そのものはつねに絶対的な文頭あるいは文末にあることが分かる。すなわち、動詞句が文末にある場合には動詞もその末尾に現れ、動詞句が文頭にある場合には動詞もその先頭に現れている。結果として a) では古代教会スラブ語とギリシア語原典で語順が異なっている。これは動詞が文頭、あるいは文末に現れるというスラブ語本来の語順が反映された結果であるという (cf. Meillet. 1965: 480–481)。

このような共通スラブ語の語順についてはじめて包括的な研究の結果を明らかにしたのは E. Berner の Die Wortfolge in den slavischen Sprachen. 1900. (Berlin: Behr) である。Birnbaum (1979) によれば、彼はスラブ語の本来的な語順について次の 6 つの規則を提示した。そして、今日にいたるまでこの一般的規則に対する大きな変更は提案されていないという (cf. Birnbaum. 1979: 195–196)。1) 定動詞は本来、文頭、あるいは文末に現れた。動詞が文の中央部に現れる SVO タイプの語順をとる文は初期には稀であったが、次第に VSO, SOV という当初のタイプの文と対等の地位を占めるようになった、2) 前倚辞 (enclitics) は文頭からみて最初にアクセントのある語によった、3) 与格は直接目的語の対格に先行した。定語としての属格は名詞に後続した、4) 定語としての形容詞は名詞に先行することも後続することも可能であった。指示代名詞も同様である。所有代名詞、所有形容詞は名詞に後続した。数詞は名詞の前に位置した。5) 不定詞は定動詞に後続し、不定詞の目的語は両者の間におかれた。一方、スピヌムも定動詞に後続するが、その目的語はスピヌムの後ろにおかれた。6) ある語が強調される場合には、この一般的規則からはずれた位置に現れることができる。

Greenberg (1963), Vennemann (1974), Lehman (1973, 1978) などにより発展した今日の語順類型論的な見方からすると、3) の属格、4) の所有代名詞、所有形容詞、5) の不定詞およびスピヌムの位置はいずれも VO タイプあるいは OPERAND—OPERATOR 型の語順、すなわち SVO あるいは VSO 語順を示唆していることになる。4) の数詞の位置については数詞を主要部とするか名詞を主要部とするかにより解釈が分かれるが

(Comrie (1981: 102 ff), Givón (1984: 223 ff) の議論参照), スラブ諸語で2以上の数詞の使用に際して名詞が属格の形をとる事実を考慮に入れて数詞を主要部と考えればこれもVOタイプを示唆していることになる。一方、4)の形容詞、指示代名詞が名詞に対して先行することも後続することも可能である点はOVタイプからVOタイプ、あるいは逆にVOタイプからOVタイプへの変化の過程を示唆すると言えよう。これらの点と1)の定動詞の位置に関する指摘を合わせて考えると、E. Bernekerの一般化によるスラブ語の語順は、SOVからSVOに変化する途中で、VSOの形が現れた段階の特徴を示していると解釈することも可能である。

Givón (1984: 205 ff.) は、かつてのSOV語順から離れていく過程にあったUte語(Uto-Aztecan語族)や、あるいは初期聖書ヘブル語を例に、VS語順とSV語順の交替が見られる言語について議論している。彼によれば、これらの言語では主題の連続性(topic continuity)という語用論的条件により語順が選択されるという。すなわち、始めて導入される主題や、非連続的で予測不可能な主題の場合にはSV語順が選択され、連続的な予測可能な主題の場合にはVS語順が現れるという。この現象が、本論で見た「事実叙述」タイプのテキストにおけるVS語順とSV語順の交替と、少なくとも表面的に似ていることは否定できない。古ロシア語における「SV転換構文」の主語は、始めて導入される主題、新情報ではないが、少なくとも非連続的な主題であり、しかもそのことを小辞 ze あるいは a の使用により強調しているからである。

このように考えると、古ロシア語の「事実叙述」タイプのテキストに見られるVS語順がスラブ語の本来的な、あるいは比較的古い時代の語順の残存物であるという可能性を完全に排除することはできない。しかしながら、『過ぎし年月の物語』の本文を読む限り、少なくとも古ロシア語のこの段階で、SV語順とVS語順の交替は、すでに語りの特別なスタイルになっているという印象は否めない。さらに、語順の変化と統語構造の関係を考えると、本文中の§27の後半で指摘した、従属節中では、通常のSV語順すなわち「SV単純構文」の使用の割合が、優勢とは言えないものの、主節に比べ明らかに大きくなっている事実も考慮する必要がある。語順が変化する時、その変化は主節から始まり、従属節中にはより古い本来の語順が保存されると考えるのが自然だからである(cf. Givón. 1984: 212)。

ここでは、古ロシア年代記の語りの部分、ここでの「事実叙述」のテキストがスラブ語の歴史的変化のある段階における語順を保存している可能性が全くないわけでもないことを示すにとどめておく。

- * 本稿は1991年12月7日に行われた京都大学言語学懇話会第7回大会における口頭発表に加筆、訂正したものである。本稿の作成にあたり、京都大学教養部ロシア語教室の木下晴世氏より必要な文献の入手に種々の便宜をはかっていただいた。コンピュータによるデータの処理にあたっては大阪外国語大学講師田野村忠温氏に種々ご教示いただき、また幾つかのプログラムを作成していただいた。ここに記して謝意を表したい。

引用文献一覧

- Barnetová, V. et al. (1979) *Russkaja Grammatika* 2. Prague: Československá Akademie věd.
Birnbaum, H. (1979) *Common Slavic: Progress and Problems in its Reconstruction*. Columbus, Ohio: Slavica.
Borkovskij, V.I. (1968) *Sravnitel'no-istoričeskij sintaksis vostočnoslavjanskich jazykov*:

- tipy prostogo predloženiya*. Moscow : Izd. Nauka.
- Borkovskij, V. I. ed. (1983) *Struktura predloženiya v istorii vostočnoslavjanskich jazykov*. Moscow : Izd. Nauka.
- Bukatevič, I. I. et al. (1974) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka*. Kiev : Izd. Ob'edinenie Viša škola.
- Comrie, B. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Dymarskaja-Babaljan, I. N. (1988) *O svjaznosti teksta*. Erevan : Izd. Erevanskogo Universiteta.
- Flashner, V. (1987) "The grammatical marking of theme in oral Polish narrative". in Tomlin, Russell S. (ed.) *Coherence and Grounding in Discourse*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins Publishing Company. pp. 131 – 156.
- Forsyth, J. (1970) *A Grammar of Aspect: Usage and Meaning in the Russian Verb*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Greenberg, J. H. (1963) "Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements". in Greenberg ed. (1963) *Universals of Language*. Cambridge, Mass. : MIT Press. pp. 73 – 113.
- Givón, T. (1984) *Syntax: A Functional–Typological Introduction*. vol. 1. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins Publishing Company.
- Hopper, J. H. (1979) "Aspect and foregrounding in discourse". in *Syntax and Semantics*, Vol. 12 : *Discourse and Syntax*. Academic Press. pp. 213 – 241.
- Ivanov, V. V. (1983) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka*. Moscow : Prosveščenie.
- Karskij, E. F. (1928). "Iz sintaktičeskich nabljudenij nad jazykom lavrent'evskogo spiska letopisi". *Sb. ORJaS* t. CI No. 3 Leningrad. (reprinted in E. F. Karskij. (1962) *Trudy po belorusskomu i drugim slavjanskim jazykam*. Moscow : Izd. Akademii Nauk SSSR.)
- (1929). "Nabljudeniya v oblasti sintaksisa lavrent'evskogo spiska letopisi". *Izv. ORJaS*. t. II, kn. 1. Leningrad. (reprinted in E. F. Karskij. (1962) *Trudy po belorusskomu i drugim slavjanskim jazykam*. Moscow : Izd. Akademii Nauk SSSR.)
- 國本哲男他訳 (1987) 『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会.
- Lehmann, W. P. (1973) "A Structural Principle of Language and its Implications". *Language* 49. pp. 47 – 66.
- (1978) "The Great Underlying Ground-Plans" in Lehmann ed. *Syntactic Typology: Studies in the Phenomenology of Language*. Univ. of Texas Press. Austin. pp. 3 – 55
- Lomtev, T. P. (1956) *Očerki po istoričeskomu sintaksisu russkogo jazyka*. Moscow : Izd. Moskovskogo Universiteta.
- Maslov, Ju. S. (1984 a) "Tipologija slavjanskich vido-vremennych sistem i funkcionirovanie form preterita v «épičeskom» povestvovanii". in A. V. Bondarko (ed.) *Teorija grammatičeskogo značeniya i aspektologičeskie issledovanija*. Leningrad : Nauka.
- (1984 b) *Očerki po aspektologii*. Leningrad : Izd. Leningradskogo Universiteta.
- Meillet, A. (1965) *Le slave commun : seconde édition revue et augmentée*. Paris : Librairie Honoré Champion, Editeur.
- Nichols, J. (1984) "The grammatical marking of theme in literary Russian", in Flier, M. and R. Brecht eds. *UCLA Slavic Studies* 11. Columbus, Ohio : Slavica. pp. 170 – 186.

- Raspopov, I. P. (1970) *Stroenie prostogo predloženia v sovremennom russkom jazyke*. Moscow : Izd. Prosveščenie.
- Rassudova, O. P. (1968) *Upotreblenie vidov glagola v russkom jazyke*. Moscow : Izd. Moskovskogo universiteta.
- Solov'ev, S. M. (1959). *Istorija Rossii s drevnejšich vremen*. kn. 1. Moscow : Izd. Social'no-ekonomičeskoj literatury.
- Šachmatov, A. A. (1908) *Razyskanija o drevnejšich russkich letopisnyh svodach*. S-Peterburg. (reprinted in Soloviev, A. V. ed. (1967) Russian Reprint Series 59. The Hague : Europe Printing.)
- (1916) *Povest' vremennyh let*. tom 1.: *Vvodnaja čast', Tekst, Primečanja*. Petrograd. (reprinted in Schooneveld, C. H. ed. (1969) Slavistic Printings and Reprintings. 98. The Hague : Mouton.)
- Švedova, N. Ju. et al. eds. (1980) *Russkaja Grammatika*. t. 2. *Sintaksis*. Akademija Nauk SSSR Institut russkogo jazyaka. Moscow : Izd. Nauka.
- Tichomirov, M. N. (1960) "Načalo russkoj istoriografii". *Voprosy istorii*. 1960 No. 5. (reprinted in Tichomirov, M. N. (1979) *Russkoe letopisanie*. pp. 46 – 66)
- Vinogradov, V. V. (1941) "Stil' «Pikovoju damy»". *Stil' Puškina*. Moscow. (reprinted in Vinogradov, V. V. (1980) *Izbrannye trudy : O jazyke chudožestvennoj prozy*. Moscow : Izd. Nauka. pp. 176 – 239.)
- Vlasto, A. P. (1988) *A Linguistic History of Russia : To the End of the Eighteenth Century*. Oxford : Clarendon Press.
- Weinrich, Harald. 1977. *Tempus : Besprochene und erzählte Welt*, 3. Auflage. Stuttgart : Verlag W. Kohlhammer. 脇阪豊他訳『時制論——文学テキストの分析』紀伊國屋書店, 1982.
- 山口巖 (1991) 「完了時称の機能」『古代ロシア研究』18. pp. 75 – 102.

使用テキスト

- Lavrent'evskaja letopis' vyp. 1 : Povest' vremennyh let*. (*Polnoe sobranie Russkich letopisej izdavaemoe postojannoju istoriko-archeografičeskoj komissieju Akademii Nauk SSSR*. t. 1.) izd. 2. (1926) Leningrad : Izd. Akademii Nauk SSSR. (reprinted in Müller, L. ed. (1977). *Handbuch zur Nestorchronik* B. 1. (*Forum Slavicum*. B. 48.) München : Wilhelm Fink Verlag.)
- Novgorodskaja pervaja letopis' staršego i mladšego izvodov*. (1950) Moscow/Leningrad : Izd. Akademii Nauk SSSR. (reprinted in van Schooneveld, C. H. ed. (1969) *Slavistic Printings and Reprintings*. 216. The Hague/Paris : Mouton.)